徳島県自然災害誌

題字　南　溪石

徳島県自然災害誌の発刊にあたって

徳島県は、豊かな農水産物を育む、温暖な気候と豊饒な土地に恵まれています。

しかし一方で、台風の来襲や、古来より繰り返し襲う「南海トラフ地震」など、幾多の災害の歴史があります。

本県の災害記録は、古くは「続日本紀」に、飛鳥時代の「長雨による稲作被害」の記述があり、また、1361年の正平南海地震の供養碑で日本最古の津波碑である「康暦碑」をはじめ、県内各地に数多くの地震・津波碑が残されており、こうした先人が残した災害の記録から、私たちは、多くの貴重な教訓を学んできました。

「徳島県自然災害誌」の前回改訂後においても、県内では、台風による豪雨や強風、豪雪などによる大規模災害が数多く発生しており、これらの記録を整理し、後世の人々に伝えていくことが求められています。

そこで、このたび、徳島地方気象台、一般社団法人徳島新聞社をはじめ、多くの方々のご協力をいただき、平成8年から平成27年までの20年間の災害記録を加え、「徳島県自然災害誌」の改訂を行いました。

昭和南海地震から70年以上が経過し、近年、東日本大震災をはじめとする大きな地震や気象災害が、全国で相次いで発生するなど、県内における大規模災害発生の危険性は、これまで以上に高まっています。

「歴史に学び」、「想定外という言葉を二度と繰り返さない」ためにも、本書が多くの方々の目に触れ、県民の皆様が災害から身を守るための一助となるとともに、防災関係機関の皆様の「防災・減災」施策に役立てば幸いです。

平成29年3月

徳島県知事　飯泉　嘉門

徳島県自然災害誌の発刊にあたって

この自然災害誌は、徳島県と徳島地方気象台が協力して原稿を作成しました。内容は、気象、水象、地象に起因した自然災害に絞ってまとめてあります。

有史以来、徳島県内に発生した主だった自然災害について、被害状況や自然の概況などを記述しました。被害状況については、古文書や県をはじめ各市町村から発行された報告書などから主に県が取りまとめ、自然の概況については、古文書に依ったもののほか、気象庁や気象台から発刊されている文献や資料に基づき気象台で取りまとめました。

この自然災害誌に見られるように、徳島県内の各地でこれまで色々な自然災害が多数発生しています。自然災害は繰り返し発生することが多く、自分たちの住んでいる地域で過去に発生した自然災害の歴史に学ぶ必要があります。また、自分たちの住んでいる地域の危険性を事前に把握しておくことも大切です。近年は、気候変動などによる影響もあって雨の降り方が局地化・集中化・激甚化し、南海トラフ巨大地震や中央構造線断層帯の直下型地震などのリスクも高まっており、万一への備えも忘れずに、正しく恐れる必要があります。

本書が、防災対策の基礎資料として、かつ、気象台や自治体などから発せられる各種の防災情報と合わせて利活用していただき、自然災害からの被害を少しでも軽減するためにお役に立てれば幸いです。

平成 29 年 3 月

徳島地方気象台長　間宮　嘉久

目　　次

684 ～ 1891 年（天武12年～明治24年） …… 11
1892 ～ 1900 年（明治25～33年）…… 46
1901 ～ 1910 年（明治34～43年）…… 54
1911 ～ 1920 年（明治44～大正９年）…… 60
1921 ～ 1930 年（大正10～昭和5年） …… 67
1931 ～ 1940 年（昭和6～15年） …… 72
1941 ～ 1950 年（昭和16～25年）…… 85
1951 ～ 1960 年（昭和26～35年）…… 102
1961 年（昭和36年）…… 122
1962 年（昭和37年）…… 128
1963 年（昭和38年）…… 132
1964 年（昭和39年）…… 139
1965 年（昭和40年）…… 144
1966 年（昭和41年）…… 151
1967 年（昭和42年）…… 158
1968 年（昭和43年）…… 163
1969 年（昭和44年）…… 170
1970 年（昭和45年）…… 174
1971 年（昭和46年）…… 180
1972 年（昭和47年）…… 186
1973 年（昭和48年）…… 193
1974 年（昭和49年）…… 197
1975 年（昭和50年）…… 205
1976 年（昭和51年）…… 211
1977 年（昭和52年）…… 214
1978 年（昭和53年）…… 217
1979 年（昭和54年）…… 220
1980 年（昭和55年）…… 225
1981 年（昭和56年）…… 229
1982 年（昭和57年）…… 233
1983 年（昭和58年）…… 242

1984 年（昭和59年）……246
1985 年（昭和60年）……252
1986 年（昭和61年）……260
1987 年（昭和62年）……264
1988 年（昭和63年）……272
1989 年（平成元年）……279
1990 年（平成 2 年）……288
1991 年（平成 3 年）……299
1992 年（平成 4 年）……307
1993 年（平成 5 年）……312
1994 年（平成 6 年）……320
1995 年（平成 7 年）……326
1996 年（平成 8 年）……335
1997 年（平成 9 年）……339
1998 年（平成10年）……347
1999 年（平成11年）……355
2000 年（平成12年）……364
2001 年（平成13年）……371
2002 年（平成14年）……377
2003 年（平成15年）……381
2004 年（平成16年）……388
2005 年（平成17年）……399
2006 年（平成18年）……404
2007 年（平成19年）……406
2008 年（平成20年）……411
2009 年（平成21年）……415
2010 年（平成22年）……418
2011 年（平成23年）……421
2012 年（平成24年）……428
2013 年（平成25年）……435
2014 年（平成26年）……442
2015 年（平成27年）……448

凡　　例

1. 本誌は資料区分を明確にするため，次の二編にまとめてある
   前代編（古代から明治２４年まで）　　古記録による洩れ
   近代編（明治２５年以降）観測資料による
2. 前代編は専ら阿波の名があるもの又は県内の記録を集めたが中には阿波の名の無い（然し確かに本県へ影響があったと思はれる）災害も含んでいる
   (1)　従って顕著災害でも本県の名が無いため，又は古記録の渉漁が完全でない等のため記録洩れとなったものも多いと思われる
   (2)　参考のために本県の災害と同日頃発生した近国の記録を注記した。
   (3)　月日の新旧歴対照は神田茂編“年代対照便覧”によった。
   (4)　尚古文は往々漢文を使っているが，これは文意をこわさない程度にかな書き又は略文字に変えた。
   (5)　本文を理解するための時刻方角の対照表

方向	北			東			南			西			
	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	時間
	九ツ	八ツ	七ツ	六ツ	五ツ	四ツ	九ツ	八ツ	七ツ	六ツ	五ツ	四ツ	
	0	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	

3. 近代編は主に徳島測候所の資料によった（徳島測候所は明治 24 年 4 月 1 日業務開始）
   (1)　従って文中に出る気圧，気温，日照，風速等は殆んど徳島の値であり雨量のみ県下の観測点のものを示した
   (2)　文中所々に出る平年値というのは測候所創設以来 70 年間の平均値（累年平均値）をいう［最近の比較をいう場合は，平年値として 30 年の平均をとるのが定めになっているので，本文でいう累年平均値とは違うことを注意されたい］又極値の月（又は年）順位も 70 年間について云う（巻末の徳島に於ける極値表を参照にされたい）
   (3)　台風経路図で特に太線になっている部分は徳島の風速が 15 米以上の区間であり，又棒グラフは徳島の時間雨量を示す。
   (4)　昭和 21 年から気圧の単位が mm（ミリメートル）から mb（ミリバール）平成 4 年 12 月から hPa に変わった。なお，mb と hPa の指標は同じである。

mm	750	745	740	735	730	725	720	715	710	705	700
mb	1000	993	987	980	973	967	960	953	947	940	933
hPa	1000	993	987	980	973	967	960	953	947	940	933

   (5)　被害で単位，内容の明瞭なもの又は前に用いた単位と同じもの等は略してある。
   (6)　米麦収量は凡て反当桝目（石斗升）で示したが最近は重量換算になっている，即ち米 1 石 ＝ 150.0 キログラム，小麦＝136.875 キログラム，大麦＝108.750 キログラム，裸麦＝138.750 キログラム

熱帯低気圧の分類及び台風の大きさ・強さの表現

1. 熱帯低気圧の分類

気象庁では、熱帯の海上で発生する低気圧（熱帯低気圧：英名Tropical Cyclone）のうち北西太平洋域において中心付近の最大風速がおよそ17m/s以上のものを「台風」と呼び、それに満たないものを平成12年5月31日までは「弱い熱帯低気圧」（英名Tropical Depression）と表現していました。

平成12年6月1日以降は、防災上の観点から、「弱い」という形容詞を削除し、単に「熱帯低気圧」と表現しています（表1参照）。

表１熱帯低気圧の分類

	域内最大風速（m/s）	17未満	17以上 25未満	25以上 33未満	33以上
平成12年5月31日まで	和名	弱い熱帯低気圧	台　風		
	英名	TD	TS	STS	TY
平成12年6月1日以降	和名	熱帯低気圧	台　風		
	英名	TD	TS	STS	TY

（注）TS:Tropical Storm、STS:Severe Tropical Storm、TY:Typhoon

2. 台風の大きさ・強さの表現

表2、3のとおり、平成12年5月31日までは、台風の「大きさ」を「強風域（平均風速15m/s以上の強い風が吹いている範囲）」の半径で、「強さ」を「最大風速」でそれぞれ5段階に区分し、台風情報の中では、これらを組み合わせて、例えば「大型で強い台風」のように表現していました。

平成12年6月1日以降は、防災上の観点から「小さい」、「弱い」という階級表現を削除し、形容詞を付けずに単に「台風」と表現しています。

この結果、台風の「大きさ」については、「台風」、「大型の台風」、及び「超大型の台風」の3段階で表現しています。同様に、台風の「強さ

についても、「台風」、「強い台風」、「非常に強い台風」及び「猛烈な台風」の4段階で表現しています。

表２大きさの表現

強風半径（KM）	200未満	200以上 300未満	300以上 500未満	500以上 800未満	800以上
平成12年5月31日まで	ごく小さい	小型（小さい）	中型（なみの大きさ）	大型（大きい）	超大型（非常に大きい）
平成12年6月1日以降				大型（大きい）	超大型（非常に大きい）

表3強さの表現

強風半径（KM）	17以上 25未満	25以上 33未満	33以上 44未満	44以上 54未満	54以上
平成12年5月31日まで	弱い	なみの強さ	強い	非常に強い	猛烈な
平成12年6月1日以降				非常に強い	猛烈な

アメダス観測地点名の表記

アメダス観測地点の名称は市町村合併により下表のように変更しています。
また、移転や廃止などのため、観測地点により観測している期間に違いがあります。

観測地点名	記載用アメダス名称
大山寺	上板町大山寺（平成 20.3.19 まで観測）
池田	**池田　→（平成 18.3.1 以降）三好市池田**
穴吹	**穴吹　→（平成 17.3.1 以降）美馬市穴吹**
徳島	**徳島市**
半田	**半田　→（平成 17.3.1 以降）つるぎ町半田**
旭丸	神山町旭丸（平成 21.11.20 まで観測）
京上	**東祖谷山村京上　→（平成 18.3.1 以降）三好市京上**
福原旭	**上勝町福原旭**
太竜寺山	阿南市太竜寺山（平成 20.3.19 まで観測）
蒲生田	**阿南市蒲生田**
木頭	**木頭　→（平成 17.3.1 以降）那賀町木頭出原**
日和佐	**日和佐　→（平成 18.3.31 以降）美波町日和佐**
海陽	**海陽**
宍喰	宍喰（平成 21.2.18 まで観測）

※太字は平成 29.3.1 現在で観測している地点です。

684～1891年

［天武 12 年～明治 24 年］

西暦	邦暦	災　異	記　　事
684	天武 12	地　震	10.14(11.29)※［注］本県の記録は無いが地震及び津波被害のあったことは下記から判る　［理科年表］南海道沖地震，民家多く倒る，土佐の田苑 12 平方キロ海となる，津波あり(134　32.5※※) ［注］白鳳の地震と呼ばれ，歴史に登場する初めての南海道地震。震源は北緯 32.5 度・東経 134.0 度，マグニチュードは 8.4 の巨大地震である。この地震により土佐湾ができたという。また，このとき土佐の海岸に初めて見る深海魚が打ち上がり，この魚を舐めた少女は 800 才まで生きたという「八百比丘尼」の伝説が生まれた地震であると伝えられる。
697	文武 1	飢	［続日本紀］阿波淡路さぬき等 8 国※※※飢える　閏 12.7(1.25)これをにぎわしめぐむ又負税を免ず
702	大宝 2	飢	［続日本紀］阿波(外七国)飢える　9.12(10.17)使を遣はしてめぐむ
704	慶雲 1	長　雨	［続日本紀］4.27(6.5)阿波等 4 国苗損ず　並びににぎわし救う ［注］当翌年干飢の国多し
706	3	飢	［続日本紀］7(8)月(西海道を除く)六道飢え使を遣はし並びにこれをにぎわし救う
733	天平 5	干	［続日本紀］閏 3.2(4.20)紀伊淡路阿波等国(前年)干にあい殊に甚しく五穀実らず宜しく今年の間大税を惜し産業を続かしめよ
734	6	地　震	［理科年表］4.7(5.18)死者山崩れ多し(伊賀地方か) ［注］［続日本紀］に百姓の家壊れ圧死者多く山崩れ河ふさぎ地往々裂けあげて救うべからずとあり［阿波志］にも同文をのせるが震央が遠く又非常に強くもなかったので本県えの影響は少いと思はれる
762	天平宝字 6	飢	［類聚国史］8.23(9.15)使を遣はし阿波讃岐両国を取調べ飢民に給す
763	7	飢	［続日本紀］7.26(9.7)備前阿波二国飢える　並びにこれをめぐみ又使を遣はしめぐむ ［注］［日本凶荒史考］5 年五穀登らず 6 年霖雨今年また五穀熟せずために諸国飢疫して死者多し
764	8	飢	［続日本紀］4.16(5.22)干阿波讃岐伊予三国飢え並びにこれをにぎわしめぐむ
765	天平神護 1	飢	［続日本紀］3.16(4.10)左右京及び阿波等 10 国飢える　これをにぎわしめぐむ
781	天応 1	飢	［類聚国史　阿波志］阿波飢える
790	延歴 9	飢	［続日本紀］4.5(5.23)阿波等 14 国飢える　これをにぎわしめぐむ ［大日本史］阿波飢ゆ　［注］［続紀］5，6 月干
798	17	飢	［日本後紀］3.10(4.19)伯耆阿波讃岐等国飢え使を遣はしてめぐむ ［類聚国史］6.5 詔して去年の田租を特に全免す［日本紀畧］9.23 阿波国飢え使を遣はしてめぐむ
802	21	風雨	［類聚国史］紀伊淡路阿波讃岐等 10 国田を損し百姓の負税を免す
805	24	飢	［日本後紀］12 月阿波等 21 国当年の税を免ぜんことを請う　これを許す
823	弘仁14	飢	［類聚国史］7.19(8.29)美濃阿波 2 国飢病を言上す　百姓をにぎわしめぐむ

※　本書では邦暦（西暦）で月日を表はす　両歴の対照は神田茂編年代対照便覧による
※※　東経　北緯を表はす　　※※※原文には国名をあげるが本書では極く近国以外は省く

西暦	邦暦	災　異	記　　事
833	天長 10	飢	［続日本後紀］5(5)月京師五畿内七道諸国飢疫
837	承和 4	干	［続日本後紀］9(10)月今月一日より干ばつ 30 日五畿内七道被害を申出るもの 31 国　［注］阿波の名はないが淡路伊予あり
866	真観 8	風波	［三代実録］4.7(5.24)尾張阿波両国風浪百姓飢饉尾張国正税稲 6 万束阿波国 8 万束を惜し民を救う　六月天下大干飢餓多し
886	仁和 2	水	［吉野川一元西林村古記録］8(9)月大洪水で河道岩津の南に変る ［注］8.7(9.8)京都大風水の記事あり
887	仁和 3	地震 （津波）	［理科年表］7.30(8.26)庁舎転倒し津波あり死傷多し（南海道東海道沖）（135.3 33） ［注］本県の記録はないが次の記事でその規模が判る ［三代実録］申刻地大いに震動す数刻を経て尚止まず　東西京の家往々転ぷくし圧死する者多し或は失神頓死する者あり　亥刻又震うこと三回夜東西に声あり雷の如きもの二回　是日五畿内七道諸国地大いに震い官舎多く損す且つ海潮陸に漲ぎり溺死する者記す可からず其中摂津最も甚し
946	天慶 9	甘露	［洞院家紀］6.23(7.24)阿波国甘露降ると言上
1098	承徳 2	水	［吉野川一元西林村古記録］大洪水　岩津の岩浜現れる
1150	久安 6	風水	［日本凶荒史考］8(8～9)月この年風水諸国飢荒す ［台記］阿波土佐讃岐等 11 国稔らず　［注］8.4 及び 8.20 京都風水の記事あり
1153	仁平 3	干	［台記］阿波土佐等 7 国稔らず(翌 5.23 申す)
1181	養和 1	干，飢	［注］本県記事はないが［日本凶荒史考］に　去年春夏炎干甚しく加うるに諸源氏ぼつ興，各地騒乱するを以て農耕時を失い道路また塞す，ために諸国大いに飢えこの年よりは疸疾並び発し地方偏すうにあって活計を失なうもの出て諸方を流浪す然るに帝都は兵馬の中にあり救恤の事なく諸院蔵人或は僧綱有官の輩にして尚餓死する程なれば一条より九条京極より朱雀に至る間に死するもの四万二千三百と注せられ，市中人相食むの惨あり放火強盗大に行はれ翌寿永元年秋に至るも尚止むところを知らずとあり
1185	文治 1	風	2.18(3.21)［保歴間記］範頼義経渡部神崎に着く義経は阿波国に渡り範頼は山陽道を長門え向う　義経大風なりけれど我舟 5 そうを出し渡られけり　残りの舟は梶原に恐れて出さず三日に渡る処を只三時に阿波国八間の浦にぞ吹付たる
1230	寛喜 2	風雨	［阿波志］九月田損う　8.28(10.6)紀伊　9.8(10.15)近畿関東風水あり ［注］［日本凶荒史考］この年夏秋寒冷，諸国六月雪降り七月霜あり八月風水稼穀大いに損し草木枯れること冬の如し　加うるに冬温暖にして筍生じ麦黄熟す　また蝉　ひぐらし等才末に至るも声を収めず時候の戻和甚しきこと古今未曾有諸国大いに飢荒す　越えて翌 3 年春より疫病並び行はれ飢疲して死するもの極めて多く京中餓死者道路にみち餓民或は禁中の饌を奪うありその惨状治承養和以来と称せらる
1259	天正 1	飢	［注］本県の記事はないがその惨状は上記の 1230 年に劣らなかった

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1259	天正 1		様で［日本凶荒史考］に　これより先正嘉元年干ばつ甚しく同二年陰冷六月寒風冬の如く秋風水の災ありて連年登らず　加うるに此年より飢疲並び行はれ諸国死するもの極めて多く或は人相食むの惨あり餓死者道にしき翌文応元年秋に至るも尚止むところを知らずと 尚　上記と同程度の大飢饉の記事を［日本震災凶饉攷］から拾うと大凡次の様になる 1200 年代 5，1300－5，1400－16，1500－5，1600－3，1700－2，1800－0
1361	正平 16	地震 （津波）	6.24 (8.3)［理科年表］摂津阿波に津波被害あり流失家屋死者多し（南海道沖）（135, 33）［大日本地震資料一参考太平記］中にも阿波の雪湊と云う浦には俄に大山の如き潮漲り来りて在家千七百余宇悉く引汐に連れて海底に沈みしかば家々に有る所の僧俗男女牛馬鶏犬一つも残らず底の藻屑と成りにけり ［阿波志］地大いに震い難波津の海溢れ鳴門の潮かる　雪池は東西由岐村間にあり康安元年（正平 16 年のこと）地大いに震い海わき，全村蕩尽す　6.16 より地震 10 月に至る　地裂けて池となる長さ 220 歩，径 100 歩，太平記を見るに正徳中 4 分を以て西村となし 6 分を東村とす，風波起る毎に村民船をここに置く。 ［注］有名な東由岐の古碑康暦碑は此時の遭難者を供養したもので阿波志に「康暦二庚申十一月十六日海翻震盪死亡甚大合葬于此」とあり，海部郡誌によれば碑面には 60 名の戒名を記載す（康暦 2 は地震後 19 年目）
1363	正平 18	飢	［日本凶荒史考］阿波国飢える［知覚普明国師行業実録］二月阿州に行く時に国中大飢途に餓死者多し師粥を貧人に施す, 乞う者連日, 太守以下の官吏喜んでこれにならい蘇生するもの少なからず
1420	応永 27	干 , 飢	［注］本県の記事無いが大飢饉は翌 28 年及び 31 年にも発生した。［日本凶荒史考］に　去年関東屢々風水の災ありこの年諸国干畿内西国特に甚しく淀川乾涸して渡船なし　ために農稼焦枯して大いに飢荒す。 超えて 28 年春より疫病行はれ天下飢疫して死する者多く京落死骸を踏みて通行すと云う。
1460	寛正 1	飢	［注］本県の記事なし，翌 2 年に続く大飢饉で［日本凶荒史考］に去年夏秋炎干のち屢々風水の災あって登らず，時兵乱の故を以て道路ふさがれ天下飢窮す　この年淫霖五六月陰冷冬服を着するの時候の戻りあり蝗虫風水の災累りて大いに凶荒し飢疫並び行はれ諸国死するもの多く就中備美伯三国大飢して人相食むの惨あり京落また甚しく寛正二年夏に於ける路上餓死者八万二千と称す。
1483	文明 15	洪水	［徳島県史料年表※］による　但し近国に記事が見当たらない
1512	永正 9	津波	8.4(9.13)［注］この日地震なし又風水害なし或は外国地震による津波か［宍喰浦旧記一宍喰村の内久保村古城成立旧記］八月洪浪入みち右所の分残らず流失いたし候　其節所の城山へにげ上がる者数十人なり，南の橋より向の町分も残らず流失，然れども此所は山近故多くの人死もこれ無く候，橋より北分は町家多くいたみも之れな

※　徳島県史編さん委員会が昭和 37 年 1 月発行
本書ではこれから引いたものが極めて多い　以下［徳島年表］と略記する。

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1512	永正 9		く候へども死人多くこれあり候　凡そ其の節両町の人老若男女共三千七百余人なり橋より向うの町一家も残らず流失其上屋敷土地尽く堀流れ一面川になり，住居なりがたく助命の者皆々当浦へ相集り所の城主藤原朝臣下野守元信公同宍喰村城主藤原朝臣孫六郎殿お取立てこれあり， (宝永 4 年 1707 の地震津波記事中宍喰浦旧記参照)
1578	天正 6	長雨	［徳島年表］この年長雨
1579	7	水	［阿波志］8(9)月大水去らざること三日畜多く死す　近国に記事なし
1582	10	水	［阿波志］9.5(9.21)尚長曽我部元親の大軍細川真之を勝瑞城に攻めた時吉野川大洪水で土佐軍は経験なく意外の出来事に非常に混乱した伝説あり(金沢治)
1584	12	洪水	［徳島年表］月日不明 ［注］尚［阿波志］に記載のこの年 11 月 29 日の地震は飛騨の大地震であるから徳島ではそれ程被害はなかったと考えられる
1594	文禄 3		お亀磯陥没の伝説 ［注］お亀磯は［徳島市津田町の沖合約 4.5 キロにあり最低潮時に水面に現れる程度である］かってお亀千軒のにぎやかな島であったが不敬の者があってある日にわかに電雷震動して山のような大波が打寄せ見る間に全島陥没した。福島四所明神，八万潮見寺はこの島から移したものであるという，尚一説には大同 2 年（807）となっている（その年秋田で松峰陥没の伝説あり） これは日本各地にある千軒伝説の一つと思はれる　菊池寛の戯曲亡兆にこの話を書いている尚この日の地震記録はない，この 2 年後の 1596 年 9.4 に別府湾に津波あり爪生島沈下死者 708 を出した
1605	慶長 9	地震 (津波)	12.16(1.31)［理科年表］死 5,000 大津波あり土佐宍喰で溺死 3,800 房総半島 4Km 余り干潟となる（二元，一は南海道沖他は房総半島沖） (134.9 33)(140.4 34.3)［宍喰浦旧記］辰半刻（9 時）より申上刻（16 時）まで大地震にて酉の上刻(18 時)月出の頃より大浪入来り海上凄じく惣浦中泉より水湧出る事二丈余上り地裂け沼水湧出言語に絶えたる大変にて其頃皆々古城山に逃登る。人数百七十余人，老小は道にて浪に打倒れ皆々流死町家寺院等流れ又倒れ悉く破失，諸道具混乱又は地に打埋れ所一尺或土地により二尺三尺砂に埋れ十七端帆十五端帆の廻船数艘日比原在より奥へ流込み，其外小船等正梶井関へ懸り有之也 山野にて飢を凌ぎ三日三夜ほうろくにて食を煮焼命繋ぎ霜雪に閉衆人困窮いう方なく溺死一千五百余人，翌十七日辰刻より山下り見るに城山より西北方一面人々の死骸目も当て難く，北往還道筋も同様にて其節久保在所内に二ヶ所惣塚にて死骸埋め其後地蔵石仏建立す祇園山西山際也 ［鞆奥町大蓮華弁碑文］南無阿弥陀仏　敬白右意趣者人王百十代御

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1605	慶長９		宇慶長九甲辰季十二月十六日未亥刻　於常月白風寒凝行歩時分　大海三度鳴人々巨警拱手処逆浪頻起其高十丈　来七度名大塩也　剰男女沈千尋底百余人　為後代言伝奉興之　各平等利益者必也　［寛文4(1664)建てる］
1615	元和１	風雨	4.27(5.24)蜂須賀至鎮大阪出陣の際景風雨にあい沼島に避難
1626	寛永３	干	［徳島年表］　　［日本凶荒史考］この年干諸国飢荒す
1632	9	干	［蜂須賀家記］この年干　有司に命じて窮民をめぐみ救う　讃岐干
1642	19	飢	［徳島年表］四国九州東北飢える
			［注］［日本凶荒史考］に　去年今年諸国長雨陰冷秋稼登らず殊に奥羽北陸の地十七年より連年飢荒して餓死するもの多く或は人相食むの惨あり士民工商等一衣まとうなく赤裸のまま流離す幕府令して飢者を助けて郷里に帰らしめまた仮屋を設けて収容し郷村の酒造等に穀類の消耗するを停め屢々下令して農耕を督励せり　とあり
			［徳島県史科年表］によると当年の米価は平時の2，3倍に高騰し又翌年に亘り農食に雑穀を用い米多く食はぬよう申付けが数回出ている　この時不正官吏豪商等の米価つり上げがあり処断されている
1648	慶安１	火	［徳島年表］11.14(12.17)沖洲浦類焼により八軒船屋焼けお召船六そうを失う
1662	寛文２	風雨	［徳島年表］6.29(8.13)－7.2 御国大風雨　さぬき土佐紀州とも大風雨水
1663	3	火	［徳島年表］1.28(3.7)那賀郡橘浦焼失
1667	7	〃	［阿波志］7.29(9.17)内坊火く紀伊国町に発し稲田氏に及ぶ町をあげて悉く焼く
1673	延宝１	水	［横瀬町史］9.13(10.22)勝浦川大水，坂本の長福寺前から南川内村まで川成
1674	2	風雨	［山鹿素行日記］8.17(9.16)四国，中国，九州各大風高汐，東海道又洪水
		飢	［徳島年表］那賀郡飢きん米一石75匁と約2倍の高値
			［注］［日本凶荒史考］に　この春干夏秋屢々風水あり諸国大いに飢荒が死者多し
1675	3	火	［阿波志］3.2(3.27)内坊火く新町に発し魚町に至る凡そ154戸
1678	6	風雨	8.5(9.20)［山鹿素行日記］4，5日大雨終日止まず　4～6日の間西国四国洪水大風　［徳島年表］四国，九州洪水
1680	8	飢	［徳島年表］不作飢民多し
			［注］［日本凶荒史考］に去秋(1680)風水冬厳寒雪多く諸国荒飢すこの年また気候順ならず風水の災ありために穀価とうきして窮民飢死する者多し中にも京畿地方最も甚しく翌年に至りが死者道にあまねしという
1681	天和１	凶	［高原村史］
1682～3	２～３	飢	［徳島年表］大ききん　3年4月干害水害について補助法出る
1685	貞享２	火	［阿波志］3.6(4.29)新町火く免許町に発し淡路町に至る凡そ467戸

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1685	貞享２	火	［注］　この頃の徳島の家数 1,558 人口 20,590（徳島年表）
1687	4	水	9.9(10.4)［阿波志］九月大水禾を傷う［蜂須賀家記，井内谷村誌］風雨 ［注］中四国，近畿其他大風雨水
1688	5	火	［徳島年表］1.26(2.27)大工町より出火西船場悉く火き翌朝鎮火 261 戸
1689	元禄２	水	［阿波志］8(9)月勝浦川大いに溢る　　近国記事なし
1695	8	水	［神山町広野村川成引帖］8.26(10.3)鮎喰川洪水　近国記事なし
1698	11	火	［富岡町史－文珠院記録］1.21(3.2)町分皆々残りなく焼け尽す
1700	13	水	［川成引帖］4.11(5.29)鮎喰川洪水　　近国記事なし
1701	14	水	［川成引帖］7.10(8.13)亥刻より大雨三昼夜　神山町下郡右左山全戸流失　田畑砂入　　近国記事なし
		風雨	［徳島年表］8.17(9.19)御両国大雨洪水　［神領村誌］10 日程雨降りつづき山崩れ川筋変はる　［吉野川］舞中島全戸流失四国近畿以東の大風雨水
1703	16	風雨	［徳島年表　名東郡誌］大雨大洪水（月日不明）8.19(9.29)伊予に大風雨あり
1707	宝永４	地震 （津波）	10.4(10.28)［理科年表］潰家死傷おびただし（潰家 29,000 死 4,900） 九州南東岸より伊豆まで津波，土佐ではその高さ 20m 余り，土佐西南部処々陥没南東部隆起（東海道及び南海道沖）(135.9　33.2) ［阿波志］地震汐大いに溢れ瀕海並に溺す　十一月以て聞す。 ［宍喰浦旧記］　宝永四亥年十月四日巳下刻大地震にて弱家土蔵壁落ち鴨居離れ所により辻町裂け沼水湧出衆人周章て愛宕山へ逃上り候所午の下刻忽大潮入来り浦中家蔵流失溺死人男女十一人　浦中漁船漁具不残流失　土佐屋五郎兵衛と申者の船十一端帆願行寺南の畑へ流れ上り　尤寺地残り候へ共大に痛み座上へ汐二尺余りも上り久保村家多流失祇園山へ逃上り助命致す也　此時一時計大地震にて土地によりさけ水湧出，川井水など水大而，しばらく有て川泉不残水引乾　海底も遙に干潟となり夫より大汐箭を射る如くうち来る　其以前干続き十月最初甚暖気強諸人単物着用　其日は風もなく晴天にて雲なく静なる日の事なり。永正九年の大潮には愛宕山に城有戸井門の大手大門あり是閉ける故城内山へ入事ならず死人多く有之由慶長潮は潮の入候事に諸人心不付立騒逃候事遅く溺死人多く有之由宝永潮には諸人心得速に逃候故流死人無数よし云伝ふ ［鞆奥町小連華弁］宝永四年丁亥冬十月四日未時地大震后海潮湧出丈余蕩々穿陸反覆三次而止　然我浦無一人之死者可謂幸矣　後之遭大震者予慮浦潮之変而避焉則可［牟岐町八幡社奉納板書］宝永亥の年初冬四日未の刻大地震振て人皆肝を冷し魂消なんとす　かかる時は必ず津浪の災ありと云伝へ古き書にも見えしが果して刻を隔てず静なる海原忽騒て洪波怒が如く浦里を過て仏閣民家七百余宇流れ失せ老若男女百十余人溺れ死す（以下畧） ［野村家伝来記（那賀郡見能林村）］宝永四年亥十月四日昼四ツ時より大地震四ツ半時に収まる　大地一面に割れ家木乱崩れ高山より大

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1707	宝永４		石落重なりさながら天より落雷掛るに貴賤生たる心地なし　九ツ時誰かいうとなく大浪打来たる高き山に逃れよと云う　時しもあれ早や川に自波立ち大波見えければ我も～親は子を連れ子は老いたる親にかしづき右往左往に逃登るさま何にたとえん方なし，程なく一番津波峯麓は大荒神馬場先まで二番波馬場中程まで　夷山にて高さ一丈余り…一番波行くやいなやここを先途と津峯え逃る　然れ共三番波立にて後波無し，地震は折々少し宛ゆること数日なり，下福井，橘浦，答島村より流れ出でる家海上に満々たり ［注］上記の外撫養町旧記，三岐田町誌小坂元日堂記，橘浦森家文書，浅川稲観書，海部郡四方原村野村家文書等記事あり，尚隣国土佐の［谷陵記］に徳島　士屋敷 230 軒民屋 400 軒地震につぶる　潮入はなし　黒土浦郷共潮入亡所　富岡浦郷小破橋半亡所　泊浦小破　井佐より志和木までは亡所不知　由岐両浦共亡所溺死夥し浅川在家大形流失死人少し　海部堅浦事なし　鞆小破宍喰亡所死人少し　とあり
1709	宝永６	風雨	［宍喰浦旧記］7.4(8.9)風雨高潮　　近畿大風
1710	7	風雨	7.26(8.20)［里浦村誌］17 日出水　26，7 日大風雨潮打年貢御免のことなり ［注］近国記事なし
		干，飢	［徳島年表］大干ききん　［注］高松藩記六月より七月干
1711	8	飢	［徳島年表］那賀郡飢きん
1716	正徳６	火	［海部郡誌－池内氏系図書］4.8(5.28)浅川浦大火　漁家商家二百余戸を火き浦中焦土となる
1717	享保２	干	［徳島年表］那賀郡
1718	3	干	［徳島年表］大干　［注］高松藩記七月八月大干
1721	6	風雨	［蜂須賀家記］八月風雨敗禾　［徳島年表］8.10～15(9.30～10.5)御国風雨洪水につき御地方 90,055 石余御損亡流家 99 軒流死男 8 女 1 馬 30 牛 68 ［注］同日近国記事なく閏 7.15(9.6)中四国近畿中部関東に大風雨水あり或は誤りか
1722	7	水	［蜂須賀家記］六月より八月屢々大雨傷禾漂人家四百三十余［徳島年表］6.23(8.4)御国風雨洪水につき御地高 83,375 石余御損毛　潰家 311 戸溺死男 1 流失牛馬 6　四国山陰東北に風雨洪水
		水	7.10(8.21)［徳島年表］御地高 53,610 石余御損毛　潰家 40 流家 5 溺死男 2 流死牛馬 3　伊予に洪水あり
		火	［阿波志］7.12(8.23)大倉所火く　延て会議所に及ぶただ外門火けず
		水	8.23(10.3)［徳島年表］御地高 37,567 石余御損毛　潰家 93 溺死男 2 女 1 ［注］伊予，さぬき京都に記事あり
1724	9	火	4.16(5.8)［徳島年表］雨天寅刻過より内町三丁目浜屋孫三右ヱ門より出火左右火け片側一丁焼失
		干	［蜂須賀家記］夏大干傷禾［徳島年表］当夏御両国干ばつ御地高 161,170 石余御損毛

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1724	享保９		［注］阿波志には傷禾 161,770 石，11 月以て聞すとあり　又高松藩記には閏４月より７月まで大干とす　西日本一体の干ばつ
1725	10	火	［徳島年表］2.27(4.10)風雨亥刻通町小横丁中程より出火左右え焼け東の方一軒残し西の方壺尾家にて焼止り丑刻過鎮火
		干，虫	［蜂須賀家記］夏(7～9)大干傷禾［阿波志］二州大干且つ蝗　傷禾 116,130 石　正月をもって聞す［神領村誌］干蝗害　飢人多 ［注］この干ばつは西日本東北で発生，尚本県では翌年にも大干蝗害とあるも隣国の記事見当らず
1726	110	火	［徳島年表］12.10(1.2)日和佐村同浦共焼失
1726	11	干，虫	［阿波志］夏二州大干且蝗　傷禾 96,090 石　12 月以て聞す
1727	12	火	［徳島年表］10.7(11.19)内町焼失　新町より魚店まで
1728	13	風雨	［阿波志］秋二州大風雨　海溢れ傷禾 94,150 石 ［注］讃岐伊予には 8.4(9.7)に風水あり　九州　中国　中部　関東
1729	14	火	［徳島年表］2.4(3.3)木岐浦焼く
		風雨	［徳島年表］8.19(9.11) さつま備前京都に記事あり
		風雨	［蜂須賀家記］9.14(10.6)大風雨傷禾　［阿波志］秋大水傷禾 23 万石閏９月以て聞すとあるが［徳島年表］には 174,370 石余損毛となる四国中国京都大風雨水
1730	15	風雨	［徳島年表］秋風雨御地高 127,050 石余損毛 ［海部郡野村文書］※7.24(9.6)晩より 25 朝まで大風　所々の家過分に潰れ松原御林浜松 34 本余りも根かえり百年来にも覚え申す者無之，海よりりょう火と申す火吉野林前まで飛申す［那賀教育］秋洪水那賀郡飢きん ［注］土佐さぬき大風洪水北陸にも及ぶ
1731	16	風雨	［野村文書］7.11(8.13)大風水　　13 日遠江大風あり
		風雨	［蜂須賀家記］8(9)月風雨傷禾［阿波志］秋二州大風且雨　傷禾 125,059 石　９月以て聞す　　8.10(9.10)に諸国風水記事あり
1732	17	虫，飢	［阿波志］夏二州蝗傷禾 63,950 石　12 月以て聞す ［野村文書］秋うんか大発生下灘飢人 7,000 四方原 200 追々餓死 ［麻植郡誌］50 年来の大飢きん藩の財政窮乏［神領村誌］485 人に麦を借す ［注］［日本凶荒史考］に去冬寒気薄く気候順ならず此年春より六月まで屢々降雨淫湿のち陰冷行はる　この頃より九州四国中国に蝗害起り漸次畿内に波及し公私領その災に罹るもの極めて多く収穫半に充たざるもの 46 藩を算し九州最も甚しく所により収穫皆無に終わり，幕府諸侯及び家士に金銀を恩貸すること三十四万余両米穀を賑貸すること三十四万余石に及び一方にては金品の義捐を勤誘しまた時疫食毒の処方を頒ち以って救荒の万全を期したり，これより先，諸国連年豊熟穀価低落せるを以て土農困窮す，諸侯またこれに同じければ米穀をさげすみ力めて外に出しついで凶才に遭う故を以て救荒の法良しきを得ず公領の餓死者出さざりしに比し飢疫して死するもの極めて多し　という

※　海部郡四方原村野村家文書は庄屋野村七左エ門の家記で 1636 ～ 1774 に及ぶ　以下野村文書と署す

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1732	享保 117		［月堂見聞集］に　当年は風雨時を得，五穀豊年のところ西国表の国々稲虫にうんかという虫生じ次第次第に隣国え移り　五畿内近所まで参り候其虫後には形大になり候，こがね虫のように成候，西国方言此虫を実盛と申候，甲冑を帯したる形にて羽あり一夜の間に数万石の稲も喰候由これにより俄に米穀 65 匁に売買仕候，極月に至ては百二三十匁位になり申候とあり［徳島年表］によれば米価一石平生 3,40 匁のところ 8,90 匁に騰貴した。幸い本年北陸東北で豊年だったので徳川幕府はこれを被害地え廻送し救済に務めた　同年表翌年の記事に去年より西国四国中国飢人 950,990 人とあるも［虫付損毛留書］によれば 969,946 人（外に餓死人 7,448 牛馬 2,353）とあり内訳は伊予，安芸，備後，出雲肥前，豊後，豊前，筑前，日向，石見，備中等で伊予最も甚しく飢人 24 万，死 5,818 人，を出した尚［野村文書］によると翌年救済米の陳情と四方原村餓死人 14，5 名の記事あり
1733	18	病	7(8)月［徳島年表－阿淡年表］この頃世上一統風病流行煩はざる者なし，勤番の諸士漸く 3，4 人　4，5 日にて快気　江戸中往来一両人に過ぎず ［注］この記事は［柳営年表秘鑑］と甚だ似ているのでこれから取ったものであろう　尚［一言一話］にこの年六月より秋半に至り全国疫病流行し摂津和泉河内は春より時疫行はれ大阪市中の患者 16,046　死亡者 3,623 癒者 9,429，六月現在患者 3,994 人とあり
1738	元文 3	風雨	［徳島年表］6.26(8.11)御国風雨出水につき御地高 73,495 石余御損亡流死 1 ［注］この日紀州風雨
		風雨	［徳島年表］8.12 及び 17(9.25, 30)御国風雨洪水御地高 69,119 石余御損亡　流死男 1 牛 6 12 日讃岐　17 日紀伊に風水あり
1739	4	風雨	［徳島年表］8.5(9.7)御国風雨出水御地高 97,954 石余御損亡流死男 4 女 4 馬 1 牛 1 ［注］九州四国山陰奥羽大風雨
1740	5	水	［徳島年表］7.1（7.24）大洪水損亡 51,430 石 5 斗 4 升余　山崩圧死男 4 女 2 流死 ［注］1，［徳島年表］によれば閏 7.1（8.22）となっているが同日は越前美濃に風雨あり，一方 7.1 は讃岐風雨なので此の日を取る。 2，元文 2 ～ 5 年諸国に凶作風水あり，［木頭村誌］にむしろまで食うの記事あり
1741	寛保 1	風水	［徳島年表］7.21(8.31)御両国風雨出水につき御地高 90,269 石余御損毛
	2		［注］鹿児島四国近畿大風雨水
1742		火	［徳島年表］2.8(4.15)申刻海部郡鞆浦出火家数 298 軒寺 2 軒社 1 ヶ所焼失

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1742	寛保２		えびす段より出火東分残らず焼失（鞆奥町史）
1746	延享３	風雨	［徳島年表］8.24(10.8)風雨洪水 56,318 石 1 斗御損亡［野村文書］大風［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　　四国山陰の風雨
1748	寛延１	干	6～8(6～9)月［野村文書］干天 17 日に及ぶ　讃岐筑前東北大干
		ひょう	［野村文書］6.27(7.22)八ツ時俄かに曇り雷鳴り４匁５匁程の霰降り申候
		風雨	［野村文書］7.22(8.15)夜半より北東～北風吹き雨も中水に候　北方は五十年来にもこれ無き大水山潮と申し牛馬人等大分流れ此海沖へも流れ来り申候 ［注］さぬき大風洪水
1749	寛延１	火	11.23(1.11)［徳島年表］寅刻那賀郡中島浦より出火家数 150 軒同郡赤池村 34 軒焼失
1749	2	火	8.14(9.25)［徳島年表］海部郡西由岐浦民家より出火家数 139 軒焼失
1751	宝暦１	水	閏 6.19(8.10)［徳島年表］御国洪水 55,001 石 1 斗 5 升余損亡　伊予讃岐風
1751	宝暦１		水あり
1752	2	水	［神山町川成引帳］10(11)月鮎喰川洪水　　近国の記事なし
		火	11.14(12.19)［徳島年表］巳刻美馬郡脇町民家 190 軒寺 1 ヶ所焼失同日申中刻鎮
1754	宝暦４	風水	［徳島年表］秋御国風雨洪水 17,579 石 7 斗余御損毛 8.28(10.14)［野村文書］千年にも無之大水，善蔵寺の庭へ高瀬乗入申候，谷中の植田十ヶ村平均五分通り川に成り ［注］［日本凶荒史考］翌宝歴 5 年(1755)は夏霖雨洪水で諸国損亡多く特に奥羽地方は六月尚冬服をまとうの陰冷行はれ秋に至ったので青立のところえ早霜至り大飢饉となる　その惨状は天正以来と称される
1756	6	風雨	［蜂須賀家記］9(10)月暴風雨傷禾［大俣村誌］此頃連才凶荒上下困弊す ［徳島年表］9.5(9.28)御国風雨洪水にて 32,007 石 9 斗余御損毛流死人 11(男 5 女 6)牛 5 馬 2 流家 118 軒倒家 417 軒［野村文書］9.16(10.9)夜戌刻より北風吹き同八ツ時まで雨降り申さず少しの時雨にて風強く家の棟木を痛め申候 ［注］9.16(10.9)中国近畿大風雨水あるも 9.5 隣国に記載なし
1757	7	風水	［板野郡誌］7.26(9.9)大風雨潮打御蔵給知共年貢御免［川成引帳］大洪水 ［野村文書］八ツ時より大風丑寅の方より吹出で其夜八ツ時まで未午の方にて吹申候 ［徳島年表］御国風雨洪水 92,140 石損毛　中四国　紀伊大風雨 ［注］　尚［板野郡誌］に 7.17(8.31)出水田畑被害全村に及ぶの記事あるも隣国に見当らず或は月日の誤りか
1762	12	風水	［徳島年表］御国 6.26(8.15)淡州 8.8(9.25)～9 風雨洪水　合計 60,597 石余御損毛 ［注］6.26 伊予に風雨洪水　8.8 九州山陰大風雨水

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1763	宝暦 13	火	［徳島年表］9.1(10.7)酉中刻海部郡鞆浦民家より出火家数 235 軒社 1 ヶ所焼失　寅刻鎮火
		風水	［徳島年表］9.3(10.9)御国風雨洪水に付 20,585 石余損毛近畿北陸等風雨水あり
		火	［徳島年表］10.20(11.24)日和佐浦民家より出火家数 389 軒社 2 ヶ所焼失卯刻鎮火
1764	明和 1	風雨	［山城谷村史］4(5)月風雨洪水麦枯れる
		〃	［山城谷村史］6(7)月暴風雨　6.30(7.28)紀伊大風雨の記事あり
		風雨	［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　［山城谷村史］八月風雨長雨 ［徳島年表］8.2(8.28)御国風雨洪水 63,288 石余御損毛 ［注］8.3 丹波に洪水，奥羽に大風あり
		火	11.29(12.21)［徳島年表］海部郡民家より出火家数 116 軒焼失　巳刻鎮火
1765	2	火	2.17(4.6)［徳島年表］子刻美馬郡脇町出火家数 150 軒焼失　翌日辰刻鎮火
	明和 2	水	［徳島年表］4.16(6.4)洪水 57,435 石余損毛　［注］山城　中部，江戸に洪水あり ［蜂須賀家記］四月洪水麦枯　六月暴風傷禾　八月又霖雨洪水
		風水	6.26(8.12)［徳島年表］風雨洪水 59,651 石余損毛　　近国記事なし
		風水	［徳島年表］8.2(9.16)洪水高潮 119,628 石余　損毛　［板野郡誌，川成引帳］酉年の大水と云はれる　　四国，近畿，関東の大風雨洪水 ［注］　尚［徳島年表］に 8.8 風雨洪水の記事があるが近国になし
1766	3	干	［蜂須賀家記］6～8 月大干禾枯る重喜公屢水干にあうを以て国用支えず借金を幕府に請う，不充　［徳島年表］6～8(7～9)月御国干ばつ 107,636 石 9 斗損毛 ［注］　この干ばつは九州，四国，近畿の範囲で関東は長雨あり
1767	4	干	［蜂須賀家記］夏秋大干傷禾 ［徳島年表］六月七月中御国干ばつ 77,000 石余御損毛 近国記事なし
1768	5	水	［神山町川成引帳］9(10)月鮎喰川洪水　　近国記事なし
1769	6	風水	［徳島年表］8.19(9.18)御国風雨洪水 68,434 石余損毛　讃岐に風水あり
1770	7	干	［蜂須賀家記］五月より降らず七月に至り禾枯る［徳島年表］五月，閏六月，七月御国干ばつにつき御地高 131,900 石余御損毛 ［注］全国的な干ばつ［板野郡誌］によると数年に亘りて禾穀登らず百姓一同窮乏して拝借米歎願せし庄屋の指出書次の如し板野郡板東村，家数百十軒内 98 人極飢御役負人　内 9 人中飢御役負人　内 313 極飢御役外男女内 39 人中飢御役外　右は明和七年十月より同八年正月二十九日まで池田山城拝知の第二次飢扶持にして其他は同正月に引継ぎ第二次分追願は家数百七軒 443 人同九年辰二月には家数三十軒其人数 126 人
1771	8	水	［徳島年表］記事あるも月日不明
1772	安永 1	水	5.27(7.9)［徳島年表］御国出水御地高 17,042 石余損毛潰家 4 流家 1　近国の記事なし

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1772	安永1	風水	［蜂須賀家記］夏大水秋又風雨藩士の俸禄の半を3ヵ年停む［徳島年表］8.20(9.17)御国風雨洪水御地高117,981石余損毛流死家倒れ相果て候男女86人同牛馬31疋流失家70軒倒家廐並牛屋共9,674軒
1774	3	風水	四国，中国，近畿，東海道に大風雨水 ［蜂須賀家記］夏秋大水　是より天明寛政間水干の災有らざる年なし ［徳島年表］6.23(7.31)御国風雨出水御地高38,985石余損毛
		風水	［注］近畿，佐渡，江戸風雨洪水記事あり ［徳島年表］9.1(10.5)2日御国風雨出水御地高28,935石余損毛［川成引帳］秋洪水　　丹波但馬等風水記事あり
1775	4	水	［徳島年表］5.5(6.2)尚5.15　6.4洪水の記事あるも近国になし
		長雨	［徳島年表］当夏中長雨7.3風雨出水にて御地高30,634石余損亡 尚　霖雨の記事は備中京都江戸にあり ［注］この年那賀川大洪水の記事あり［木頭村岡田日記］
1778	7	火	［海部郡誌－池内氏系図書］3.4(4.1)浅川浦大火　漁家商家150戸焼く 火元孫右エ門　惨状藩庁に達し建家料及び米銭を与えらる。
1778	安永7	風水	［板野郡誌］8.8(9.28)より3日間風水害［徳島年表］出水　御地高43,900石余損亡　［注］この日筑前に風雨近国になし7.8(7.31)に伊予に洪水あり或は誤りか
1779	8	雪	［続日本王代一覧］9.26(11.4)此頃大いに寒し紀州阿州の高山雪降る ［注］この年4(5)月諸国余寒　7～8(8～10)月　風雨記事あり
		干水	［阿波藩民政資料］干天水害　7.22(9.2)土佐風雨
1781	天明1	火	［徳島年表］4.9(5.2)丑刻牟岐浦東浦民家より出火家数273焼失翌10日己刻鎮火
		風水	［勝浦郡誌］天明元年丑の年の洪水に丈六寺領の百姓共が同寺の代官に向けて歎願した文書(中略) 「去る七月二十七日(9.1)之大水に居内新物成之内少々の堤御座候処一円堤切内間田地川成毛付ケ相調不申候，其上右堤下床掘れに罷成難儀仕候並宮井川筋岸一円崩れ往来等も相調不申私扣之田地内往来に付き迷惑仕候(下略) ［注］この時四国，近畿大風水害［徳島年表］に8月御国洪水御地高80,164石余損毛とあるも8月近国風水記事なく上記日付けと思はれる
1782	2	火	［徳島年表］1.7(2.18)暁紙屋町より出火　稲田賀島類焼内町大火，飛火にて富田浦中園焼失三十余街に及ぶ
		水	［勝浦郡誌］文珠院(今の富岡第住町玉垣家)記録に天明二壬寅五月五日(6.16)大水にて西のゆる抜け申し候　　伊予さぬき風水 ［徳島年表］5月御国洪水にて御地方87,757石余損亡，秋に物価騰貴(米価一石5月60匁　11月75匁)
1783	天明3	冷凶	［蜂須賀家記］三年九月命を下して痛く奢侈を禁ず。冬命じて勝浦，那賀，海部，美馬，三好諸郡の貧民にめぐみ貸すこと二万三百八十余人

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1783	天明３		八年凶作相続き封内飢餓公庫虚乏以て賑救するなし， ［注］尚飢饉記録は勝浦郡誌高原村史にあり　この天明の飢きんは下記の記録のように５年間に及んでいる。［日本凶荒史考］二年春夏陰冷長雨し諸国四歩の減収三年春より陰湿多雨，暑気至らず六月寒冷を催し京畿に於て猶冬服を着するの異例ありまた大いに風水して諸川氾濫し農稼を傷む七月浅間山有史以来の大噴火あり，灰砂と泥流は信上武三州の田疇を害し，里落を漂蕩す。諸国の陰冷この後已むことなく遂に早寒の襲ふ所となりて諸国大いに飢荒す。わけても東北関東は春来北東の寒冷風に終始し未曽有の大凶作となりしも余儀なきを以て，流民道路に堵をなし餓死者山野に相望む。弘前八戸盛岡の諸領最も凄惨を極め，餓苦に耐へずして人相食むに至る。超へて四年，この歳七八分の作，ところにより豊作の聞ありしも，麦収を待つ能はず餓死するもの多く，去年九月よりこの六月まで津軽一郡のみにて八万千七百余と数へられ流亡の民また少からず。このため耕耘人なく田園荒蕪するもの亦少しとせず。五年夏東北霖雨，秋畿内東海諸国洪水　翌六年春夏陰霖し五畿内西国洪水あり，また六月寒冷或は冬の如く七月関東未曽有の大洪水ありて諸国大いに凶荒す。超へて七年春亦淫霖し災変底止 するところを知らざるものの如し。故を以て米価非常の昂騰を来し諸民大いに窮す幕府これよりさき屢々令して米穀諸色の買占囲置等を禁じ需給の円滑を期せんとしたるも，前途を危むあり，奸計の行はるるありて米穀動かず，遂に細民諸市に蜂起して米商富家を襲撃し，遂に打毀の暴動を起すに至れり。天明二年より七年に亘る間，北は北海道より南琉球に至るまで諸国頻りに飢荒し我が国土殆と完膚なかりしと云ふ。 ［徳島年表］9(10)月奢侈を厳禁す　1796年までに７年間倹約仰せ出さる
1784	3	火	［富岡町志］12.14(1.6)家数386焼失　亥中刻鎮
		干	［木頭村岡田日記］田植土用の二日になる
	4	病，飢	［徳島年表］秋凶作［徳島年表　大俣村誌］疫病流行　米価101～115匁
1785	5	飢	［勝浦郡誌］［那賀教育］
		火	2.6(3.16)［徳島年表］寅中刻新町橋筋より出火　東側よりかご屋町まで焼け戻り未中刻鎮
		風水	6.26(7.31)［徳島年表］　近国記載なし
		風水	7.11(8.15)［徳島年表］御地高100,614石余御損毛 ［川内村史］昼夜大風雨なり翌十二日昼より奥野，貞方，黒田一円大水入り同日五ツ時頃に鈴江，榎瀬，北大堀，幸蔵前堤切れ中島兵之助前竹須賀村平五郎十七間（今ヘイゴマヘ池と云い二反十四歩灌漑八町に及ぶ）庄の前八間　茂吉郎西ヘ廿二間余切大松平石各一円大水入，沖手立樋より長廿六間切れ　夷野にて堤長二間半切申し

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1785	天明５		惣兵衛より兼子迄一円水打越候鳥井より切れ牛飼原本長十二間切和左エ門内庭へ一尺三寸入 　土蔵，地盤，石垣七寸残り沖手堤一尺より一尺五寸位なり　沖島寺西境一円惣越に御座候 ［注］この風水は讃岐，岡山，美作に記事あり 尚本年 12 月米価 55～61 匁［徳島年表］
		火	［徳島年表］10.1(11.2)亥刻牟岐浦並灘村民家より出火 354 軒焼失夜丑刻鎮
1786	6	風水	［徳島年表］8.29(9.21)御国風雨洪水御地高 137,567 石余損亡 ［注］四国，中国，近畿，北陸に風雨洪水あり
		風水	［板野郡誌］9.7（9.28）板東方面は田島に砂入荒地を生じて鍬下及追鍬を受ける　この時は四国，中国，近畿，関東，東北に風雨洪水
		飢	［勝浦郡誌］年末米価 95～101 匁
1787	7	長雨	3～5(4～7)月　尚下記　飢の［注］物価の項参照
		水	［徳島年表］4.25(6.10)26 日御国出水につき御地高 148,450 石余損亡 ［川内村史］四月廿五日夜土佐大川の吉野川大松，榎瀬百間切，中島兵之助前三十間　夷野東石手三十間　百間場徳右衛門崎三十軒間切　深三間より五間余に御ざ候て内廻りの堤被仰付候竹須賀村には平五郎前切れ三十五間計砂入三町有平石用水埋り長百五十間余　上江三間敷二間尚二尺より一間迄砂入二百五十七坪余有　廿六日大水に吉野川筋麦流れ申事筆にも出し不申候　家も流れ人も流れ申事和左エ門居宅へ水少し乗候， 土蔵は石一杯村中二尺より六尺迄入申候沖手堤廿六日朝にては水一杯有以上一時に切落申候 ［注］この日伊予大洲に洪水記事あり ［徳島年表］に秋大水の記事あり隣国香川，愛媛では 8.13（9.24）大水
		飢	［勝浦郡誌，那賀教育］ ［注］（物価）三月より雨降り五月廿二日迄長雨に麦国々くさり川内村反に付五斗三升一斗五升無御座候　極々悪年にて麦百日五月中旬に至り百十匁（古から八十匁）米百三十目迄上り五月に百五十三匁仕候　（平常 70 ～ 100 匁稗五十目～百目空豆八十目国々米麦積出御法度方，大阪に米〆申者十七軒家こぼし申候［川内村史］天明六年より九酉年まで日本国中五穀不熟にて米二百三十文まで仕　麦は百八十文まで仕甚だ困窮此上なし　年号寛政と改元二月に改歌には天明に食ふや食はずに八九年もうこれからはながうくわんせ　という ［三岐田町史－正方私記］ (米価)六月上旬に米二百目麦百三十五匁成　中旬に米百七八十目麦百二十匁成　国々高値，七月は米百五十匁麦百目相場二百十日比に仕候 　七月廿四日比古米百七十目麦百三十匁新米三百十目屑米百十匁位也　江戸にては古米六月に三百目より七月に成二百

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1787	天明７		目　米屋江戸は不残つぶし面に取り押領仕由前代未聞の事に候［川内村史］ （施米）春より秋に及び日本国中大飢饉で死者少からず浅川浦の窮民も悲惨の極で池田氏の祖年寄円治兵衛其の他の富豪が毎戸に施米施粥した［海部郡誌－池内氏系図書］
1788	8	長雨	［那賀教育］7.22(8.23)より 25 日まで大雨洪水 ［注］米価２月 75～78　10 月 63～66 匁翌 11 月には 55 匁内外となる［徳島年表］
1789	寛政１	地震	4.16(5.10)［日本地震資料］土佐，阿波，備前地強く震い鳥取広島も震う ［三岐田町史－正方私記］寛政元己酉歳四月十六日夜九ツ時大地震により当村の井利両方こける，御国中同断疼多くあり田地悉くわれる。石垣くずれ滝悉くくずれ山われる。地震後四月十八日迄木岐由岐当村原田辺は一人も家に居らず山林へ逃げ行居申候　然れ共潮入不申天気に成り一向雨降り不申干り五月十一日に少し雨降り　［富岡町誌－文珠院文書］大地震夜の九ツ時より八ツ時迄ゆり本堂壁など甚だそんじ秋葉山拝殿壁もそんじ並に町土蔵などそんじ申候西のユルもさけ申候　山などもさけ申候処も有之，権現山の南三畳敷の岩飛ぬけ出西いけ田野神の前にて止る［福井村誌　福原村旭黒松寺過去帳］夜九ツ時大地震ゆり山々谷々崩れ川水三日の間濁り流れ多く川ぶちどて田地一円に割れ一日が間土路水吹き出し又瓦葺家蔵とも多く乱るる事つぶる事数知れず　一時半ゆり申し候　［鞆奥町史－橋本亀吉記録］夜八ツ時大地震所々いたみ積りがたし海山川共に大ゆるぎ也，家蔵土手杯のいたみ夥しき事也然れども夜分なれば諸国往来にて人に怪我は無之
1791	寛政３	水	［山川町史］8.20(9.17)拝殿流失 ［注］四国，近畿，中部，関東，奥羽大風洪水 ［徳島年表］秋洪水のため入田村鮎喰川荒廃（翌年改修完成の記事あり）
1792	4	風水	［板野郡誌］7.26(9.12)神社倒木田畑川成も多く何れの神社も祭礼が出来んと書いた記録あり。［鯛浜村付近古老談］堤防数ヶ所破損し大豆皆無同様　稲五分位損毛（寛政 10 年５月の洪水参照）　中四国，山陰，近畿に大風雨水あり
1793	5	風水	8(9)月　　近国の風雨記事見当らず
1794	6	干，水	［川内村史］四月中旬頃南風雨強く麦作実入殊外違ひ其上日でりにて万端仕付等相成遅まきながら大豆等晩物仕付申処大水にて晩物夫々水に枯れ申候に付宮島小百姓之分殊外難儀仕り［阿波貨幣史］大干　中国近畿関東東北　干
1795	7	風水	［徳島年表］7.8(8.22)御国風雨出水御地高 131,600 石余損毛 ［注］近国この日記事なし但し 8.29(10.11)中四国東海等出水あり
1797	8	火	［三岐田町史］12.12(1.9)西由岐浦残らず焼け５，６軒の納屋のみ残る　同 24 日木岐浦残らず焼　前者については寛政 9.1.17 の説あり（湯浅年表）

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1797	寛政９	雹	［三岐田町史－正方私記］6.13(7.7)八ツ時夕立して大霰降り煙草の葉など悉く破れ稲いたむ　　同日江戸雷電あり
1798	10	水	［三岐田町史－正方私記］5.16(6.29)より雨降り夜九ツ時分より殊外大雨，十七日朝六ツ時分より大水四ツ時分より雨晴る去る丑(5年)八月の大水に同じ田地悉く疼あり去年まで作方はげみはたらき居申候処此大水に田地に疼　もはや運命つたなきと思ふ ［注］この日隣国に記載なし
1799	11	風水	［徳島年表］9.7(10.5)御国風雨出水御地高46,857石余損毛 ［注］この日近国記載なし
1801	享和１	水	［山川町史］喜来の大水　8.19(9.26)中四国奥羽風水あり
1802	2	水	［徳島年表　高原村史］大洪水の記事あるも月日不明　但し7.6(8.3)土佐死者多し　8.6(9.2)中四国，近畿洪水あり
1804	文化１	不作	［蜂須賀家記］今年封内登らず
		風雨	［徳島年表］7.26(8.31)御地高79,000石余損毛　流死男4女3　多1馬11疋牛7疋 ［注］同日伊予に風水あり
		風雨	［徳島年表］8.29(10.2)御地高66,082石余損毛　潰家即死男11女10人流死馬7牛2疋潰家流家1,586軒 同日九州中国四国東海道大風水
1805	2	長雨，虫	8(8～9)月［徳島年表］7月末より御国虫付連雨　御地高35,700石余損毛
1806	3	干	［脇町史］阿北干害　［徳島年表］5～6(6～8)月干ばつ御地高103,500石余御損毛　　西日本の干ばつ
1807	4	風雨，虫	［徳島年表］御国風雨虫刺等にて御地高87,598石余損毛 ［注］8.5(9.6)筑後大水翌8.6紀伊暴風雨の記事あり
1808	5	病	［辻風土記］はしか流行
		風雨	［徳島年表］閏6.29(8.20)御国大風雨出水　御地高174石余御損毛 ［福井村誌］閏六月大風損家倒木　この日中四国伊勢武蔵に風水あり
1811	文化８	長雨 干，虫	［徳島年表］3～4(4～6)月雨降続き苗痛み夏干ばつ秋虫刺等にて御地高88,900石余損毛
1812	9	風水	［徳島年表］夏秋風雨出水等にて御地高37,600石余損亡
1813	10	火	［阿淡年表］9.12(10.5)池田大西町より出火家数102軒焼失
		干，虫	［徳島年表］当夏干ばつ苗痛並秋虫害御地高51,659石余損亡
1815	12	風雨	［徳島年表］7.6(8.10)～8日風雨出水御地高55,940石損毛　流死男2馬2 ［大津村史］損毛相調　徳永村高367.3石中146.8石　大幸村834.7石中292.1石 ［注］土佐，播磨，東海に風雨あり
1816	13	風雨	［板野郡誌］閏8.3(9.24)荒潮打込み稲大半立枯［石井町元木文書］※大水大風 ［徳島年表］当秋度々風雨出水にて御地高163,212石余お損亡　流死男9　淡州御地高25石余損亡　上記の日に中四国近き関東に風水其の外記録見当らず

※　名西郡高原村の元木家文書，1816－1854の記録あり以下元木文書と署

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1817	文化 14	風水	［元木文書］9.9（10.19）日暮より大風雨　［徳島年表］夜御国風雨出水御地高 27,330 石余損亡　同日さぬき風水
1818	文政 1	風水	［徳島年表］7.14(8.15)－15 日風雨出水御地高 12,216 石損亡　この日近国記載なし
		豊作	［川内村史］諸国豊年殊に川内　笹木野　徳島　吉永は 50 年来の大豊作　当時平石村上田にて 2 石 2，3 斗より 3 石，下田にても 1 石以上 2 石の収穫あり　米価最高 58 匁より最低 56 匁
1819	2	風雨	［徳島年表］御地高 33,600 石余損亡の旨 12.16 お届　近国見当らず
1820	2	長雨	［川内村史］2～3(3～5)月雨多く麦不作　［大俣村誌］夏干秋洪水 ［注］伊予夏干損の記事あり
		風雨	［徳島年表］夏秋御国風雨地高 87,070 石余損亡淡路 145 石 10.19 お届 ［大津村史］風雨につき諸立毛損　稲平均して一歩通りの痛 ［注］近国に記録見当らない
1821	4	風水	［徳島年表］8.8(9.4)御国風水害　高 68,664 石余損亡　さぬき大風
		火	［徳島年表］12.2(12.25)宍喰浦出火　家数 206 軒焼失
1822	5	長雨	［元木文書］麦刈入時長雨，甚だ悪作
		火	［徳島年表］2.21(4.12)午刻牟岐中村民家より出火　牟岐浦に移り 725 戸焼失未下刻消
		干	6～7(7～8)月［元木文書］6.11 頃より極上天気　7.19 まで降り申さず ［注］兵庫鳥取に干ばつ記事あり
		干，虫	［徳島年表］当秋干損虫害風水害　御地高 24,745 石余御損亡 11.19 お届 ［注］風水害記事近国見当らず
1823	6	干，虫	［徳島年表］当夏御国干ばつ並秋毛虫害御地高 75,855 石余損亡 ［元木文書］4.19(5.29)まで雨その後 6.7(7.14)まで凡そ 48 日ぶりの夕立雨 ［注］5，6 月関西諸国大干
		水	［山城谷村史］秋洪水（月日不明）
1824	7		［元木文書］悪天で藍作は昨年の 5，6 分作
1824	文政 7	病	［元木文書］5 月頃より痢病流行　高川原　矢野　山崎川田等の村々 50～80 人宛死亡　8 月下～9 月上に至る ［阿波藩民政資料－那賀木頭村］痢病流行につき 8.6　御手当一巻
1825	7	火	［徳島年表］12.12(1.30)卯刻前東新町より出火大西北風烈しく大火に相成り富田町新魚町桶屋町藍屋町古物町大工町 2 西大工町西新町 1 南大工町まで焼失　未刻鎮火総戸数 932 軒土蔵 24 但しお届 1,398 町家の内 13 取崩 67 納屋 24 土蔵
1825	8		［元木文書］藍刈前長雨にて大くさり
		風水	［元木文書］夜半より 8.14(9.26)昼頃まで車軸を流す程の大雨夜に入り殊の外の洪水，風は中風で大いたみこれなし 徳島山手などは山潮の様子に候　大工町寺町富田大谷辺は座敷に水上り候由相聞き候　　沖縄，紀州，中部地方に大雨洪水

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1826	文政９		［元木文書］麦刈前長雨取入れ時天気好きも実入り悪るく平年の７分作
		風水	［徳島年表］5.21(6.26)，22. 及び 6.6(7.10)風水害損亡 67,835 石余流死男 17 女 4
			［元木文書］21 日未明より大雨になり風は八ツ時より大風にて近年の大しけ大水，夜半頃風止む上浦村通源寺方丈 3，4 年あと建て候瓦ぶき吹潰し申し候其他牛ノ島円通寺くり山路村寺方丈等同様　二回とも中四国近畿の大風雨洪水
		水	［高原村史］6.6(7.10)洪水　　四国，中国風雨洪水
		水	8.20(9.21)［高原村史］，［川成引帖］下分安吉鮎喰川洪水のため湖となり 10 戸流失　［神領村史］破堤山崩れ　　近国の記事見当らず
1827	10		［元木文書］５月末より６月上旬まで日々大小の雨前代未聞の藍ころし日和
		風水	［徳島年表］当夏風水害御地高 3,700 石余損亡 10.25 お届（但し 12.24 のお届は 45,779 石余損亡となる）　　7.2(8.23)伊予風水あり
		病	［元木文書］10(12)月　疱そう流行翌年にわたる
1828	11		［元木文書］長雨なく麦近年の出来，藍　雨で虫多くつきくさり強く，不出来
		風雨	［元木文書］１日風雨烈しく夜より 7.2(8.12)に至り大水，土手５合程(関西，関東前代未聞の大水で三洲矢はぎ橋落ちし由)
			［注］この日伊予，九州大風雨洪水又 6.30 中部，関東洪水
		風水	［徳島年表］8.10(9.18)及び 23(10.1)風水害 90,233 石余損亡 10.26 届出
			［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　　8.9 九州中国加賀　8.24 九州風水
		干	［神領，高原村史］夏降らぬこと 85 日文政の大干という　　近国記事なし
		虫	［徳島年表］当秋毛虫害風水害 188,097 石余損亡
			［注］［甲子夜話続編］にこの時の全国被害は一般の大名所領 56,364 石公儀の御損亡はその倍とあり　阿波藩のものは 17 万石余となっている
		地震	［元木文書］11.22(12.28)夜九ツ時大震　　近国記事なし局地地震か
1829	12		［元木文書］天候割に順調だが藍中出来
		水	［高川原村史－梅間池原由抄］　5.24(6.25)大水　伊予，安芸，伊勢等風水
		水	［徳島年表］7.16(8.15)16～18 大洪水［元木文書］17 日明方より大雨昼夜降り通し 18 日未明より丑寅の風吹出し追々相募り次第に北に廻り八ツ時西に変る　水は八ツ半より土手際まで来る。　紀伊水道，山陰，京都等に風水
			［徳島年表］当秋両国風水害御地高 87,273 石損亡　流失男 3 女 2　11.5 届出
			［注］秋の風水記事近国に見当らず
1830	天保１	火	［阿波志］12.30(1.24)脇町出火 22 戸侍屋 100 戸町家 4 戸蚕屋 4 棟廐焼失

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1830	天保1		［元木文書］脇町北，中町残らず焼
1832	3	干	［元木文書］5月下旬より雨6.17まで18より天気46日目の8.4夕立（この間に雨乞い）（農作物皆枯れ）8.6　七ツ時大夕立以後又天気　9.6まで80日干稲6，7分作［木頭村誌］金ぴらへ貰い水山で大火たき雨乞　讃岐紀伊摂津其他干
		火	［海部郡誌－池田氏系図書］10.7（10.30）浦川浦加子人称三八宅より出火75戸焼
		風水	［徳島年表］17,404石余損毛11月届出　9.11（10.4）土佐福岡風雨あり
		病	［元木文書］10（11）月風邪流行
		雪	［元木文書］12.8（1.14）夜半より雪9日四ツ時も降り丈1尺　前代未聞
1833	4		［元木文書］天候順で藍出来よし
		風水，虫	［徳］風雨害虫害38,663石損亡　［山城谷村史］凶作 ［注］この年から天保の飢饉が始まる阿波の米価も5年に急昇した ［徳島年表］による肥後米石当り　　3年12月76.4匁　4年5月86匁　4年12月119匁　5年5月145匁　　年12月71.5匁 ［日本凶荒史考］によれば 四年春より時候不順，　夏陰冷行はれ六月関東尚袷を用うるの異例あり，秋大風洪水，のち早冷を来し諸穀登らず，東海道の六分七厘作を最良とし，奥羽二州の平均三分五厘二毛と称へ，或は収穫皆無の惨あり，翌五年漸く平年作に近かりしも凶作のきず癒えざるに，六年春また和順を缺き，夏秋陰涼多く，蝗害の地ありて，津軽地方の四分作をはじめ諸国違作多し，超へて七年，この年初夏より陰冷甚しく畿内に於て六月尚冬服を用いるの大異変行はれ，盛夏暑気を感ずること稀にして九月に入り，遂に早寒のおそうところとなり全国大いに飢荒す，即ち山陽南海の五分五厘作を最良とし，山陰関東は三分二厘作内外を称へ陸奥は二分八厘作にて無収穫に終れるあり，この時貨幣粗悪にしてその価値下落せるを以て諸物異常の暴騰を来し庶民の困窮甚しきに，米穀の需給の途極度につまり都邑大いに窮す，八年二月大塩中斉この凶歳にあひ，時弊を慨し救民を標榜して大阪に挙兵するあり，東北諸国は天保初年より頻りに飢荒し，この後尚やまず，ために餓死者流民極めて多く，四年より十年に至る七ヶ年津軽一郡のみの死者三万五千六百余。他郷に流離するもの四万七千余人を数へたり
1834	5		［元木文書］夏藍小出来　5～7月照り続き難儀
		風水	［元木文書］8.6（9.8）昼頃より余程降り出し風も次第に大風に相成り夜半頃に止み申し候　三抱程の榎土際より2尺計り上より中折，其他中木67本折れ申し候　奥野村は40軒程吹倒れ其他2，30軒も損し候村段々有之2，30年以来の大風と申すことにて候 ［徳島年表］御地高69,598石余損亡　この日讃岐，紀伊，中国大風
		火	［徳島年表］海部郡木岐浦　158戸焼失
1835	6	風水	［元木文書］5月13，14（6.9）大雨，21日朝より極大雨朝一番鳥の頃

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1835	天保6	風水	水枕に相成り川筋一円大いたみにて流れ物多，損田流失砂入近代の大いたみの由，瑞巌寺山潮にて水2尺ばかり入る。 ［徳島年表］5.15，21～22風水害　39,280石余損亡 ［注］5.14伊予　21伊予ゐなば丹波風水
		風水	［徳島年表］6.19(7.14)　尚7.23(8.17)閏7.6－7(8.29－30)　21(9.13)風水害130,818石余損亡死人男3
		風水	［元木文書］7.23朝より降出し大野分と相成夜半頃大水土手五合，閏7.21朝より雨四ツ時分野分夜四ツ時収まる　しめて7度 ［注］上記のうち閏7.6～7中四国，中部，関東に風雨 ［徳島年表］7(8)月下旬より阿淡御両国沖合高潮大風雨　此関連記事見当らず
		飢	［高原村史］ききん［板野郡誌］このころ8，9年にわたり飢饉
1836	7	冷凶	［徳島年表］天下飢饉藩主めぐみ給す　全国平均4歩作　洪水飢饉（那賀教育）［名西郡誌］天保六年夏秋の頃霖雨甚だしく秋禾登らず餓死者夥く，同七年また凶作にして天下大に困ばいす同十二年農家にローソク雪駄を用い家屋を美にすることを制し結髪店を禁ず［川内村史］七年正月元日より三日迄晴天夫より月の内五分は雨二月三月も同様四月に入り，七分雨麦作にかかる六分作は取込夫より稲仕五月も五分は雨冷気勝六月土用中二日と晴天無之大冷気夕立気色日々にて雷鳴雨降通しカタビラを着たる日は夏中一日も無之七月盆迄同断稲生立す　五月十三日大出水　冬に至り他国米積込御免被仰付候得共他国も高値故酉（8年）正月中二三月迄漸高四五六月二百七十目大飢饉となり貧家の者は餓死甚だ多く非人乞食は過半冬の内に死す　人事下々雇人等皆乞食となり米麦の糠を乞い魚の肉を生にて直ちに食ふ者あり，酉秋諸国豊作九月より下直金十両に蔵米十三貫十二月に十四貫　麦は却て処により米以上高し　酉春より秋九月迄大豆大高百五十匁米糠百文に一升五分大根干葉百文に一把五七分塩一俵八匁より十匁油十樽三十五両酒一升三匁二三分味噌一両に十二〆醤油一升五匁六分七年米一石三百目麦一石二百五十目にて誠に迷惑人多く大阪表杯には一日五十人七十人宛餓死奥州出羽杯は藁筵杯粉にして食べると云ふ，当御国杯もツワ杯諸草亦鳥瓜の根杯食べる人多く樫の実の餅杯我等買調候事も御座候…御国にも村々に餓死人多人数有之候此年豪雨あり西別入水す，右年狂歌　凶年暮しのをり木の実迄むしり掻とる申のとし麦米拾う酉のとしか南 ［元木文書］3月下旬より7.30まで降続き同様8月も度々大降り26日より天気になる6，70の老人共を未だ覚え申さぬ話に有之国中の藍ききんにて候へ共家により大いに善悪御ざ候　米実入り悪るく諸国共大凶年にてござ候 ［木頭村　岡田日記］米一升で70日つなぐ
		水	［川内村史］5.13(6.26)大出水　　近国に風雨記事見当らず
		長雨	［大俣村史］春～夏風雨続く飢饉
		虫	［勝浦郡誌］つまぐろよこばい大発生
		風水	［徳島年表］7.7(8.18)，8日風水害御地高53,368石損毛　流死男女

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1836	天保７	風水	各１人（尚同時に夏以来度々の風雨虫害にて　42,168 石損亡 11.21 お届の記事がある） ［元木文書］6.29 より 7.6 まで打続き雨天夜半過より中風追々吹降る８日夜分ことの外大雨　風は小吹に相成り夜半頃より未明まで水土手六合程 ［注］この日　伊予，筑後洪水あり
1837	天保７	飢	［元木文書］12(1)月より有志より米集めて寺町円徳寺にてかゆをたき飢人に施すニ三千人に及びし由
	8		［元木文書］春打続く長雨後麦の出来頃天気至極良く上は２石中下も１石７，８斗の収かくあり一時値段下落
		長雨	［元木文書］春３ヶ月の雨続きに天下太平五穀成就の御祈とうの下命あり 3.11 より寺で相つとめ ［蜂須賀家記］四月令日　去年依頼穀価騰貴加うるに今年長雨傷稼郡下の困難知るべし　このため深く心労す　藩士努めて冗費をはぶき困窮に至るなかれ
		病	［元木文書］春より国中一統傷寒（チフス）流行死者おびただし ［注］［辻風土記］には天保７年とあり
		干	［川内村史］８年夏早魃打続くこと甚しく田圃に灌ぐ水に窮し土瓶に井戸水を入れて稲の根元に給せりと為に作物尽く枯死し収穫皆無の状態となり，剰へ当時他国米輸入禁止の折柄とて食糧の供給を受くるを得ず本村民の如きも其の多くはオボツコを食し鈴江渡付近の砂子に薄貝を漁り辛ふじて飢餓を免れたりという，当時狂歌あり 権現箕つくり中蜆掻き東菊菜の根をたふす これは古川村困憊の状を詠めるものにして権現とは古川橋西部　中とは同村寺付近　東とは県道付近を云い菊菜とは野菊の謂なり　斯くて野菊を食い尽し次にはオボツコを食せしが中毒症を発し面部に腫を生ぜしという，俗に三百目年と伝ふこは米価一石につき六十目位なりしが当時三百目に暴騰せしものなり或は云ふ三百目年は鳥が木から落ちると。時の藩主救恤のため鮎喰蹟にて粥を煮き給与せしため遠く堂浦地方より来る者ありしと云ふ
		風水	［徳島年表］6.6(7.8)，７日風水害 28,203 石損亡　流死男８女２　近国記事なし
		風水	［徳島年表］8.13，14(9.13)風水害 53,715 石損亡　11.28 届出 ［元木文書］稲作至極よろしきところ 11 日より小雨 12，３大降り車軸を流し申し候　夜半過より東風しけと相成，14 昼頃水枕土手七合にござ候 風は中風四ツ時まで吹きそれより戌刻に廻り収まり候 ［注］中部，関東大風水あり
		飢	［徳島年表］飢きん　倹約令を出す［井内谷村史］穀価大とう貴 ［阿波藩民政資料］天保八酉秋 8.28 より 10.27 まで（日数 60 日）御国民を始め他国通りがかりの難渋の者まで名東郡南新居村不動前並びに高崎村川原において下記の通り御小家かけ仰せつけられ窮民ども数日お救い仰せつけなされ候

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1837	天保８		一，御小家２間45間宛南新居村　　２ヶ所 一，新小家２間15間宛　　〃 一，同　２間30間宛　高崎村　　３ヶ所 一，御用所，請払役所，釜家，米搗小家，番非人詰所，各1，便所　10 人数合せて四千人余（賄人数合せて18,620人）米155石521　稗136石079塩46俵　お手当　黒米11石243　吏糧４石２　黒薬並びに丸薬 ［注］この飢きんは顕著で県下多くの郷土誌に記載あり
1838	天保９		［元木文書］天候よく麦の実入り甚だよろしく実取り　２石より少し上，昨春とは大ちがいにて万事かまびしき事一向これなく諸物価追々下落 土用中格別の暑さもなく諸国共米の実取り少なく追々高値に相成り
		飢	［山城谷村史］［那賀教育］那賀の米価300匁麦160匁 ［徳島年表］2.21来る子の年まで３ヵ年の間倹約仰出さる ［注］天保飢饉の末期で［徳島年表］によるこの頃の米価次の通り 天保６年５月74匁　12月92.7匁　７年５月83.5匁　12月155.7匁　８年５月216匁　12月94.5匁　９年１月103匁　10月137匁　10年１月64匁　10月60匁
		風水	［徳島年表］6.12(8.1)13日
		風水	［徳島年表］7.21(9.9)～26日　今年の両風水で31,989石損毛　流死男３女４ ［勝浦郡誌］大風雨収穫皆無　［元木文書］水は土手３合程格別のいたみ無之 ［注］近国に風水記事のあるのは7.21
1839	天保10		［元木文書］麦の出来よきところ４月雨勝20日以後の長雨で刈穂を流すところ多し，29日より天気　６月以降始終天気　折ふし夕立有之順気この上なし， ［徳島年表］4.6(5.18)海部郡奥河内村出火　日和佐浦類焼320戸焼失
		火 水	［徳島年表］4.25(6.6)御高14,105石損毛，25，６日の連雨により土佐の御用木桧材749本吉野川へ流失　［元木文書］24，５日夜余程の降26日昼頃より出水 ［注］26日越中風水記事あり
		風水	［徳島年表］8.9(9.16)25,050石損毛　　この日讃岐風水 ［元木文書］8，９日昼夜大降り晩九ツ時より大風吹出し半時余りにて静まり申し候　10日朝より出水土手４合程
1840	11		［元木文書］麦上作夏長雨大虫藍不出来（上郡北山路筋虫なく大出来のところ多）
		風水	［徳島年表］6.9(7.7)10日　　九州，広島風水 ［徳島年表］8.3，4(8.30)風水害今年合せて101,252石損亡 ４日筑前大風高潮あり
1841	12		［元木文書］正月より始終雨降り続き麦不作，藍も雨始終にて不出

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1841	天保 12		来
		雪	［元木文書］3.17(5.5)四ツ時より雨夜中まで，極めて寒く候ところ18日朝上郡高山勝浦山の方一円大雪，藍植時に雪ふり申すこと先年より無之
		風水	［徳島年表］秋御高 91,250 石損毛 10.11 お届　8.9（9.23）讃岐大風洪水あり
1842	13		［元木文書］麦よし，6月始め天気も大体で藍中出来，6.13 土用に入り1日も上天気なく大方雨ふり格別暑き日なし 5月以来出水6度（5.23，6.4，6.25，7.20 の記事ありいづれも小規模） ［木頭村誌］大水出原のすがず婆流さる。旧道筋端伝寺の石段まで水
1843	14		［元木文書］麦程よく取入れ，藍大出来虫つかずのところ刈最中の大水に難ぎのところあり
		水	［高原，神領村史］7.6（8.1）七夕水という　隣国記事なし ［元木文書］2，3日雨4，5日天気晩より雨6日未明よりごく大降り7日夜五ツ時出水九ツ時まで土手三合まで，御国水故前川大水，翌8日水も少し引方に候ところ　又々奥水七ツ時分来たり前同様三合まで，然し風は一向無之候　徳島より南方取りわけ大痛に候名東聖童寺池堤切れ佐古筋山手の方大水大滝山寺町辺大いたみ寺方の塀倒る大工町座上幟町大道鷹匠町淡路町座上3，4尺富田5，6軒の外座上八幡村堤百二三十間切小松島富岡座上3尺ばかり ［勝浦郡誌］一日より六日まで連日降雨であったが其の夜より暴風大雨となって一大洪水を惹起し勝浦川の増水一丈五尺に達し西須賀村字敷地の堤防八十四間破綻すると同時に同村字松成の堤防二ヶ処七十四間潰決して湛水数十日に亘って非常の被害であったと云ふ ［横瀬町史］生比奈村今山の慈林寺裏山崩れ同寺倒かい ［川内村史］七日朝より翌朝迄誠に大雨降て酒屋の内に相試し候処一日一夜に酒六尺コガに二杯位降り申候　此朝勝浦郡悪躰洪水にて流家何百軒数不知死人田野浦村杯にも五十人程も御座候由承り候 徳島富田諸家中に至る迄五六尺座上死人富田内にも御座候由　勢見山鳥井前の石垣八歩迄の洪水にて俄降に付多く混雑迷惑人御座候 跡にて死人承り候処二百人程御座候へとも其節は何万人と考へ申候様沙汰諸国杯にても仕候由 ［板野郡誌］五六両日昼夜大雨降溜一丈三尺にて大洪水流家多く、其際五十年来の大水なりと云へり ［多家良村誌］丈六寺下手堤防切れ家流れ4人溺死，田浦一番切れ横大道 130 間2番切れ 100 間家 15 軒流れ人馬 30 人（元木文書に人28とあり）
		水	［勝浦郡誌］8.15(9.8)9.25(10.18)大雨洪水　この両者近国の記事見当らず
1847	弘化4	長雨	［井内谷村史］4(5)月長雨穀価騰貴
		風雨	［蜂須賀家記］八月大風雨勝浦吉野諸川水溢傷禾 ［山川町史］吉野川洪水　［神領村誌］貧の水

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1847	弘化4		［注］8月中近国記事なし　7.13(8.23)伊予さぬき等に大風水
1848	嘉永1	長雨	［川内村史］春長雨大いたみ　［脇町誌］長雨不作 ［徳島年表］大雨（2－6月雨多し）
		火	［海部郡誌］9.12(10.8)夜浅川浦加子人嘉右エ門方より出火　38戸納屋18計58戸焼失
1849	2	風雨	7.10(8.27)酉の水又は阿房水　　四国，広島大風雨 ［蜂須賀家記］七月八日大風雨十一日に至る水城下に溢れ人家漂没す 前代未聞という，藩士の録十分の三を収むるを免じ吉凶の礼を簡にし冗費を省かしむ。 ［三好郡誌］三好郡内で死者250人7.27までに死傷者980人 ［板野郡誌］酉の水は世人呼で　阿房水といひし位の大水にて　津慈なる藪の内　即ち阿部家の南方百間内外破提し　同家は流れて荻原の塩田まで至れりと　津慈の破提ありしが為に　川崎以来は破提を免れ　水量も亦割合に浅くして　川崎にては普通の民家座上三尺　最高の家なれば一尺内外　三俣にても大同小異なりきと 其他北方の高地に於て堤防の壌決田圃の荒廃等は　非常なりしも人畜の死傷はなかりき ［川内村史］七月九日朝より風烈しく雨も少々は添ひ候　翌十日暴風となり雨も前日の降りと異ならざりしも中稲に障り　十一日朝にても矢張り風吹き居たり　其節　大松中財家にある一抱半位もある大松一間半上より中折せり，其日中島，榎瀬川水余程強く　諸役人百姓の人夫召連大手堤に出て十一日昼頃迄は格別の水先にも見えざりしが同日七ツ時一時計に水量三尺増し　人夫等も堤手当せしが遂に榎瀬　中島両村浦処々五十間六十間と堤の上二尺計乗り越し見る間に破提し家流れ出つるに付 諸役人始め人夫共一時に自宅に帰り家毎に入水の用意，馬を預け飲水を汲入れ諸物を二階に上げ又は座敷に上げ俄に大混雑となり水量追々増水一帯の家屋に浸水　所々悲鳴の聞へあり　之を聞けども船なき故如何ともなす能なず　犬の鳴声も此処彼処に聞えしが夜八ツ時には水次第に減退　翌十二日早朝より漸く屋内掃除をなすを得たり
		病	［徳島年表］ほうそう流行
1850	3	長雨	［名東郡誌］秋大雨洪水［蜂須賀家記］この年風雨壌稼 ［注］この秋近国の風雨は8.7(9.12)九州，中国，近畿9.2(10.7)中四国，近畿　土佐鰹節の廻船津田川口で難破の記事あり［阿波藩民政資料］
1852	5	干	［名西郡誌］夏大干数月に亘り野に緑色なく　草木枯死せんとす郡民困苦雨乞いに奔走　　伊予，紀伊，摂津，三河等に記事あり
		風水	［三好郡誌］7.20，21(9.4)風雨出水　　四国，近畿，関東風雨東海道 ［名東郡誌］5.22～7.2大干［大俣村誌］3ヶ月雨なし　［佐々木氏覚書］雲早山で大雨乞　西日本大干　5月末より8月始まで雨なしとす

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1853	嘉永６	水	［名東郡誌］７月大水 ［注］8.3(9.5)伊予，さぬき暴風雨ありこの外近国に見当らず
		天	［名東郡誌，山城谷，井内谷村誌］7.17(8.21)より 23 日まで北々西に彗 星見ゆ ［大俣村誌］人心きようきよう　（クリンケルフース彗星）
1853	嘉永６	天	［山城谷，井内谷村誌］3.8(4.5)より 10 日まで北西に彗星見ゆ
1854	7	地震	［井内谷村誌，佐々木氏覚書］6.15(7.9)　　伊賀上野付近の大震死者多し
		風雨	［井内谷村誌］7.28(8.21)29 日大風雨［八幡村史］園瀬川筋大坪一帯大洪水破提未曽有の水害　　但し近国に記載なし
		地震	11.4(12.23)県下全体有感［理科年表］　東海道沖（137.8　34.1）9 時発震大津波あり倒家流失家 8,300 焼失 300 死 1,000
		地震（津波）	11.5(12.24)［理科年表］南海道沖（135.6　33.2）17 時頃発　大津波は房総半島より九州東岸に及ぶ　住家全壊１万余焼失６千　土佐紀伊大阪にて津波のため流出 1.5 万半壊４万死３千県下の津波被害大きく死 200 焼失戸 1,000 翌年９月まで度々余震を感ず ［蜂須賀家記］南海の地，大震日を累ぬ　　封内人家倒るるもの三千余　海南郡諸浦海溢れ家屋漂没し人畜多く死す。 ［阿波藩民政資料－板野郡中財家文書］ 朝辰の下刻俄に地震揺出し何れも外へ走り出火の要心第一に取片付居申内所々建家相痛み申由相聞え申候　彼是烟草四五服呑位の間震り申候…其夜後にて二三度少々宛震申候につき何れも要心の心持にて居り申処 翌五日申刻誠に天地覆る様相覚え其節夕飯の拵焚火を消し火鉢を外へ持出しコタツ我等内には前日より震候にも不仕候　日の入合迄一時程の大震り其節我等は　自性寺へ参り居合せ寺中一時に外庭へ走出候処方丈の内襖障子震り離れ仁王門キイキイと震鳴り凡一間半位も屋根にては震り申候様に相見え候　就夫釣鐘も棒に自然と震搗当り早鐘鳴る如くなり石塔もことこと震り動き中々庭に居る事不能 寺の西屋敷へ垣を潜りて出候処桶屋清蔵居宅　震潰れ夫より火煽に烟出申に付其方へ参り火取消手伝仕り夫より我家へ罷帰り候処先我家建物無難にて御座候折柄申酉の方へ当り山の崩るる音其の中へ取交えて大筒の続鳴りし音相聞え候　此上は土地天倒仕儀哉と消入心誠に今は生死の境と胸を据え途方に暮れ　皆々顔色無しになり大人子供に至るまで　泣々も真言を唱え居申候内　村内潰家出来の趣き承居申内徳島内町焼け　小松島焼け　西町焼け築地西の方は空辺処々焼け近村も古川，中喜来，沖島，善集寺出火其夜戌の刻に至り大震にて藪の中竹に取り付き居候　手放るる様に相覚え申候(下畧) 地震潰家大破有増仕候 大松村（潰家 12 軒，大破損８軒）中島浦（10 と８）榎瀬村（９と 12）加賀須野（７と６）竹須賀（３と３）平石（６と７）宮島浦（28 と 20）鶴島（４と８）鈴江（３と７）沖島（10 と 10）長原浦（０と

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1854	嘉永７		50）

［被　害　表］

村　名	総家数	無難	潮入	大小破	潰家	流失	流死者
西由岐	40	10		3	27		
西由岐浦	205	3			3	199	16
阿部浦	160	97		63	4		
伊座利							
田　井	40	17		16		7	
木岐浦	203	7		6		190	
日和佐	207	113	42	20	32		
南牟岐浦	175					175	2
東　〃	357		2			354	26
牟岐中	129	8	71		14	36	1
川　長	40	1			3	36	
灘	66	37				29	
内　妻	36	21			2	13	
出羽島	68	3			25	31	
浅川浦	260		寺３潮入大破			260	1
鞆　浦					少々		
宍　喰	500			180	20	300	7
竹ヶ島	48	10				38	

相生村史］内山の吉田快蔵談　母に背おわれて病気見舞に行く途中地震あり道の上の木葉で頭なでられる

［勝浦郡誌］５日夕刻大地震がゆり出すと同時に川口には山の様な津波が起り，民衆は大いに驚いて命からがら避難した。此時北町光善寺西隣りの小川屋が倒れ火元になった誰一人消防する者がない

それで光善寺に燃え移り更に東側一帯を烏有に帰し北町も残らず燃えたので丈六寺の旧記にある通り神代橋筋と祇園，八幡両社及び地蔵寺だけが残った，こんな有様で徳島市街，小松島の大火と併称されている　併し高波は幸にしていささか上陸した計りであったという。

［吉野川］徳島は約 1,000 戸が焼失約 200 人が死に小松島も大火また板野郡誌は岡崎（鳴門）で３割潰家，２割焼失，下板地方では 200 戸全半潰と記す

［元木文書］５日暮六ツ前より内町魚の棚そばやより出火通り町一丁目中程より同時の出火　四方へ広がり西風強く候へども西へ焼け通り横町より東へ3，4軒程宛残し南は塀裏大手筋残し　東は稲田　賀島御両家焼出北は紙屋町残らず焼失。

［宍喰浦旧記－円頓寺縁起］４日辰の下刻中揺りの地震　続いて両度海面俄かにアブキを生じあじ島を打越し川半まで込み入ること三ヶ度諸人相驚き　四方へ逃げ散り米麦諸物を山上へ持運び　今にも津波入来る心地にて　夜に入りしも同断の騒につき万一出火の程も計り難く役人一統火の手当に打廻り浜辺には篝を焚き潮狂等有候はば　火急に其場を立去町々へ立別れ触知らせ候様　手配を致置家々に相残る者共は少々宛手近

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1854	嘉永７		きものを相携へ　愛宕山へ逃上る可申覚悟にて浜辺より　今も知らせ来るやと相侍候処　夜四ツ頃中揺り地震一度有之候　暁に至り小々人心地に相成諸方へ逃去る人々追々立戻候　申の下刻大地震一ヶ度にして惣ち地面裂け渡り泥水を吹上げ井水一尺位より二三尺計りも吹，処により候ては　地震半に早五六寸計りも水流れ渡り木竹の梢地につくばかり揺り川水二間四方或は一間四方一かたまりとなり　処々に水吹上げ又川原等は小石ともに水を吹上げ　中洲辺は水吹上事四尺計りより五尺計りに至　其凄ましき事言語同断，又田畑不残水を吹上げ或は砂を吹き一面に裂け渡り　其の裂け目青色，家々の軒落又瓦の飛事投打か如く　沖よりは潮烟立　町中烟立五六間先は見分難く　皆々揺り倒され樹に取り付　垣にすがり等いたし候　内少々地震も相ゆるみ老人病人又幼き者を助け揺られながら手近き山へ逃登る　親子たりとも一処に居るものは相助ける隙なく一命を辛して逃散候処　惣逆浪来事三度最初の潮はありやはり渕迄，二度の潮は正田薬師森より一丁程下迄川筋は日比原村より半丁はかり下迄　北手は鈴ヶ嶺麓迄，又二度目の潮の引く事中磯の沖一丁程先迄　只一面の白海に相成，続いて三度目の潮来り候へ共小く一番潮位の事に相済夫より続いて来浪も無之　愛宕山へ逃登り五百七十二人，其余は祇園　八幡又日比原　尾崎　広岡辺迄家内別れ別れにて逃散　浜辺に居合す者は其儘船に乗候処　逆浪に打返され溺死に及，程能く川筋　目辺へ流入助命に及候者も在之候へ共必右様の節は船などに乗へからず 諸々にも船に乗り多く溺死に至り片時も早く近山へ逃登るにしくはなし，暮方大揺一ヶ度　中揺ニヶ度　夜四ツ時頃極大揺り一ヶ度今も山上揺り込むばかり家内手を取り合　神仏の加護に頼らん事を祈るのみ，夜中より暁に至迄中揺八ヶ度小揺只間もなく凡て三十七度翌六日漸く無事の顔見合候（下畧） ［三好郡誌］四日朝早々地震にて少々ゆり出し同五日七ツ時　大震り其夜五ツ半時分又大震り　前代未聞之義に御座候　御家中方之内稲田九郎兵衛様始め紙屋町，紀国屋町，内町助任，南方小松島　海部郡　撫養　津田御山下近き殊之外　大地震に而御焼失，御家中方御宅焼失，御屋敷夫々御焼失無御座候　而も御痛所数不知国中惣地震出水も有之事尤十二月大晦日まで始終四五日ぶりにて震り候 ［注］1，この地震の印象は非常に強く県内の記録は上記以外にも多い，これらの中には安政元年 11 月 5 日の地震としているのもあるが，改元は地震後の 27 日に行はれているので嘉永の大地震というのが正しい。 2，参考のために古来の地震の年とその津波記念碑の所在地をあげると 1361（正平 16）東由岐康暦碑 1605（慶長　9）鞆奥大蓮華弁 1707（宝永　4）〃　小蓮華弁，浅川稲観音 1854（嘉永　7）松茂春日神社，徳島蛭子神社，赤石豊浦神社，

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1854	嘉永７		東由岐修堤碑，志和岐天王神社，木岐王子神社，牟岐小学校前，出羽島観栄寺，浅川天神社及御崎神社，川東村熟田峠
			1946（昭和 21）浅川天神社
1855	安政１	大雨	［井内谷村誌］11.15(1.3)　翌 16 日越前若狭に大風
		大雨	［井内谷村誌］12.14(1.31)　近国記事なし
		地震	［井内谷村誌］12.12(1.29)　前記の余震
		地震	［井内谷村誌］12.30(2.16)　前記の余震（大）
			［注］［井内谷村誌］に安政　２年１月 14～5 日かなりの地震 4, 5 度，２月毎日少々づつ 3～5 月は 10 度位づつ　6 月 4, 5 度　7 月少々 8，9 月 4，5 度にて止むとあり
1855	安政２	地震	［徳島年表］1.14(3.2)　前年 11.5 大地震の余震
		干	［徳島年表］7.7(8.19)　近国に記事なし
		大水	［徳島年表］8.20(9.30)　この時四国近畿東海道大風雨洪水
1856	3	大水	［勝浦郡誌］8.1(8.30)大洪水　勝浦川沼岸の被害は多大であったという
			［板野郡誌］洪水のため板野郡川内村小松新田破提直ちに復旧
			［注］この日さぬき洪水
1857	4	病	［徳島年表］1～2 月(1～2月)風邪大流行
		風雨	［板野郡誌－中財家文書］六月晦大暴風夜九ツ時雨降出し候　翌 7.1 (8.20)日朝雨降止候処に昼晴間出来仕別而雨天とも相見え不申所朝五ツ時より追々風募り雨も頻りと降り朝四ツ時過大いに吹出し我建物瓦大損し居宅の萱吹取れ困入申候　夫より追々吹よはり居申候，此節暴風荒増左に相記　御国中にて凡四万軒余潰家之由平石南頭庄屋橋本米蔵殿組十七ヶ村にて六百軒余潰家御座候
			居宅納屋共潰家大松村 45　榎瀬 35　竹須賀 10　沖島 36　宮島 25　中島浦 38　加々須野 34　平石 58　鈴江 10　鶴島浦 20
			右此川之内尺相置候新田処は尚又大潰に御座候
			［川内村史］朔日朝六ツ時頃より風雨相催し候処　別て大なる事にも無之候　さしたるしけに相成様にも相見へ不申所　四ツ時頃より追々風烈しく相成り四ツ半時より八ツ時頃迄は　誠に古今未曾有の大風にて家の中にては命の程無覚束相覚何れも風雨最中に　木影杯に立寄り或は掘建納屋等に立寄り相凌申候
			当時　平石村にても居宅納屋棟数合四十六軒潰家に罷成候　誠に前代未聞不代之事に候
			当時本村内難渋の者取調上申候処江戸表に於て藩公御憐愍に被覚召格別の御仁慈を以て相救恤銀を賜はり（普通四貫匁より三貫五百匁位）組頭庄屋より分配せり。
			去る七月朔日風雨出水に付私組左書村々御損亡相占め奉指上覚
			早渕　府中　和田　矢野　延命
			地高二千六百三石八斗六升三勺八才　内七百八斗一升一合四勺御損亡
			潰家居宅　九十四軒　　半潰居宅　二十八軒

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1857	安政４		潰納屋　三十九軒　　半潰納屋　　二軒 氏　　神　一ヶ所　　倒　　木　　五本 怪我人　男一人　　非人小屋　　三軒 ［三好郡誌－足代村教法寺過去帳］　朔日朝より九ツ時迄大風に而当寺先年より有之候センダン木吹倒れ本堂東吹倒れ鐘堂たおれ誠に前代未聞之事に候，此日当村にて数家たをれ候 ［三好郡誌－池田町安宅嘉市談］　以前掘立であったのを石垣建に変じた三間に六間の藁屋に瓦の庇を附けてあったが風が吹き出すとぎいぎいと鳴り出すかと思ふ間に庇は取れて雨戸は飛ひ屋根は半分ひっくりかえり又家の西にあった三尺廻の桐の木は引抜けて空中に飛び上がった当時池田に倒れた家が十軒以上もあったといふ。　この時四国近畿大風雨洪水
		風雨	［徳島年表］7.29(9.17)八朔水という ［辻風土記］四ツ時から吹出し翌朝五ツ時まで大風雨 ［川内村史］晦日諸方新田堤大荒鈴江村地盤切処繕ひしが丸切となり鈴江鶴島宮島沖島各四ヶ村田地入水し大松村は中堤にて一向入水せざりしなり右風雨又々潰家橋本米蔵殿組十七ヶ村にて居宅其後潰家二百三十軒あり候 ［三好郡誌］七月廿九日四ツ時分八月朔日朝五ツ時分迄殊之外大雨並雨に風余程相添吉野川杯五拾年以来之大水と一統評判仕且当村名見（妙見？）大還（往還）水二尺程乗り申候に付下郡辺は出水にて余程難義仕助船御手当之趣に相聞申候　尤谷にては水聊にて（以下数文字不明）十一州予州大雨之様相見申候当処様より上中下に被成御助銀弐百壱貫七百目被下候（慶応２　8.6の同郡誌参照） ［注］四国近畿大風雨洪水
		天	［徳島年表］8.10(9.27)慧星により市郷二日　瀬戸村７日漁猟停止 ［辻風土記］五ツ時より出かけ四ツ時西へ入る　五十間位長く尾を引く
1858	5	干	［徳島年表］苗床が出来ぬ位　近国に記事なし
		病	［徳島年表］夏コレラ大流行 ［注］［虎列刺病流行記］　６月コレラ病始めて長崎に発しその勢の猛烈なる僅に一月を経て江戸に伝播せり　８月上旬より中旬に至る際毎日の死亡千を以て数え京都大阪は８月に発し北海道は７月より始まる気候秋冷におもむき一時は屏そくせしも翌年に至り再発して各所に熾盛の勢をなせり万延元年には稍衰たいの状を現し文久元年に至りて全く消滅せり
1860	万延１	水	［川内村史］5.11(6.29)より16日迄七日間大雨洪水国中大半入水［板野郡誌］春降雨麦不作平石にて上一石二斗下六斗米価百五十五匁(五月相場)［徳島年表］5.15大水につき御注進　　この時中部，関東，奥羽に風水あり
		風雨	［板野郡誌］7.11(8.27)大風雨高潮津浪により青毛立秋　徳島より撫養に至る海辺被害二万二千石余　徳島より南方海辺に至る被害五万石余年貢御免となる

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1860	万延1		［板野郡誌－中財家文書］聊之間暴風に候得共夜七時より大潮にて津浪出来仕小松新田長原浦米津新田富吉富久下別宮宮島大潮打にて稲毛大疼に相成撫養塩浜大荒岡崎十人衆家潮に被引南方答島橘浦小松島松原海辺総て大荒迷惑仕候　米作大疼麦作は夏大疼申　八月末之比米相場極々高値新米百五十匁九月中旬に至り米八十匁麦他国極上百六十匁他国麦御国へ積込御免被仰仕候
			［川内村史］八月早稲米一石百五十五匁の高値　四国近畿大風雨
		長雨	［徳島年表］秋麦蒔が出来ぬ　近国の記事見当らず
1861	文久1	洪水	［徳島年表］月日不明　近国にも見当らず
1863	3	水	［板野郡誌］8.12(9.24)夜水，この出水には板東の谷川非常の増水なりと見えて堤防の決潰破損は三十余ヶ所に及び延長殆んど六百余間百姓共は非常の困難なりとて勧農普請を出願したる庄屋よりの歎願書下記の如し（以下畧）
1865	慶応1	水	［徳島年表］6(7)月洪水　　近国に記載なし
1866	2	干飢	［山川町史］夏80日干
			［注］［日本凶荒史考］この夏陰冷，秋風水の災ありて諸国登らず これより先安政6年わが五国通商以降国内の需給円滑ならず加うるに維新の変革を前にして天下擾乱，ために穀路は閉ぢ，商路通ぜず去秋より諸物の価騰貴す幕府即ち酒造の量を減じ或は外米の輸入を許可し以ってその調整を計りたるも昂騰この秋に至って殆んど底止するところを知らず庶民大いに飢窮す
			［徳島県史料年表］よりこの頃の米価（肥後米石当り匁）を摘記すると
			元治1正月　10　慶応1正　10　2正　10　3正　10　平年
			164.5　325.5　207.5　513　473　1300　147　590　150～160匁
		風水	8.6(9.14)［徳島年表］寅の水という　　四国近畿中部関東奥羽荒れる
			［板野町史］七月の末より八月の初に至って霖雨蕭々として降り続き所謂危日の八朔に篠突くばかりの大雨と変じ二日，三日はウの毛を散らす細雨と化して遂に前代未聞の大水となれり，桧，板東，萩原は谷川溢れて怒濤を起し谷除堤は押破られ田圃は大に荒されて損害誠に莫大なりしも人畜に傷害なかりき津慈川崎三俣の方面に至れば頼る悲惨の状況を呈せり　殊に夜中の出来ごとなれば周章狼狽は一方ならず津慈にては破提三十有余間高きも座上三尺以上，低きは軒を浸せり　三俣にては上流破提の狂瀾を蒙り酉の水より二割以上の浸水なりしも人畜等に故障なく田圃の砂入泥位置に止まれり　然るに中間に位せる川崎にては惨状を極めたり　渡場上りの大井利付近二十間余の破提と共に怒濤の衝に当たる家屋の流失倒壊による圧死者数人を出せり　尚東西方願五十間新道地三十間の破提あり
			［応神村史］七日夕には古来稀な大水となった　殊に暗夜の事とて防禦の途なく西貞方では助次墾の堤防が崩壊して一丈有余の水嵩となり倒家多く圧死するもの十人東貞方では圧溺死七人中原では別宮八幡前の堤防の上を越すこと五六尺の水量で八人の死者を出した

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1866	慶応２		［川内村史］五日より三日間連日豪雨沛然として降り吉野川水量膨張して沼川の堤防総越となり各所決潰して濁水猛然として奔入し本村一円低きも床上二三尺高きは天井に達する浸水を見たり　避難民は舟に乗り移るも四方海の如く生死の程を知れず，処々に救助を求むる声哀れにて之が救助に従事するものあり中財家は舟にて近傍四十人程を収容救助せり宅地生垣の上に給水船の往来せし如き　榎瀬土佐渡の付近堤防決潰して三百石の大船元天神社の付近に横はりしが如き奇観を呈せりと云ふ 前野乙八郎助下男二十二人流死，川ノ内十三人流死　飼牛馬十七疋空筋より段々流れ来りしと　御国中千人余も病死せり　秋作皆空筋の大豆も皆無処々より稲一石五斗位ある処もあり遅稲皆無なりしなり　沖島南部　渡辺家南池は当時の堤防決壊のため生ぜしなり ［大津村史］材木及建家併せて流物山の如し　大水とも洪水ともたとえ様なき有様，直ちに南山より北山へ一円，土地より各村とも一丈以上，木津金比らより徳島勢見山金刀比ら神社まで海の如し ［名東郡誌］7日夜大風雨洪水に相成り翌8日まで郷中分大荒御損毛地高12万8,860石9流死人2,140流牛馬1,700堤川除石腹崩れ犬走共129,390間山崩54,066ヶ所船破704流280 ［八幡村史］園世大洪水　園瀬橋付近の北岸堤欠かいし50間破提人家8死者20余名 ［富岡町史］豊益新田の伊勢家から高知県郡村誌資料の報告書中 慶応二年寅八月七日前代未聞の洪水の砌新田堤北西角崩れ新田内間一円水入に相成り居屋敷床地より水高八尺五寸其筋座上三尺八寸水入に相成り立毛相痛其節夜中の事故御用物並建具畳諸道具に至迄得取明不申有悉皆水潰りに相成（中畧）堤切口百十間堤長百間上ただれ石垣崩れ其修繕石土，砂土，赤土並石工賃手伝人賃共諸費惣高十二貫六百八十一匁五分入目を以繕ひ申 ［富岡町史－領家の森虎蔵談］富岡の土手が切れた為水が大層押かけて座上三尺になった皆々天羽友三郎方へ逃げたが，留って外の模様を見ていると富岡から道具がだんだん流れてきた，供し大正元年の大水に領家が二度に三百四十間も切れ西路見にも死人もあったに比べたら此近辺は結構であったと思う ［勝浦郡誌］1日から微雨降り始めて漸吹大風雨となり同八日の夜から暴風豪雨となり勝浦川沿岸五十余ヶ所の堤防大破壊し家屋数十戸流失し人畜の死傷は最も夥しかった ［三好郡誌］嘉永二年七月十日，十一日両日の大風雨には酉の水を呼起して皆々前代未聞の事と驚いて阿房水の名を附けたが安政四年には七月二十九日四ツ時から吹き出し又降り出して八月朔日朝五ツ時分まで意外の大風雨が打続いたので復もや前代未聞と驚いて五十年以来の大洪水じゃといふ処から是には八朔水の名を付けたが慶応二年寅の八月朔からの大風雨で復々前代未聞の寅の水一名七夕水を惹起して谷々はいふに及ばず吉野川の増水は一入にして里人の胆を冷やしたといふ　処で昼間字土居の浜井原茂三郎の話を聞くに同人

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1866	慶応２		の現住処は水面三丈余尺の高地にあるが当時は無かったが今同家の前にある前川与三郎持家の裏で其の庭より七八尺上った岸の上に井原茂三郎所有の梨の木があった夫に船頭弥十郎が船を繋いだのを見受けたが大正元年の出水は大きかったといっても前記前川与三郎の庭を走ったまでゞ済んだ　併し七夕水にも死人は勿論倒家もなかったといふ
			［多家良村史］ 8日［7日の誤］の夜から暴風雨　福原村より下流一体大被害
			（飯谷）長柱名西分の山岳崩かい
			其のま下の幸野家では土石のため川中に押出されして人が死んだ
		風水	［徳島年表－名東東郡誌］8.16(9.24)　　京都兵庫其他に風雨
1870	明治２	火	［神山町佐々木文書］12.30(1.31)徳島市籠屋町大火300戸
	3	火	［神山町佐々木文書］3.11(4.11)徳島市古物町100戸焼
		水	［大俣　高川原村誌］9.9(10.3)吉野川大洪水　7日に四国近畿の大風雨あり
1871	4	水	5.17(7.4)［板野郡誌］6月洪水のため川内村小松新田破提同年復旧
			［注］1.　6月は5月の誤り　2.　5.17(7.4)～18中四国近畿に大雨あり
		干	［山川町史］干76日
1873	6	水	8.30［板野郡誌］ 8月（及び9年9月）大洪水田野は大概砂漠の如く人家は戸々浸水し所々流家あり堤塘は数ヶ所の破壊，其の害実に少しとせず（牛屋島附近）
			［注］8.30四国中国大風雨洪水あり　尚本年より太陽暦を採用
		風雨	［板野郡誌］10.2大風雨洪水にて去る慶応二寅年より凡そ一尺位低しという
			［注］愛媛其の他に風水あり
1876	9	風雨	9.13　明治6年8月の項参照　愛媛其他に風水あり
1877	10	火	10.28［徳島年表］第三徳島丸火災（淡路　佐野海中に沈没73名死亡）
1880	13	風雨	8.25　四国近畿関東大風雨
			［日本気象資料］徳島県　24日午後8時より降雨10時頃巽の暴風起り雨最も強く翌25日午前8時頃より風位艮に変り同11時過風雨共にやむ（摘要類函抄）
1882	15	雹	［福岡県災異誌］ 5月福岡徳島栃木群馬埼玉新潟福井秋田茨城三重静岡十一県大雹降り耕作物を害する多し　5月及び8月降雹記事あり
		風雨	［日本気象資料］8.5四国中部東街道　暴風雨洪水　徳島にて往来の水嵩八尺なりと（摘要類函抄）
1883	16	干	［辻風土記］10月20日麦一粒も食はず西井川の人々万じゅ沙華の根を掘る
			［大俣村誌］村民雨乞のため神社に祈る　わらの餅を食う　全国処々大干
		風雨	［日本気象資料］9.11～12風雨強く中晩稲は少々害を被りたれども

西暦	邦暦	災　異	記　　事
1883	明治 16		他の農産物は概して害を被らず　美馬郡よりの報に依れば稲作は十分の二分雑穀類は一分甘薯芋塊は二分蕎麦は一分通　潤雨の為に蘇生せり（徳島県報告官報第七十四号九月二十五日）　九州四国近畿大風雨
		水	6.28［吉野川］工師ヨハネスデレーケ吉野川調査中洪水を見る（下記羽浦町史参照）
1884	17	台風	8.10　九州四国近畿奥羽暴風雨　［日本気象資料］台風は 11 日 14 時九州中部に来襲東進して四国を過ぎ 12 日 21 時紀州南部を掠めて東に去る九州四国及び紀州は暴風雨烈　中心七四〇耗以下
		台風	8.26［日本気象資料］九州中国四国近畿北陸暴風雨　25 日 14 時中心天草灘に来り夜中九州中国を斜に 26 日午前 6 時には佐渡付近に達し本州北部を横ぎり太平洋に出づ関東一般に電信不通となる中心 730 耗以下（台風調査報告） 県統計書による本年水災 2 回　死 16 牛馬 3 家 145 田 72 町畑 32 ［井内谷村誌］堤防決潰　流失 79 戸倒家 20 戸 ［羽浦町史－小笠原梅夢日記］天保七年より 49 年目の大飢饉なり早くも 6.27 暴風那賀川筋破提あり吉野川も大洪水にて家屋の流失溺死者多し，8 月 25 日早暁より沖鳴り喧しく南方より黒雲吹き，2 時より雨となり 6 時より暴風雨夜 2 時まで外見不能夜明けて田面を見れば権八（早稲）中稲類は白穂となり晩稲も損害甚しく村中平均ワセ 5 分中稲 8 分晩稲 5 分郡内 150 ヶ村中 41 ヶの里分は大痛みにて地租諸税上納不能
		凶作	風水害冷害で全国的な凶作となり本県も亦困窮する　水稲反収 89 升 ［八木沢善次］那賀郡で飢餓に頻せるもの 1,226 人 ［新野村誌］8.25 大風雨　稲作大被害で村方大いに窮迫，糊口に苦しむ 19 年 3 月までに救助を受けるもの 130 戸 420
1885	18	水	5 月［井内谷村誌］雨続き大洪水［山川町史］破提　近国に記事見当らず
		水	6 月［山川町史］さぎの首切れ　6.7 愛媛大雨又 6.17 暴風雨あり
		台風	［日本気象資料］　7.1 近畿中部関東　大風雨洪水 中心 735 ミリ以下の台風 1 日午後 2 時紀州南端に接近し同夜その東側を北上し 2 日午前 6 時に佐渡付近に至り東進して本州北部を斜断して太平洋に去る （台風調査報告） 徳島県 1 日は朝来雨勢一戸烈しく加うるに暴風（摘要類函抄）阿波にては吉野川の洪水にて頗る損害を与へたりと云へば勝浦那賀の二川も亦満水なりけるか（新聞集成）　県統計書による本年水災人 3 家 63
		病	［井内谷村史］8 月赤痢流行　［土成村誌］はしか流行 ［大俣村誌］伝染病院を建てる
		雷	［日本気象資料］9.1 名東郡へ落雷納屋を焼く（摘要類函抄）

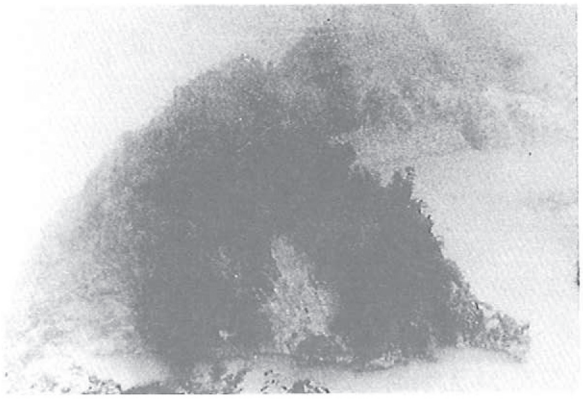
西暦	邦暦	災　異	記　　事
1885	明治 18	旋風	［日本気象資料］9.6 午前 10 時頃　徳島県那賀郡中林村沖合に旋風起り漁舟三艘を捲上げて十間余の高処の松原へ落し才見　日開野西路見　芥原　中島浦諸村を通り那賀川の高瀬船を二間余の所に捲上げた，その途中民家を破壊すること十数戸大樹を倒したものも少くない （摘要類函抄）
1886	19	干	7 月［井内谷村史］7.29 より 3 日間総雨乞い　7.8 月和歌山に記事あり
		台風	9.11［井内谷村史］暴風雨倒家 4 戸　九州中四国風雨 県統計書による本年水災（吉野川の被害）人 6
1887	20	豊作	反収 171 升当時の標準値に対し 142％程度の顕著な豊作
		水	7－9 月［徳島年表］この間の洪水により吉野川改修工事中止 尚［吉野川］に 8 月洪水とあるも近国に風雨記事見当らず
		台風	10.7 台四国沖通過［井内谷村誌］山林 6 町歩崩かい
1888	21	水	［大津村史］　7.22 吉野川洪水　流失物多し　和歌山風雨
		水	［大津村史］7.31
		台風	［日本気象災害年表］8.30 台風本県を通って日本を縦断四国近畿東海に被害 徳島死 51 全潰 2,862 半 989 ［徳島年表］橘に高潮高さ 8－10 尺，椿泊村役場の書類，漁具の流失多 ［大津村史］長江新田潮入 和歌山の最低気圧 717.7 ミリ
1889	22	病	［井内谷村史］赤痢流行死 20
		台風	［井内谷村史］8.18 暴風雨大水 ［紀州災異誌］台風四国中部を北上，和歌山の水害甚大（死者 1,221）
1890	23	台風	9.11 九州南東部から香川県に抜けた台風［徳島佐古－美馬豊太郎記録］名東（国府地上 6.5～8 尺坐上浸水 70 戸潰家 78 戸）那賀（流家 34 倒家 47） ［吉野川］善入寺島浸水
		風	［美馬豊太郎記録］12.8　14 時頃より暴風雨　東風烈しく徳島港では 50 年来の強風という　　［紀州災異誌］朝より雨，午後陣風雷
		病	［徳島年表］橘にコレラ発生　死 55
1891	24	雨	弱い台風が 8.2 ～ 3 朝鮮海峡を日本海え抜ける 徳島では早朝に雷雨あり午前中大降り日雨量 471.5 ミリの記録を作る
		台風	8.16 台風四国中部を北上輪島沖へ 徳島の最低気圧 733.6 ミリ　雨量 76　最大風速南東の風 20.1 米
		台風	9.14［井内谷村史］暴風雨 強い台風が 14 日長崎市から日本海に抜ける　徳島の総雨量 65 ミリ
		地震	10.28 濃尾大地震（06 時 39 分発）［理科年表］仙台以南全国有感 死 7,273 全潰 8 万　大断層生す余震 10 年余り（本県被害なし）

1892～1900年

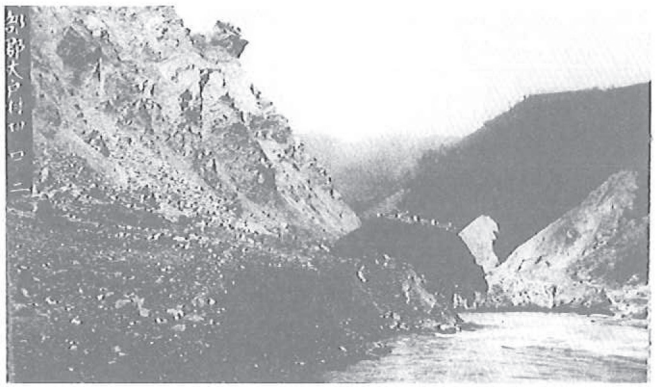
［明治 25 ～ 33 年］

1892年（明治25年）7月23日～25日　台風（洪水高潮）

7月23日06時



明治25年　高磯の崩壊（提供：立木写真館）



明治25年　高磯の崩壊（提供：立木写真館）

この朝高知市付近に上陸して山陰に抜けた台風。この時本県は暴風雨洪水高潮の大災害に見舞われその上山岳の崩壊も数知れずで近代に於ける災害のレコードを作った。然し台風としてはそれ程強いものではなく高知で733ミリ徳島738ミリ（7時）最大風速南南東の風23.3米，然し雨は22日3.9，23日211.2，24日245.8, 25日50.1計512.4ミリを計り7月の一日雨量としては第2, 3位の記録を残す程の大雨であったために大被害となった。

第2，3位の記録を残す程の大雨であったために大被害となった。

被　害	人		家				船	堤　防		道	橋	山岳崩	浸水反別	
(8.2現在)	死者	傷者	全	流	半	潮入		決	破				海水	雨水
	311人	89	2,635戸	644	2,559	36,424	478	57キロ	136	574	6	367万坪	6,799町	19,653町

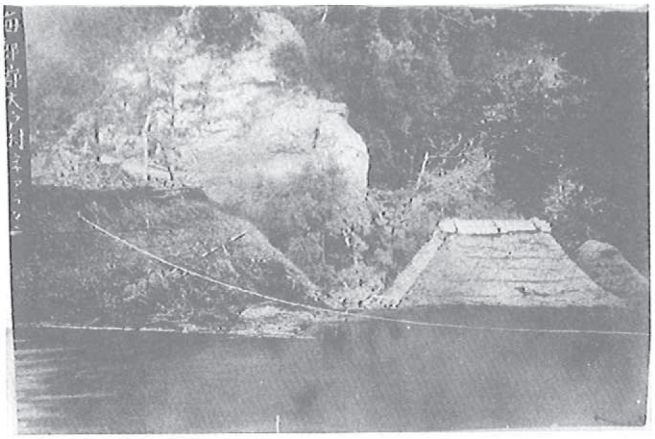
吉野川水位　名西郡23日12時14尺，24日10時16尺，25日18時26尺以後漸次引く阿波郡八幡村では座上4尺以上となる高潮。4時40分より測候所（現在徳島東警察）前の路上に溢れ始め7時半には最高19㎝に達し9時には終ったがこれは平水に比し9尺（2.7m）の高さである。市内8割は浸水した。

県内における満潮面よりの潮位

宍喰	鞆浦	川東	浅川	日和佐	木岐	志和岐	由岐	阿部	伊座利	椿	椿地	橘	富岡	平島
15尺	24	10	4	9	18	10	12	20	24	8	5	8	7	20
今津	和田	小松島	斉津	松茂	里浦	撫養	鳴門	明神	堂浦	北島	小島田	魚佐	大島田	室
12	13	10	10	12	10	11	6	6	6	4	6	6	3	3

この塩水は停滞7，8日に及び水稲，蔬菜を全滅させた，川内村では小松新田の堤防切れ翌26年復旧した。

山崩　海部郡のみで150ヶ所と云われるがその内保瀬の大崩壊は25日10時頃に起り死者47名を出す。これにもまして大規模なのは木頭村高磯山の崩壊である。25日11時大戸の高磯山は頂上



明治 25 年　高磯の崩壊（提供：立木写真館）

より半身崩壊し岩石は対岸久米鍛治春森部落を埋め新しい小丘を作ったが同時に人家 15 戸 65 名を埋没した。この小丘は高さ 150 尺（45m）のダムとなって濁水を 3 日に亘りせき止め，又流失に際し 150 戸に被害を及ぼし住民は家なく食なく惨憺たる光景を呈した。往時の下，中両木頭村の村界つづら峠に下記の記念碑が建てられた。

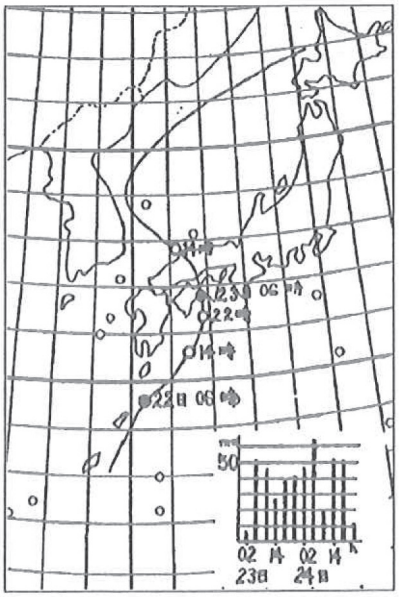
明治 25 年 7 月 25 日　大戸村高磯山岳崩壊し土砂那賀川流を堰止め逆流湛湃 2 里余に至る。当つづら峠は其の渦中にありて救助船を通渡す　　明治 37 年 12 月　下内伯三建之

［注］1. 本年の水稲反収は 94 升で標準値の 85％程度。

2. 7 月 23 日三岐田で遭難中の North American 号乗組（外人 15，日本人 7）を助け同村は紅綬褒章を授けられた。

3. 市郡別被害（川内村史）

	浸水戸	浸水反別	荒地	道堤破損(km)	橋（m）	船
徳島	10,736	763	280	19.5	15	15
名東	6,434	4,602	1,607	62.3	85	166
勝浦	495	2,048	658	38.2	796	31
那賀	5,085	5,177	2,497	127.9	385	267
海部	1,594	1,052	703	60.4	393	66
板野	8,596	8,792	3,346	128.2	358	50
名西	1,577	2,173	146	24.2	－	1
阿波	1,055	1,224	176	14.9	765	2
麻植	1,229	1,195	92	9.1	184	1
美馬	336	1,100	502	28.4	124	16
三好	122	588	108	26.4	45	5
計	37,286	28,714	10,115	541.5	2,651	620



台風経路と徳島 4 時間雨量

1893 年（明治 26 年）2 月 27 日　大雪

南方海上を東進した低気圧のため太平洋岸一帯に降雪したが徳島でも当日朝から雪となり 19 時に終り 33cm積った。これは明治 40 の 42cm につぐ第 2 位記録である。徳島の日平均気温は 0.1 度だった。

1893 年（明治 26 年）夏　大干　疫病

6 月末より 8 月中旬まで雨少く被害近国一帯に及ぶ，干ばつ，飢きん（山城谷村史）尚赤痢流行した（井内谷村誌）徳島では 6 月 24 日より 8 月 15 日までの 53 日間に雨量は 10 ミリのみ

［注］1. 徳島 7 月雨量 9.6 は少雨の第 1 位　　2. 本年反収 118 升　大体並　　3. この干ばつは群馬，静岡と近畿以西

1893 年（明治 26 年）8 月 17 日　台風

735 ミリ以下のものが九州南方から紀伊水道に入り 18 日早朝に和歌山に上陸して同地に大被害を与えたが徳島では北西の風 17.4m，74 ミリの降雨を見た。（日和佐 145，和食 193 ミリ）

［注］県の統計書によると本年土木被害は勝浦川 3 回吉野川 1 回

道 52 ヶ所，堤 34，橋 342，波止場 438，船 27，建物 5,183 軒，耕地流荒 11,333 町，復旧費 631.4

千円

1893 年（明治 26 年）10 月 14 日　台風

728 ミリ以下の台風が 14 日九州南部から四国南端通過，徳島東の風 15m14 日は各地 100 ミリを越え 12 ～ 15 の 4 日間雨量　徳島 257，鴨島 340，穴吹 275，富岡 238，池田 182 ミリ

1894 年（明治 27 年）1 ～ 2 月　少雨

前年 10 月下旬よりの少雨は 2 月まで続いた

徳島	10 月下	11 月上	中	下	12 月上	中	下	1 月上	中	下	2 月上	中	下
雨量	20.3	44.2	4.3	5.9	0.3	8.2	0.3	0.1	0.5	9.4	4.2	10.1	3.6
		54.4			8.8			10.0			17.9		

月雨量の少いこと 12 月 9，1 月 6，2 月 3 位である

894 年（明治 27 年）夏　高温　干ばつ

7 月 26 日より 8 月末までの徳島の降雨量 24.5 ミリ近国も亦凡て干ばつに苦しんだが同時に 6 ～ 8 月は驚異的な高温となり月平均気温は平年値より 2 度位の高目となった，これらは過去 70 年間では夫々第 2 位の高順位である

6 月　23.8（平年より +2.1）7 月 27.7（+2.0）8 月 28.4（+1.2）

尚このため年平均気温は 16.1 となってこれも大 5 につぐ第 2 位である。

［注］1［中野島村史］水争い［山川町史］137 日干［木頭村誌］旧 3.21 より 8.3 まで夕立程度の雨のみ，田植半分，金ぴらへもらい水　山で大火たき雨乞　三郎虫大発生

2　本年反収 114 升大体並

1894 年（明治 27 年）9 月 11 日　台風

720 ミリ程度の台風が 11 日宮崎海岸から米子付近に抜けた。この台風襲来に先立ち，吉野川流域に 10 日午前大雷雨あり徳島では 6 時から 14 時までに 280 ミリの大降りとなったので氾らんした。徳島では南南東の風 19.7m/s 雨量 10 日 289.2（この量は 9 月として第 2 位の記録である）11 日 55 ミリ，10 日撫養 222 ミリ，11 日川島 128 ミリ，市場 115 ミリ，12 日石井 225 ミリ

［注］県の統計書による本年土木被害　死傷者 9 人，家畜 9，建物 1,853，耕地 7,971 町，道 17，堤 10，橋 237，波止場 78，船 16，復旧費 330.2 千円，警察統計による水死者 14

9 月 11 日 14 時

1895 年（明治 28 年）7 月 24 日　台風

九州北西隅を掠めて日本海に入った 700 ミリ程度の優勢な台風。県内で多少の風雨を起した（井内谷村史）が大したことはなかった。徳島南の風 14m/s，64 ミリ

1895 年（明治 28 年）8 月 22 日　台風

22 日正午前に高知県須崎市西方から上陸した 735 ミリ程度の台風，徳島では南東の風 17.5m/s 一日間に 177.4 ミリ（4 時間量 115.5 ミリ）を計ったが，和食では 401 ミリに達し那賀川で洪水被害を出した

22 日雨量　日和佐 148，小松島 177，川島 175，市場 126 ミリ

［注］1．県の統計書による本年土木災害　那賀川 2 回，死者 1 人，建物 462，耕地 2,036 町，道 12，堤 4，橋 42，波止場 472 間，船 7，復旧費 135.1 千円

2．［八幡村史］勝浦川　大野堤防 2 ヶ所（70 間），園瀬川 3　犬山 1 破提

1896 年（明治 29 年）8 月 18 日　台風

730 ミリ程度の台風が 18 日朝足摺岬付近から上陸し，12 時頃米子沖に出た。愛媛，高知の被害大

徳島では南南東の風 19.0m/s，日雨量 62 ミリだったが川井 260 ミリ．脇町 166 ミリを計り，板野郡では堤防大破あり（板野郡誌）

［大津村誌］九ヶ村堤防大破損

1896 年（明治 29 年）8 月 30 ～ 31 日　台風

715 ミリ程度の台風が 30 日 19 時頃潮岬付近から北上したので通路の近畿から北陸に洪水被害を出した。

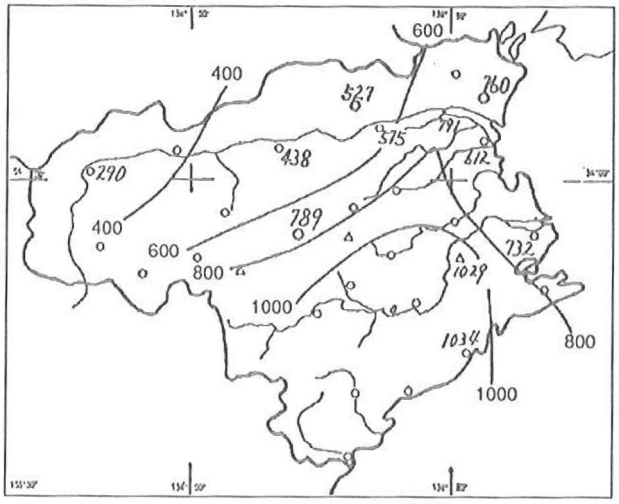
徳島では 30 日夜北の風 23.2m/s，日雨量 140 ミリを計ったが石井 170，川島 180，市場 195，脇 150，池田 178，和食 242 ミリ等を観測した。

1896 年（明治 29 年）9 月上旬　大雨

4 日低気圧が日本海を通ったあと四国沖に前線停滞大雨になり引続いて 735 ミリ程度の台風が 11 日九州四国の南岸を掠めて同夜御坊付近から紀伊半島に上陸した，このため近畿以東広い範囲に水害を起した。県内で日雨量 100 ミリを超えたのは 4，6～12 日であり

徳島の	4 日	5	6	7	8	9	10	11	計	12 日
日雨量	25	47	33	211	56	87	98	203	760 ミリ	N20m

特に，日和佐は 7 日 408，石井 205，6 日和食 242，12 日川井 290，川島 236 の大雨があり合計雨量は図の通りで県南奥地の雨量は 1,100 ミリ程度と思われる，この時の吉野川の水位は 26 尺（徳島）だった。



9.3 ～ 12 の 9 日間雨量

［注］1. この大雨で本月雨量は和食 1,102.4，日和佐 1,091.1

2. 県の統計書による本年土木災害は那賀川 6 吉野川 4 回で死傷者 57 人，建物 13,257，耕地 80,763 町，道 52，堤 46，橋 496，波止場 969，船 112，復旧費 1,141.7 千円

尚警察統計による水死者は 2 名となっているから上記 57 は傷者が多かったものと思われる。

3. ［徳島年表　井内谷村誌］9 月 7 日暴風雨　［大津村誌］11 日暴風雨はげし，稲毛平均 35％白及び黒穂反別 228.5 町とあり詳細次項　［木頭村誌］長雨暖冬

1896 年（明治 29 年）　不作

上記のように相つぐ台風出水に災いされて本年の水稲反収は 91 升（当時の標準値の 81％程度）明 25 年以来の凶作になった。各月について調べると

徳　　島	7 月	8 月	9 月	10 月
平均気温（℃）	24.9（－0.8）	26.0（－1.2）	22.2（－10）	17.4（－0.1）
雨　　量（mm）	363（182%）	297（156）	835（279）	211（110）
日　　照（時間）	196（89%）	243（99）	140（83）	162（98）

これから低温多雨少照であることが判る，特に 9 月の多雨は大不作の明治 32 年につぐ（多い方からの）第 2 位記録である。県内では和食，日和佐が 1,000 ミリを超えた

［注］尚徳島の雨量 2,559 ミリも明 32 につぐ第 2 位記録となる　和食では 436.8 ミリ

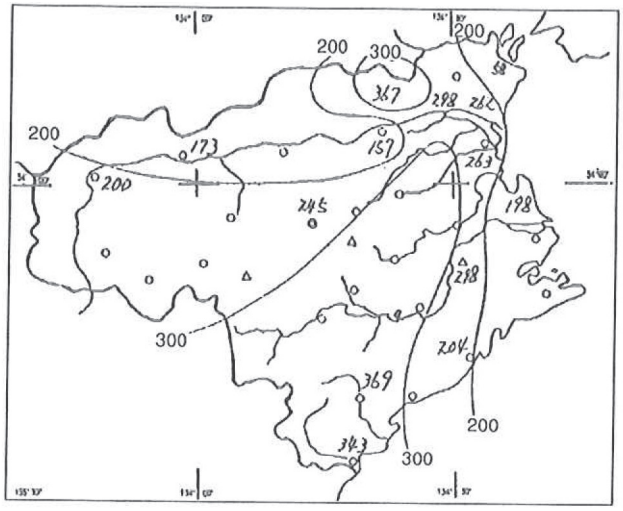
1897 年（明治 30 年）　夏　干ばつ

7 月 23 日より 9 月 2 日まで（特に 8 月 16 日までの 25 日間）海岸地方は割に雨少く西日本一帯の干ばつと歩調が合ったが山間では 200 ミリ以上のところがある。米作は並み以上だった。　徳島では 7 月 22 日～ 8 月 19 日の 29 日間の雨量は 5.0 ミリ

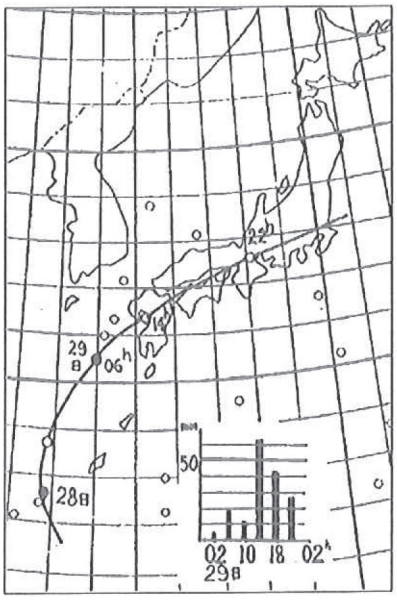
1897 年（明治 30 年）8 月 5 日　火

徳島監獄署　大火（徳島市史）

1897 年（明治 30 年）9 月 29 日　台風



9.26 ～ 30　4 日合計雨量



台風経路と徳島雨量

この月 2 箇の台風害を受けた（板野郡誌に水災恩賜金下賜の記事あり又井内谷村史に 9.27 大水）

一つは 722 ミリのもの 8 日の夜紀伊半島南部に上陸し東京の北を抜け全国に非常な災害を与えたが本県では大したことなく（6 日雨量和食 238 ミリ小松島 139 徳島 134）他の一つは 29 日の午後九州中部から上陸四国の北岸を通り暴風雨害を起した。本県では 26 日から降雨が始まり 29 日最も強く（市場 252 ミリ）特に吉野川流域では県南最多雨域と同量の 360 ミリになったところがあり大きな被害を出した。徳島の気圧 739.8 ミリ南の風 8.9m/s

［注］1. 県の統計書による本年水災 2 回死傷者 63 人，家畜 41，建物 15,511 棟，田畑 12,769 町，道 17,715 間，堤 8,051，橋 126 ヶ，価格 966.2 千円，尚　警察統計による水死 31 は 9 月 29 日の台風によると思われる

2. ［吉野川］上板町高志で修理中の水門 320m，破提流失 13 戸，死者 18 人，20 町埋もれて砂丘となる

1897 年（明治 30 年）9 月　秋りん

前記の台風に加えて月内の雨天は 20 日前後（徳島で 23 日），総雨量も 400 ～ 800 ミリとなった（徳島の 667 ミリは 9 月としての第 3 位多雨記録）

［注］この年は冷害によって全国的な凶作となるが本県はそれ程でもなかった

1898 年（明治 31 年）　豊作

この年は台風もなく，夏期気温は平年以上で殊に 7 ～ 10 月の雨量が少なかったので多少の日照不足を克服して明治 20 年についでの豊作となった。反収は 168 升，当時の標準値の 145％程度である。

1899 年（明治 32 年）5 月 13 日　ひよう

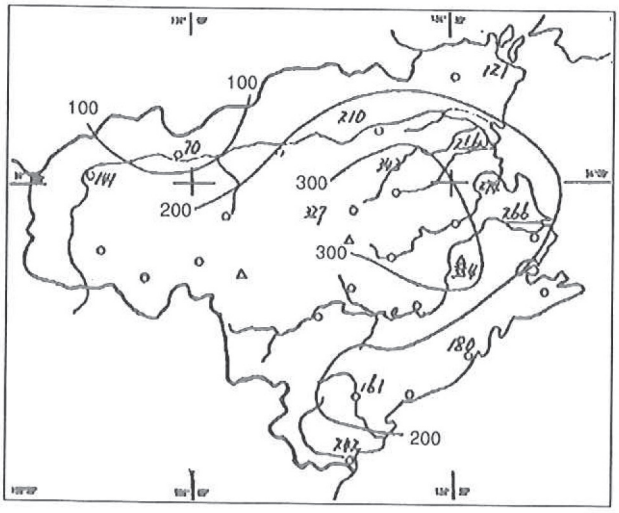
［木頭村岡田日記］麦種代もなし翌日黄砂　太陽赤く朝夕甚だし　［諸事誌留薄］海川木頭大霰

1899 年（明治 32 年）6 月 8 日　台風

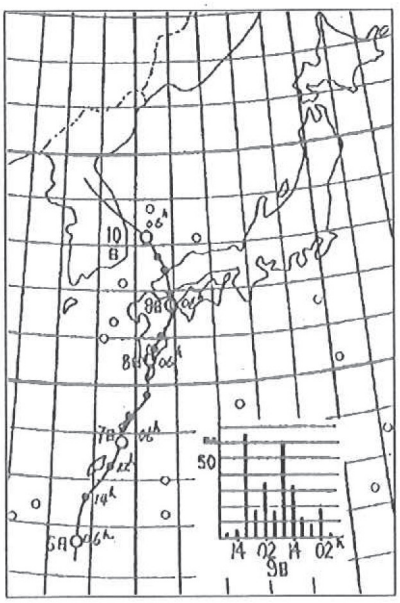
台湾西海上から 8 日 6 時北九州に上陸した 745 ミリの台風に伴い本県でも 200 ミリ内外の大雨が降った。特に和食 283 ミリ，徳島 219，小松島 186，撫養 162 等（7 日），このため多少被害があっ

た（風は弱い）

1899 年（明治 32 年）7 月 8 日　台風（洪水）



明 32　　7.8 ～ 9　　2 日間雨量



台風経路と徳島の 4 時間雨量

715 ミリ以下の台風が 8 日 8 時頃大隅半島から上陸し以後非常にゆっくり北進したので，西日本の雨は多かったが風は左程では無かった

徳島では 9 日 741.4 ミリ南東の風 15.3m/s，日雨量 8 日 91 ミリ，和食 302，川井 295，石井 216，小松島 197，9 日徳島 165 ミリ，富岡 110，特に吉野川上流の本山は 386 及び 137 ミリ，県内の 8，9 日合計雨量は上図の通り

このため吉野川は洪水となり堤防決壊し死傷者多数を出したが 10 日午後漸く退水した（板野郡史）

［諸事誌留薄］海部郡木頭村では安永 4 年以来の大洪水という

［注］1. 県の統計書による本年土木災害は吉野川 5 回，那賀川 2 回で，死傷者 123 人，家畜 69，建物 12,200，耕地 34,020 町，道 21，堤 70，橋 829，波止場 1,565 間，船 430，価格 7,732.9 千円

2. 尚警察統計による洪水死 82 名の内 77 名はこの日吉野川洪水により残り 5 名は勝浦川による模様

3. ［高川原村史］牛の島堤防決潰 32％減収

［吉野川］鳴門大麻松茂も大海のようになる

1899 年（明治 32 年）8 月 28 日　台風

28 日午後九州南西部を掠めて愛媛県から鳥取に抜けた 720 ミリ位の優勢な台風，通路一体は豪雨によって非常な災害を受けた　特に愛媛県では別子銅山の崩壊によって 512 人の死者を出す外河川氾らんで 150 人程度あり其他香川 340 高知 36 名となっている，幸い本県の雨量は剣山周辺が 200 ミリを超したが平野部で 100 ミリ以下で風も南の風 17.3m/s と大したことはなかった。

［注］［井内谷村誌］大暴風，吹名 40 戸中 13 戸倒

［山城谷村史］大洪水寅年の水に劣らず平水上 80 尺(25m)の旧伊予川橋も流失の危機せまる

1899 年（明治 32 年）9 月 8 日　台風

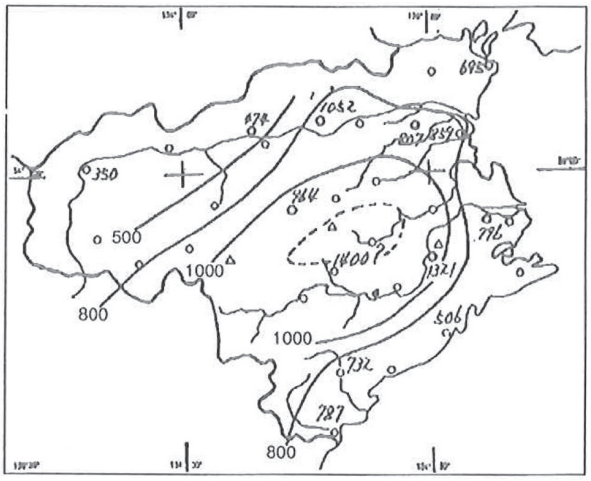
730 ミリ程度の台風が本県南岸沿いに北東の風進し 8 日 13 時頃和歌山付近から上陸したため，本州中部地方では豪雨があり洪水害を出した。

徳島では 8 日北の風 21.0m/s　260.2 ミリを計り（この日雨量は 9 月の第 3 位記録）剣山南麓で 400 ミリ程度だった（和食 354 ミリ）

［注］［八幡村史］園瀬川 1.6 丈で破提　［西祖谷山村誌］重末小学校校々舎倒　［横瀬町史］未曽有の被害

1899 年（明治 32 年）9 月下旬　秋りん（台風）

台風らしきもの一つは台湾方面から 21 日九州西岸を北上し他の一つは西日本のはるか南方を 23，4 日に西進するなどで 20 日から 30 日の 11 日間に連続降雨があった特に 22 日は豪雨となり徳島 239.8（これは 9 月日雨量として第 5 位）市場 462 ミリを計り徳島の旬間総計は 513 ミリになった。8 日の台風関係と合せてこの月の合計雨量は図の通り多雨地で 1,400 ミリ位になったと思われる，尚これは次項のように非常な低温と日照不足を来たし大不作の原因になった。



明 32　9 月雨量

1899 年（明治 32 年）　不作

相つぐ台風の襲来と天候不順は，大不作を来たし反収は僅か 89 升（標準値の 75％程度）だった。本年の天候を平年と比べると稲作前期の気温 4 月は 13.9（平年より－ 0.1）5 月 18.7（＋ 0.9）6 月 22.9（＋ 1.2）［高い順では第 3 位］7 月 25.4（－ 0.3），又後期としては次表の通りである

月	8	9	10	11	
気　温	26.1（平均より－1.1）	21.1（－2.1）	15.1（－2.4）	10.9（－1.4）	
低温順位	8	1	1	6	
雨　量	271（平均の143%）	859（286）	165（86）	46（50）	（9月多雨量第1位）
日　照	182（平年の45%）	91（54）	175（104）	159（99）	（8月少照第6位,9月第1位）

［注］1. 徳島の本年雨量 2,695 ミリは 70 年間の最高位，尚和食では 4,446 ミリとなる。
2. 本年の反収と比較できる低収は次の通り

	明 17	19	25	29	本年	昭 20
反収	89	92	94	91	89	86

1900 年（明治 33 年）9 月 28 日　台風

27 日　沖縄から北上 28 日朝四国沖を高速度で通過した大型台風で潮岬の気圧 721.1 ミリ浜松 718.5 ミリ

徳島では北東の風 17.4m，総雨量 216.5 ミリ県内では中部以北海岸が雨量多く 200 ミリを超え富岡では 320 ミリを計った。短時間の降雨だったので各地共多少の被害を見たようである。

［注］県の統計書による本年土木災害は吉野川 4 回那賀川 3 回で，死傷者 11 人（死者 5 人），建物 5570，耕地 16,813 町，道 8，堤 14，橋 188，波止場 25 間，船 126，復旧費 1,113.7 千円　［八幡村史］洪水

1901～1910年

［明治 34 ～ 43 年］

1901 年（明治 34 年）6 ～ 7 月　梅雨

6 月初旬に数日引き続き雨を見た，又下旬から 7 月中旬まで　殆んど連日降雨あり徳島では 6 月 21 日～ 7 月 15 日までの 25 日間の雨日数（1 ミリ以上の日）17 日で 402 ミリの降雨があった。

1902 年（明治 35 年）4 月 12 ～ 14 日　霜害

10 日以来季節風の吹出し強く本県内でも，雪を見たが引続いて高気圧の移動があり全国的な降霜となり本県では，藍，桑等に被害が出た。徳島の最低気温は 11 日 3.0，12 日 1.2，13 日 1.4（霜）14 日 3.3

1902 年（明治 35 年）7 ～ 8 月　低温多雨

6 月は入梅に引続き 23 日まで降雨あり低温の徴候があり 7 月初旬一時晴間を見たが中旬以後天気悪るく平年より－ 1.5 度 8 月又多雨で下旬になって漸く日照がある程度で平年より－ 1.8 度と 2 ヶ月低温が続いたので本県の水稲収量は稍低下した

［注］1. この年は全国的な凶作になり東北地方で殊に甚しかった

2. 徳島で 7.16 ～ 8.17 の 33 日間に無雨の日は 25　28　29　30 日のみ又 8 月日照は 174 時間で 5 位少照

1902 年（明治 35 年）8 月 10 日　台風

720 ミリ程度の台風が，10 日 14 時頃熊本に上陸し鳥取付近を経て日本海に抜けた。剣山周辺の雨量は 300 ミリに達し吉野川流域で 50 ミリ程度だったが降雨は今月の初めから中頃まで殆んど休むことなく続き特に 4，5 日には合計 300 ミリも降っている事からかなりの洪水被害も出した模様であり死傷者，流埋全潰戸に対して御下賜金並びに慈善義捐金が出た（板野郡誌）又多雨地では月総雨量が 800 ミリを超えた。徳島南東の風 11.5m/s（7 時）

［注］県の統計書による本年土木災害は主に吉野川で起こり大部分はこの台風による

8 月 10 日 14 時

死者 4 人，傷者 3 人，家全潰 52，半 29，床上 1,633，床下 4,881，堤決 101，道 46，橋 23，防波堤 24，海岸 59，田流 13 町，浸水 2,523，船 54，損害 346.0 千円

1902 年（明治 35 年）9 月 7 日　台風

この台風は，四国南方を北西進し 7 日夕方宮崎県に上陸，大分を経て山口県から日本海へ出た 730 ミリのもので高潮被害も大きく殊に相模灘に浪害を出した。徳島では南東の風 16.4m/s（11 時）61 ミリの雨だったが剣山南麓では 300 ミリを超えた。丁度水稲開花期に当り多少影響した。

［注］［八幡村史］破提

1902 ～ 03 年（明治 35 ～ 36 年）　暖冬凶作

35 年 11 月に始まり 36 年 4 月に終る暖冬は下記の通りに甚しく尚この間 3 ～ 5 月は多雨で麦類は記録的な凶作となった。

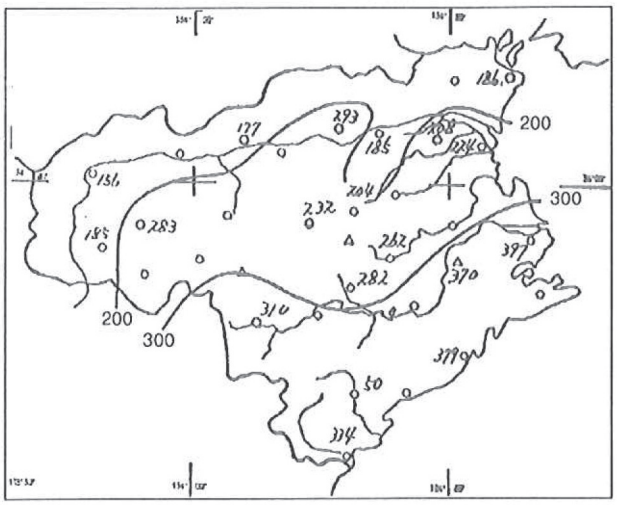
月	11	12	1	2	3	4
徳島の気温	13.7	9.6	6.2	5.7	10.0	14.4
平年より	＋1.4	＋2.1	＋1.2	＋0.7	＋2.2	＋1.2
高い順位	6	2	8	－	5	5
36 年麦作反収 大麦 93　裸麦 76　小麦 23 升						

1903 年（明治 36 年）7 月 8 日　低気圧（大雨）

6 月下旬から連続降雨して 7 月に引続き，遂に 8 日の梅雨末期豪雨となった 7，8 両日の合計雨量は図の通りで南部山地に多く北部吉野川筋が少い。那賀川其他県南小河川の氾らん被害があったものと思われるが不明

尚徳島の 7 月雨量 409 ミリは多量の第 3 位である

［注］県統計書の本年被害　家全 1，半 1，床上 8，下 185，堤 35，橋 20



明 36　7.7 ～ 8 日　2 日間雨量

1903 年（明治 36 年）8 月　少雨（多照）

7 月は平年の倍近くの雨を見たが月末頃から 8 月に続き尚 9 月上旬まで甚しい晴天続きで徳島では 8 月最少雨量の記録となった。県内 8 月雨量　小松島 2.7，徳島 7.9，脇町 9.3，宍喰 14.3，大枝 15.4，富岡 16.2

又今月の日照時数 309 時間は平年の 126％で多照の第 3 位

1904 年（明治 37 年）8 月 31 日　台風

27 日南西諸島沖からゆっくり北上 31 日室戸岬付近に上陸，本県内を通り姫路付近から日本海へ抜けた台風，強風はなかったが雨量は，1 日 350 ミリに達したところあり（下分上山）然し本月前半の旱天のために，大きな被害にならなかった。今月は日照時数 318 時間を記録し平年の 130％で第 1 位の多照となる。

1905 年（明治 38 年）6 月　梅雨

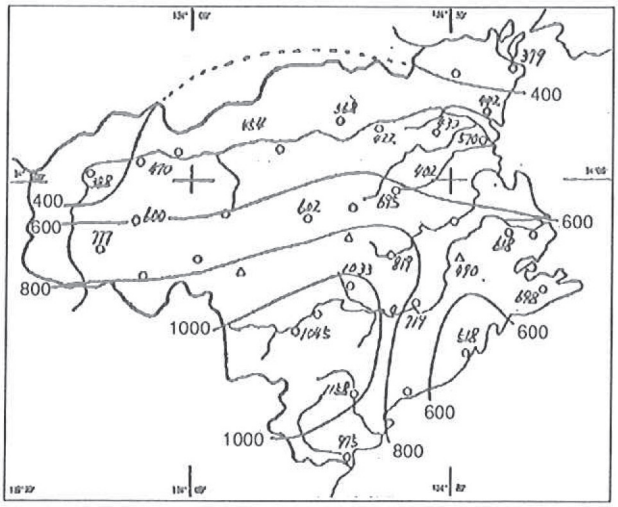
9 日以後殆んど連日雨になった（下旬に 3 日間無雨）

月雨量は平年の倍以上で特に那賀川上流の多雨域では 1,000 ミリを超え徳島でも多い方から第 2 位記録となった。

尚この間に県内で日雨量 100 ミリ以上は 13，14，19 ～ 21 日等，然し　散発的だったので大きな洪水にはならなかった。

但し麦類(特に大麦)の収穫に相当影響がある。

反収　大麦 98　裸 109　小麦 90



明 38　6 月雨量

1905 年（明治 38 年）6 月 2 日　地震

安芸灘の地震で広島愛媛で壊家 48 戸を出した徳島の震度 4，3 分間振動を感じた。

1905 年（明治 38 年）8 月　低温

5 月以降平年並のところ 8 月に入って急に全国的な低温になった。8 月平均気温 25.1（平年より － 2.1）その上多雨（月計 444 ミリ平年の 233% で記録は第 5 位）少照（月計 171 時間平年の 70％で少い方の第 3 位）で水稲反収は 159 升（並）だった。特に 16 日には山岳方面で 300 ミリを超す大雨があり（川井 371 坂州 336 下分上山 307 ミリ）諸川出水した。

［注］全国的な気候不順は 8 月だけでこの時三陸沿岸では平年より － 4 度となり米反収は平年の 17％に過ぎなかった。9，10 月は平年並に返った。　［木頭村誌］うんか大発生

1906 年（明治 39 年）8 月　干ばつ

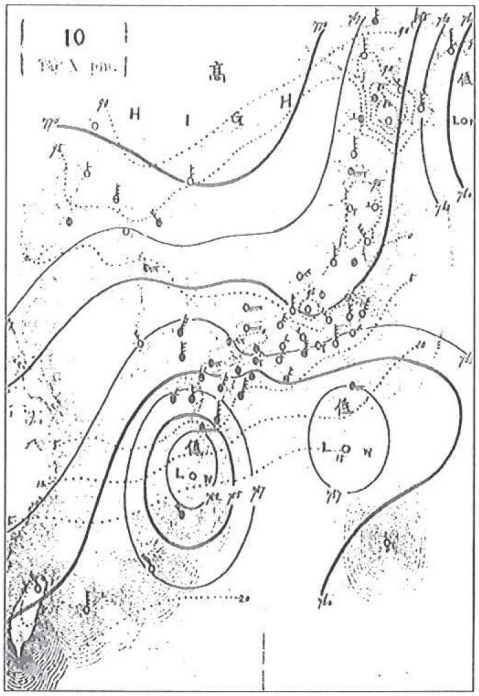
雷雨も四回あり内陸では 200 ミリを超えたところもある（下分上山）が沿岸は好天連続し 2，30

ミリに過ぎなかった

徳島では21.2ミリで8月中の少い雨としては第4位である。1ミリ以上の降雨は2，13，17日の3回でしかも13日に半ば以上の12.3ミリ降っているので相当な干ばつと云える。9月に入って時々雨があり水稲の収かくは並となった（反収171升）

1907年（明治40年）2月10～11日　大雪

所謂台湾坊主が四国沖合を通過したために大雪となったもので10，11日の徳島の平均気温は1.5と1.1度，積雪42cmを見た，これは積雪の最高記録となるが県内各地も同様大雪となり（半田70cm）農作物に多少の被害を出した。

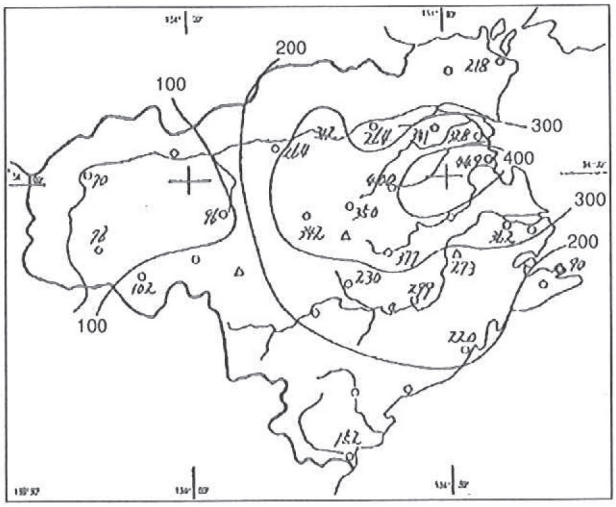


2月10日17時

1907年（明治40年）8月23～25日　大雨

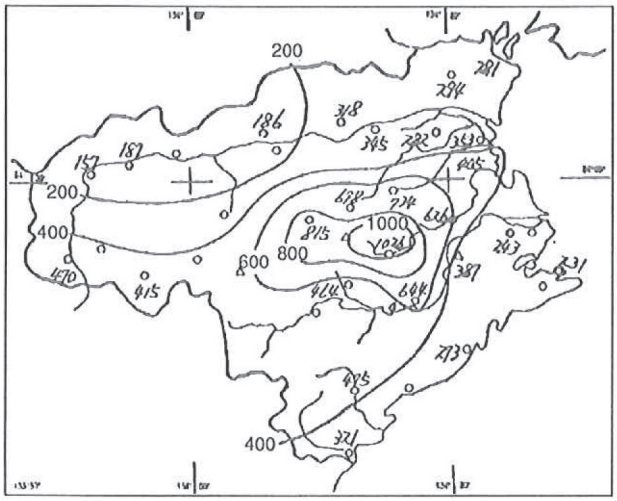
この雨は四国沖に停滞した熱帯低気圧によるもので図のように特に中部沿岸に多かったため河川の大氾らんにはならなかったが徳島では8月の日雨量としては第2位記録を作り多少の被害を出した。

日雨量	23日	24	25
徳　島	24.4	268.5	35.2
小松島	107.0	225.0	117.2
富　岡	71.1	196.2	94.7



8月23～25日　3日間雨量

1907年（明治40年）9月7日　台風（洪水）



9月4～8日　5日間雨量

7日の夜から8日の午前中に九州西岸を北上し山口県を通って日本海に抜けた740ミリの台風で西日本は大災害を受けた。九州北上中に速度が落ちたことは大雨時間をのばした。

7日徳島の最大風速東南東の風13.6m/s（14時）日雨量213.5ミリ

県内では全般に4日から降り6，7日が最も多く8日までの合計雨量は左図の通り

	福原	鬼籠野	下分上山	川井	朴野
6日	386	346	262	286	249
7日	371	264	275	279	241

このため吉野川勝浦川下流では非常な出水となった。吉野川水位21尺（徳島市）

［注］1. 被害（県の統計書により年合計）死者 19 人（内吉野川 16 人），傷者 27 人，家全 360，半 465，床上 10,411，下 13,002，堤決 235，道 204，橋 100，防波堤 47，田流 51 町，畑 128，浸水田 6,686，畑 7,039，船 54，損害 2,181.6 千円

2. ［山城谷村史］大洪水［板野郡誌］連日の大降雨により吉野川河水激増し濁流狂奔し各所堤防決かい

其他を合せて 85 ヶ所延長 2,825 間に及び大代の極小区域を除くの外全部浸水す人家浸水座上 4 寸～ 4 尺，之に加えて潮水も浸入して惨状名状すべからず稲作皆無となる

3. 今月総雨量は　福原 1,193，朴野 942，川井 921，おろの 909

4. 今年の水稲反収は 135 升で当時の標準値の 86% 程度

1907 年（明治 40 年）9 月 17 日　大火

橘浦　18 時より翌 18 日 2 時まで全焼 96 半焼（全町の 1/6 程度）

1908 年（明治 41 年）8 月 6 日　台風

四国の南を通って 7 日夜伊勢湾に上陸した台風だが本県のかなり近くを通って大雨となり 6，7 日の合計雨量は山手で 400 ～ 300 ミリを計った。6 日の雨量は福原 353 ミリ，坂州 253，西宇 233，上名 239，鬼籠野 220（風は強くない）

［注］1. 尚この月は 5 日より 28 日まで雨天多し　この間の無降雨日は 5 日程度で和食，坂州の月量 1,000 ミリを超える

2. 県の統計書による本年災害 13.7 千円

1909 年（明治 42 年）4 月 6 日～ 7 日　低気圧

5 日台湾北部から出た低気圧は九州と四国南東部をかすめて和歌山の南へ上陸しながら急激に発達したため各地に猛烈な風雨被害を起した。徳島では雷雨を伴い（6 日 21 時頃）最低気圧 739.8 ミリ西の風 14.6m/s を計ったが季節には稀な大雨（100 ミリ内外）だった。引続き県下では晩雪を見た

［注］［辻風土記］渡船場で 17 名水死

1909 年（明治 42 年）6 月 10 日　地震

15時50分発の中震で震源は紀伊水道, 徳島の震度4有感時間24秒, 尚名古屋, 岐阜, 福井等に有感, 高知は無感だった。

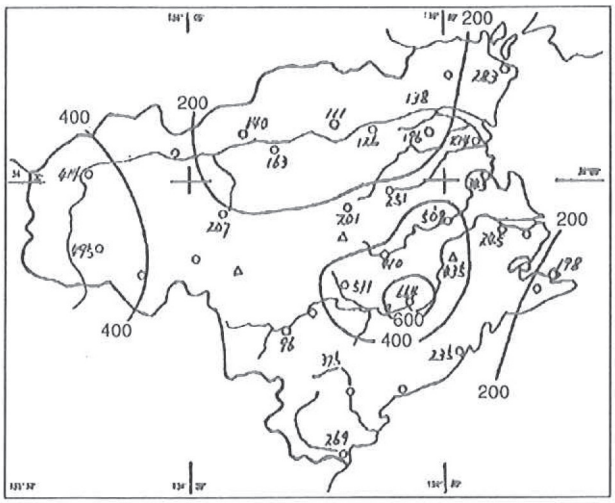
1910 年（明治 43 年）5 月 10 ～ 11 日　台風

11 日朝紀伊半島に上陸した 730 ミリ程度の台風だったが季節が極めて早く又風雨も甚だしかったため関東以西に大被害が出た，和歌山では気船沈没で 53 名死し神戸港でも 30 船以上が沈没する等又香川県では高潮も加わり被害は大きかった幸い徳島では最低気圧 736.8 ミリ北西の風 11.1m/s（11 日 02 時），降雨時間が短かったため被害は軽かった（吉野川水位徳島で 16.1 尺），10 雨量

福原 341 ミリ，鬼籠野 337，朴野 290，下分上山 257，神野川井 247，西宇 232

1910 年（明治 43 年）9 月 8 日　台風

6 日沖縄の西を通り 7 日 22 時に島原半島から上陸して東進し徳島付近を抜けた台風で始めは示度が深かったが上陸して急に衰え京阪以西に多量の雨を降らし水害を起した。本県でも各河川水害を見たが風が弱かったので（徳島北北東の風 6.7m/s）割合に軽微だった（吉野川水位徳島で 17.7 尺）この時県下の降雨は早いところで 2 日に始まりおそいところで 10 日に終っ



9 月 3 ～ 8 日　6 日間雨量

ている。

日雨量は　池田 254，大枝 170（6 日），日野谷 165（4），130（5），126（6），108（7）等

［注］1. 今月は引続き雨天多く日照時数は 101.5 時間で平年の 61％，少い方から第 2 位の記録となり，水稲反当 148 升豊作の 41，2 年に比べてかなり低い（当時の標準の 93％程度）

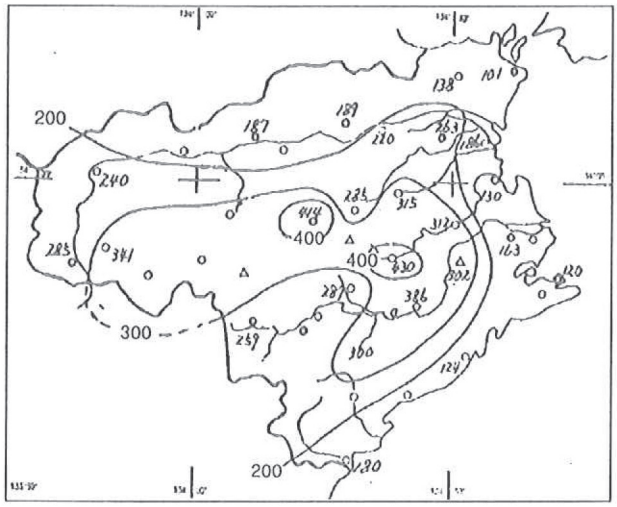
2. 県統計書の本年土木災害　住全 60，床上 359，下 1,055，堤決 104 ヶ，道 1,412，橋 85，田流 31 町，畑 36，浸水田 532，畑 517，船 19，損害額 406.1 千円

3. ［山城谷村史］大洪水　崩かい数所　川口で一家埋没 5 死者，2 戸流，相川で 1 戸流

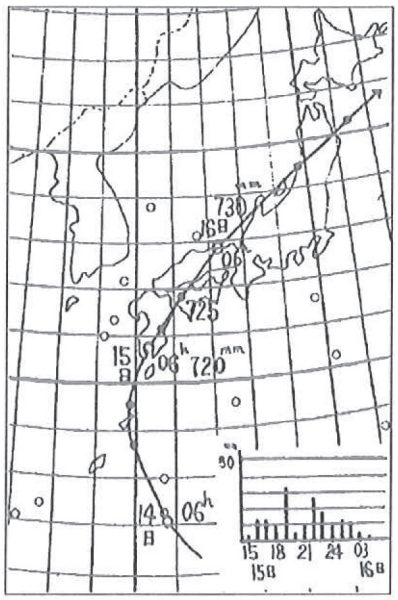
1911～1920年

［明治 44 ～大正 9 年］

1911 年（明治 44 年）8 月 15 日　台風（土佐水）



8 月 15 ～ 16 日　2 日間雨量



台風経路と徳島毎時雨量

A クラスの大型台風で本邦の被害は大きかった。

徳島の最低気圧は 736.6 ミリ, 南東の風 12.9m/s (21 時)。大体の雨は 15 日中に降ってしまったが，県内の雨量分布は図の通りで，吉野川では，上流多雨のため洪水被害となった。従って世に土佐水という。

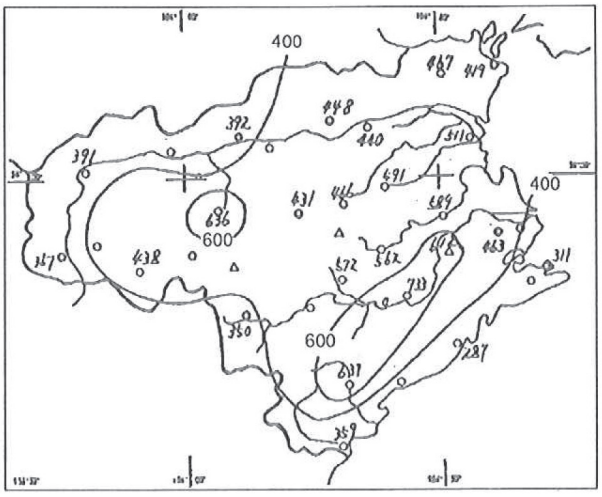
（15 日）福原 373 ミリ，朴野 359 ミリ，川井 333 ミリ，大枝 326 ミリ

被害　死者 21 人，傷者 7 人，不明 6 人，住全 164，半潰 308，床上 13,255，下 5,478，船流 57，流埋地 585 町　浸水 17,442 町

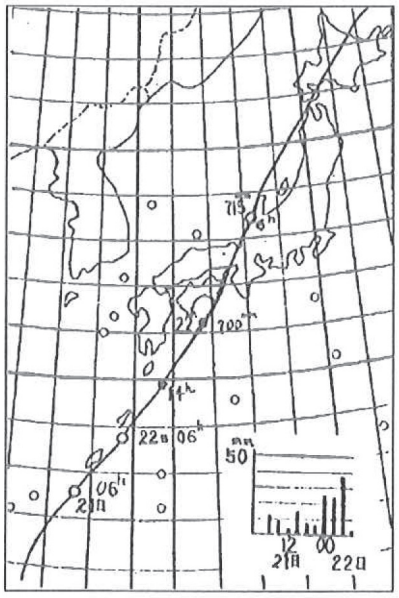
水位　脇町 11m（16 日 5 時）徳島 7.6m

［注］県の統計書による本年土木災害　堤決 153 ヶ所，道 1,090，橋 381，田流 1,178 町，畑 559，浸水田 795，船 79，損害額 1,174.9 千円

1912 年（大正 1 年）9 月 22 日　台風（洪水，高潮）



9 月 22 ～ 23 日　2 日間雨量



台風経路と徳島 3 時間雨量

22 日夜半前に県南海岸を掠めて阪神地区に上陸した A クラスの台風で, 中心示度は 700 ミリ位（和歌山で 711.3 ミリ，大阪 714.9 ミリ，徳島 717.4 ミリ）

徳島では，幸い風は北西の風 16.7m/s（23 日 03 時）に過ぎなかったが，大水害となり，海岸では高潮に見舞われた。

この台風のため，全国的に災害が発生し死傷者多数を出した。関東では列車の転ぷく事故もあった。

風雨状況　21 日昼頃から始まり，23 日早朝までに，多いところで 600 ミリを超えた

日 雨 量　21 日　和食 357，神野 305，朴野 302 ミリ

22 日　一宇 555，朴野 431，市場 378，福原 351ミリ

尚 300ミリ以上は　大寺，川島，下分上山，大枝，坂州，神野，鳴門等

河川の出水は，吉野川　徳島 7.5m，脇町 10.5m，那賀川・勝浦川・岩脇・丈六寺 6.3m となり，板野郡で田面上 3m に達したという。

高潮　室戸台風と殆んど同じ通り方をしたので，沿岸の高潮は相当であったと思われる（上記の板野郡田面 3m の半は潮入とする）

伊島で 23 日 1 時より 2 時半まで，70 年来の高波であった由（30 間の高波と伝えているが，大き過ぎるようだ）

［下注 3 参照］

被害　死者 81 人，傷者 53 人，不明者 14 人，住全 426，半潰 796，床上 26,708，下 16,359，船流 316，沈 41，破 421，流埋面積 1,850 町，浸水 28,102 町

内　訳

死者	徳島 1	名東 7	勝浦 1	那賀 5	海部 2	名西 7	板野 27	麻植 10	阿波 10	美馬 4	三好 7
全潰	徳島 1	名東 79	勝浦 6	那賀 33	海部 36	名西 54	板野 116	麻植 25	阿波 39	美馬 12	三好 25

［注］1. 徳島で 9 月の日雨量最大記録 306 ミリはこの時に得られ，又本月雨量 630.5 ミリは，第 4 位になる。

2. ［脇町誌］大谷川氾らん 50 戸流失［八幡村史］洪水［高川原村史］吉野川洪水［板西町史］22 日 17 時頃より増水を始め，23 日正午には寅の水より 2 ～ 3 尺高い，14 時より減水を始め 24 日 4 時には交通開けたが堤防の決潰等もあり被害は非常だった。併し寅の水と違い白昼で比較的惨状を出さなかった　とにかく空前の大水で大寺分署内で溺死 9，畜 10，被救助 1,431 人，浸水 130 戸，流家 73，全潰 52，半 31，田畑流埋 5.5 町，破提 3 ヶ 300 間，道路 3 ヶ 40 間

［橘］2 時俄かの高潮 5 尺で　負傷者 1 人，倒家 64，浸潮 462，其他堤防道路等被害　同 30 分に潮引く

［椿］浸潮 150 戸，船 50 流失，漁具を失うもの 206

［福井村］海岸破提 600 間，浸水 40 町歩

［海部郡誌］由岐では堤防殆んど破損数十戸破壊または流亡

3. この台風が遥か南方にあった 19 日に，既に大きなうねりが沿岸で観測され，接近時には津波の如しと云われた処多く鎌倉まで被害があり，伊勢湾では軍艦の座礁が 4 あった。

1912 年（大正 1 年）10 月 2 日　台風（大雨）

二つの台風が 3 日朝及び昼頃に四国を通過したために起った大雨で那賀川流域で 3 ～ 400 ミリになったが特に徳島は稀有の大雨 463.4 ミリを計り日降雨量の第 2 位の記録を立て尚一時間雨量も 85.4 ミリに達した。しかし，小範囲のため格別の大事には到らなかったらしい。徳島南の風 8.0m/s（14，15 時）

［注］1. 上記のようにこの年は台風被害が重なったため，水稲反収は 138 升に過ぎず（当時の標準値の 84％程度）

2. 県の統計書による本年土木害は，死者 94 人，傷者 169 人，住全 1,712，浸水 46,021，堤決 1,037，橋 678，道 2,944，田流 757 町，畑 419，船 934，額 4,694.6 千円　尚，警察統計による水死 1 月 1，8 月 1，9 月 50，10 月 2

1913 年（大正 2 年）6 ～ 8 月　干ばつ

6 月の梅雨期に入っても雨少なく 7 月は 3，4，7，17 ～ 19，22 日等の外，乾天が続き，小松島の如きは，月合計 2 ミリに過ぎず，徳島の 13.7 ミリは 7 月として第二位少記録になった。8 月に入って 18 ～ 21 日に雨らしい日を迎え尚月内に 1，2 回降雨したので漸く干ばつ被害を軽減することが出来た。水稲収量は非常に悪いという程ではなかった（171 升）が陸稲は反収 39 升で最低となる。この間の徳島の気象状態（平年比較）は次の通り。

	7 月	8 月
気温（℃）	25.3（－0.2）	26.5（＋0.1）
雨量（㎜）	13.7（－186）	57.3（－123）
雨日数（1 ミリ以上）	3（－7）	5（－3）

無降水連続　6 月 25 ～ 7 月 17 日［27 日 0.6　28 日 0.7　4 日 4.6　7 日 4.5］7 月 24 ～ 8 月 17 日［8，9 日 0.1］

［注］1．今夏は，東北・北海道に冷凶，西日本に干ばつを発生した。水稲反収北海道 0.8 斗青森 3.1 宮城 7.5 福島 7.7 徳島でも 7 月 5 日から 15 日まで著しい低温が続き，10，11 日の最低気温 15.3 及び 15.6 は 7 月に於ける低極第 1，2 位を占める。引続き 8 月に入っても度々低温が現れ，5 日の最低気温 17.8 は 8 月中の第 5 位であった。

2．8 月 2 ～ 4 日雨乞（井内谷村史）

1914 年（大正 3 年）1 月 13 日　降灰

前日の鹿児島県桜島の大噴火による火山灰

1914 年（大正 3 年）　麦凶作

前年 11，12 月は多雨少照，本年に入ってもその傾向があり気温も高目で

1 月		2	3	4	5	6
気　温	5.5（平均より +0.5）	5.7（+0.6）	10.6（+2.6）	12.6（－1.4）	18.7（+0.9）	22.0（+0.3）
雨　量	17（平均の 40%）	66（106）	135（138）	113（94）	279（200）	245（126）
日　照	199（122%）	143（93）	173（96）	200（102）	178（85）	161（93）

麦作に影響が大きく大麦（82 升）裸（99）小（86）は，明治 36 年以来の低記録となった。

1914 年（大正 3 年）7 月　干天

6 月末から天気恢復して 7 月に入り上旬時々微雨あり，12 日特に吉野川筋で 100 ミリを超える雨を見たが，中旬は晴天連続して 18 日徳島で計って最高気温 37.1 度は（旧観測地に於ける）第一位記録となった。尚晴天の持続傾向が強く無雨連続期間をあげると 7 月 13 ～ 22，29 ～ 8 月 2 日，8 月 6 日～ 21 日，27 日～ 9 月 8 日等となる。このように時々降雨があったので大きな干害にはならなかったが，7 月の平均気温 27.9，最高気温月平均 32.2 等夫々第 1 位記録である。

［注］1．8 月 3 ～ 5 日雨乞（井内谷村史）2．水稲反収 198 升は良

1915 年（大正 4 年）7 月　干天

7 月初旬の前半に 4，50 ミリの降雨を見た外，6 月頃から晴天が続き，処によって俄雨を見る程度だった。特に中旬に気温急昇し，14 日徳島で計った最高気温 37.1 は，前年 7 月と同様に 7 月の（旧観測地に於ける）最高位記録となる。県内の月雨量は 50 ミリ内外で，徳島の 50.5 ミリも第 4 位少記録である。

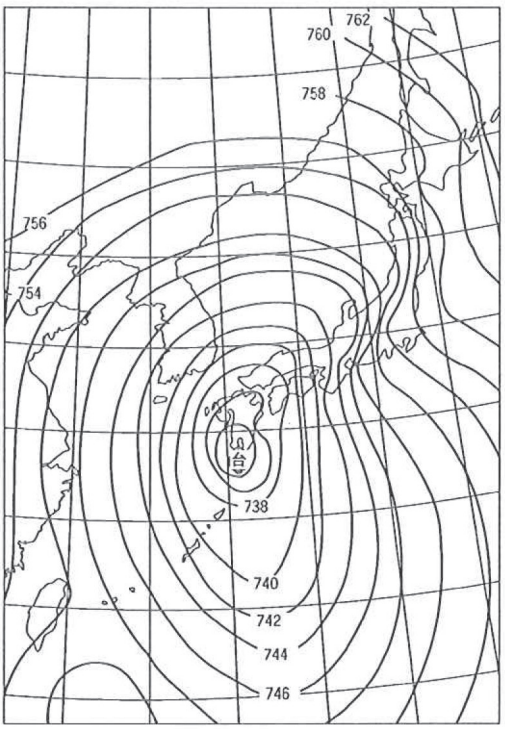
［注］26 ～ 28 日雨乞　（井内谷村史）

1915 年（大正 4 年）9 月 8 日　台風．凶作

この台風は九州のはるか南方から北上を続け，8 日午後大隅半島から上陸して，同夜北九州を通

り，朝鮮東岸に沿うて進んだ。当地方では，3日から本格的な雨が8日まで続き，特に6日以降に大降りし，那賀川上流では600ミリに達したが，吉野川流域では一般に少雨だった（200ミリ程度）。大きな洪水にはならなかったが，時期が丁度水稲の開花期に当っていたため，二日続きの強風（カラ風）で大被害を受け，反収は111升，明治32年以来の低記録になった（標準値の66％程度）。最低気圧738.8ミリ，8日南東の風15.0m/s，9日南の風10.5m/s

［注］［木頭村誌］うんかずい虫



9月8日14時

1915～1916年（大正4～5年）4年9月～5年2月　温暖

暖冬の気配は前年の大4から始まり，10月，1月は2度以上の高温になったが，3月に入って平年以下になり，その後もあまり高温にならなかったため，麦類には大きな影響は出なかった。

	大4				大5		
	9月	10	11	12	1	2	3
平均気温(℃)	24.8	19.9	14.1	7.8	7.3	6.4	6.7
平 年 差	+1.6	+2.5	+1.8	+0.3	+2.3	+1.4	−1.1
高温順位	2位	1	2	−	1	−	×

1917年（大正6年）1月　寒冬

前年の暖冬に引きかえ本年から急に寒候期間に入り，1月の平均気温3.3は，平年より−1.7，低い方からの順位は第6位だった。このため降雪も多くミカン類は凍結被害を出した。

1917年（大正6年）8月3日　台風

四国南方から真すぐに北上した台風は，3日室戸岬付近から上陸し，高松鳥取付近から日本海へ抜けた。県内雨量は，福原を中心に，鬼籠野，坂州，朴野，和食で200ミリ以上（福原506ミリ）だったが，7月炎天のあと大きな被害にはならなかった。　徳島の気圧739.7ミリ，南の風11.4m/s

1917年（大正6年）10月10日　台風

10日夜，四国南岸を掠めて11日未明和歌山付近に上陸した台風で，県内では150～300ミリの雨が降り，特に中心の直前で短時間強雨となったが，大害は出なかった。徳島の気圧739.5ミリ，南東の風17.3m/s，204ミリ

［注］尚9月から10月にかけ曇雨天甚で多く，徳島の雨日数は夫々18日，又10月の日照時数は，114時間で少い方の第1位だった（水稲収量は並の168升）。

1917～18年（大正6年末～7年始）　寒冬少雨

秋の悪天候に引続き11月から1月にかけ極めて低温となり，しかも降雨が少く特に海岸では，12，1月の両月間の総雨量は10ミリ以下，雨らしい日は一日というところも出た（鳴門，富岡，和食，日和佐，宍喰等の海岸地帯）。又20ミリ以下は，全県の東半分を占める。徳島では表のように

	11 月	12	1	2
気温（平年差）	10.1（－2.2）	4.9（－2.6）	3.2（－1.8）	4.8（－0.2）
低い順	1	1	5	－
雨量（平年比）	38.4（40%）	8.6（16）	3.6（8%）	32.9（52）
少雨順	－	8	2	

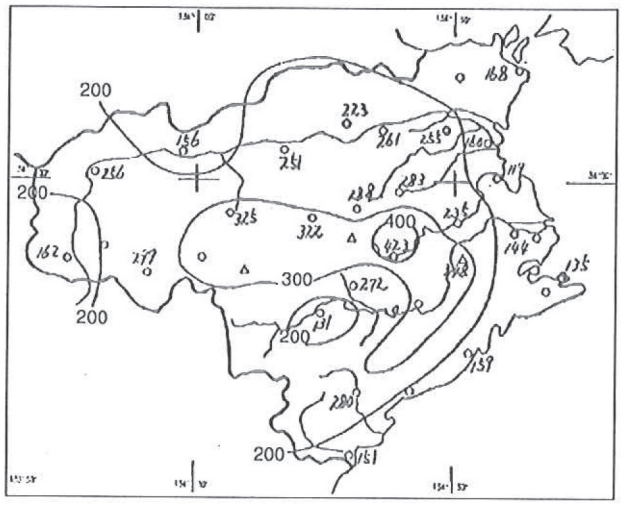
僅かの期間に多数のレコードが出てミカン，疏菜類に寒害を出した。

［注］大正 6 年の年平均気温 14.8 は低い方から第 2 位記録となる。

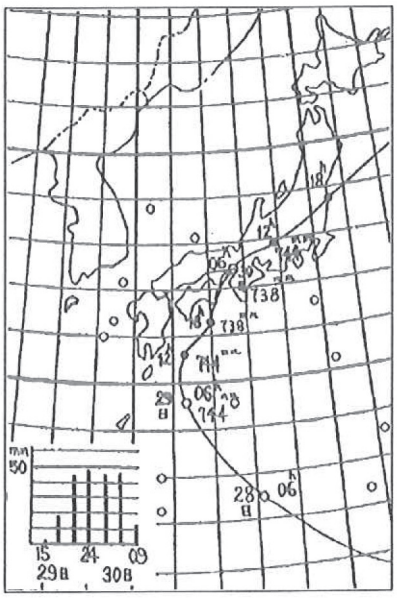
1918 年（大正 7 年）7 月 12 日　台風

この台風は，松山付近を北上同県に大害を与えたもの，徳島では 734.4 ミリ，南東の風 15.3m/s，雨は 10 ～ 12 日降り，福原 634，川井 530 ミリで最多雨域を作った。

1918 年（大正 7 年）8 月 29 日　台風



8 月 28 ～ 29 日　2 日間雨量



台風経路と徳島 3 時間雨量

室戸を掠めて 30 日朝，和歌山付近に上陸した台風，徳島の気圧 731.9 ミリ，東南東の風 22.0m/s，雨は 29 日に殆んど降り，福原 408，朴野 335 ミリ等を観測した。このため那賀川は大洪水となり，最高水位（宮浜で 20.6m 古庄で 6.2m）に達した。

［注］1. 県の統計書による本年土木災害は，死者 96 人，傷者 69 人（警察統計の水死者 9 月 29，10 月 6 名とあり）堤決 12,260 間，道 11,490，橋 400 ヶ，田 1,220 町，畑 32,865，建物 23,868 棟，船 1,846，価格 9,430.3 千円

尚上記水死 9 月 29 名は，この台風によるものと考えられる。

2. 尚，本月中 8 日，東から来て高知県南西岸に上陸した台風，21 日に九州を迂回して山陰に出た台風があり，夫々多雨地帯では 400 ミリの雨を見た。

3. これらの為，本月の雨量は多いところで 1,200 ミリを超す有様（朴野 1,270.7　福原 1,137.5 ミリ）で，平年の 3 倍に達し，徳島では 8 月多雨の第 6 位になった。

1918 年（大正 7 年）秋　不作

9 月 14 日南紀に上陸した優勢な台風があり，本県では，雨もそれ程で無かった（最多地で 250 ミリ程度）（徳島最低気圧 736.8 ミリ　北西の風 15.5m）が，水稲成熟期に度々悪天であったことは致命的な影響を与へ，反収 128 升は大正 4，明治 35 年に次ぐ低記録となった（標準値の 75％程度）

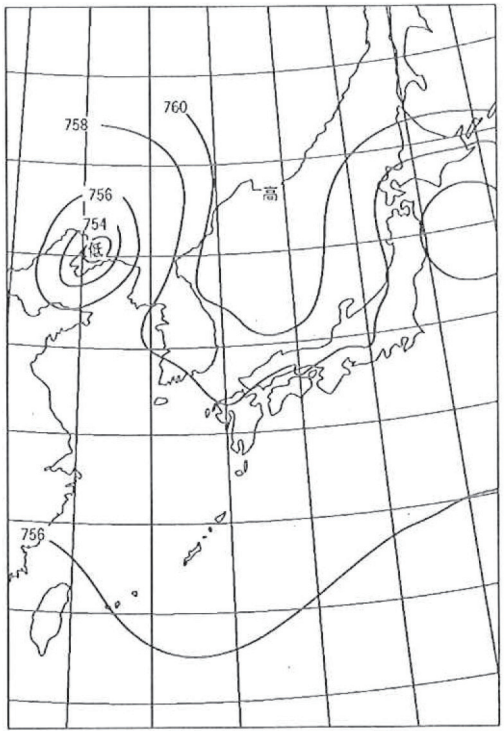
	8月	9	10
気　温(℃)	26.2(平年差－1.0)	22.7(－0.5)	18.0(+0.5)
雨　量(㎜)	437(230%)	379(126)	215(112)
日　照(時間)	207(85%)	184(109)	137(82)

1920年（大正9年）8月　大雨（台風多し）

今月下記の3ヶの台風が付近を通り，各回日量2,300ミリの降雨があり，尚8日夜の思いがけない大降りがあるなどで，月総雨量が1,000ミリを超えたところは朴野(1,743)，和食（1,570），神野，出原，福原，坂州等であった。

幸いな事に風が弱く（徳島の最強は21日東南東の風10.3m/s）大害にはならなかった。

1. 3日夜から4日朝にかけて四国沿岸を通り，紀州田辺付近へ上陸した台風，和食430，朴野347，神野345，徳島115ミリ（1～3日合計）
2. 15日朝，西四国南部から広島方面に抜けた台風で，13日から降雨が続き，次の台風にまで連続したので稀な不良天候となった。14～16日の3日雨量，和食474，朴野739，出原526，宍喰550
3. 20日の夜中に室戸付近より広島へ抜けた台風で20日から21日にかけて降り和食298，朴野363，出原261，大枝243（20，21日合計）



8月25日06時

［注］県の統計書の本年土木災害　死者2人，傷者1人，堤決728間，道454，橋12，田6,297町，畑1,728，建物1,660棟，船9，額585.0千円

1920年（大正9年）秋　少雨

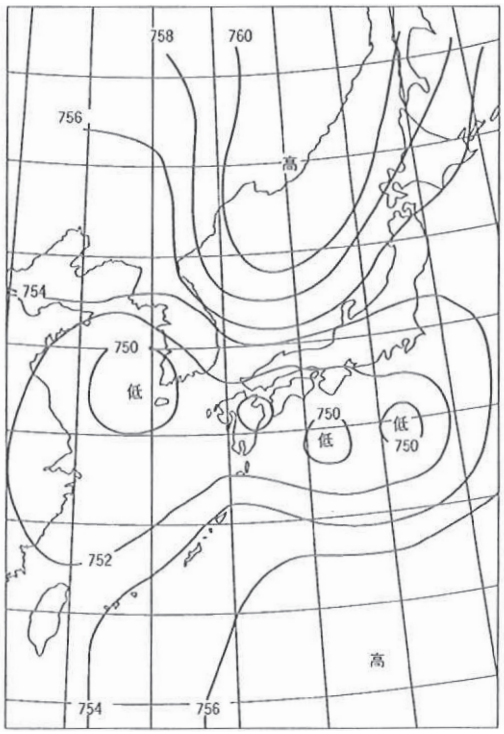
8月下旬から続いた好天の傾向が11月にまで及んだ。9月は特に吉野川筋に顕著，山地ではそれ程でなく，10，11月は全般に少雨であった。

徳島については，9月雨量71.4ミリは少い方から昭和8年に次ぐ第2位記録，10月54.8ミリは第4位の記録である。

1921～1930年

［大正 10 ～昭和 5 年］

1921 年（大正 10 年）6 月　梅雨（麦不作）



6 月 18 日 06 時

6 月 11 日から 21 日までの連続降雨で，400 ミリを超えるところも出たが，引続いて 24 日から 30 日まで連続して更に 100 ～ 200 ミリ降り，尚一日において 7 月 1，2 に 100 ミリ程度の雨を見た，加うるに極度の低温（月平均気温は 19.8 は 6 月第 1 位低極で平年より－1.9 度）少照（月日照時数 92.5 時間少い方から第 2 位）にわざわいされて本年の麦収は，大正 3 年につぐ低記録となった。　大麦 91 升，裸麦 123，小麦 74

1921 年（大正 10 年）9 月　長雨（台風）

9 月上旬から降雨日多く，3 日から 25 日までに，全県にわたる無降雨は，8，9，16，19 日の 4 日に過ぎなかった。尚この期間の終りに，潮岬の東から北上した台風があって，24，5 日の雨量は 200 ～ 300 ミリに達した（徳島の気圧 739.1 ミリ　西の風 12.7m/s）　又今月の日照時数は 119 時間で，平年の 70％に過ぎなかった（少い方から第 4 位）。

［注］1. 県統計書による本年災害額　死者 1 人，提決 3,376 間，海岸 400，道 1,782，橋 28 ヶ，田 3,262 町，畑 1,102，建物 962 棟，船 37，価格 677.9 千円

2. ［山城谷村史］25 日伊予川沿岸大雨で水田冠水

1922 年（大正 11 年）1 月　寒冷

1 月は各日とも平年より高温となったことが殆んどなく，特に 20 日には，日平均気温が 0 度を下る等の珍らしい現象も出て，月平均気温 3.1（平年より－ 1.9 度）は低い順位では第 4 位になる。

尚，この年は雪もよく降り，9 日をかぞえ積雪日数は 4 日あった。

1922 年（大正 11 年）8 月 2 日　旋風

三好郡三野町に，14 時頃竜巻発生し移動途上の住家を倒し，多数の死傷者を出した。特に消滅前 15 分計り停滞したところでは，300m 円内に立家を残さない程であった由

被害　住家全潰 13，半潰 8，非住家全 9，半 7，被害戸 150，死者 2 人，傷者 10 人，農地 10 余町

［注］県統計書による本年土木災害額　293.0 千円

1922 年（大正 11 年）　高温夏干

本年内で平年以下に下ったのは 1，3 の両月に過ぎず，7 月の外は下表の通り甚だ高温だった。又 2 月は降雨量多く，177 ミリで第 1 位多雨を記録したが 5，6 月かなり少くなり，8，9 月は特に顕著で水稲には好都合だった。

徳　　島	2 月	4	5	6	8	9	10	年	8	9
平均気温(℃)	8.0	14.0	18.9	22.8	28.3	24.7	18.1	15.9	雨量 58	100
平 年 差	+2.9	0	+1.1	+1.1	+1.1	+1.5	+0.6	+0.4	平年の 31%	33
高 順 位	2	－	3	4	3	3	7	4		

［注］今夏西日本干害

1923 年（大正 12 年）7 ～ 8 月　干ばつ

7 月下旬から 8 月中に全県的な降雨を見たのは，8 月 22 日，23，31 日位のもので，徳島のように 7 月 22 日から 8 月 30 日までの 40 日間に，降雨日 3 日（このうち 1 ミリ以上の日 1 日）というのもあり甚だしい干ばつとなった。

徳島の8月平均気温28.6は，平年より＋1.4第1位の高順位であり，7月の最高気温35.8（29日）及び8月の36.5（16日）は，共に珍らしい記録となった。

1923年（大正12年）9月1日　地震　　（関東大震）

［理科年表］東京　横浜等が壊滅的な大打撃を受けた。被害合計は，死者9.9万人，傷者10.4万人，不明者4.4万人，全潰12.8万，半潰12.6万，焼44.7万，流失0.09万　　徳島の発震時は，11時59分　震度4

1923年（大正12年）9月15日　台風　不作

この台風は，室戸岬南方から北上し，15日の昼頃紀伊半島南部に上陸した。徳島では気圧737.0ミリ，西の風11.7m/s，県下の雨は，14日から15日にかけて降り，多いところで400ミリ（和食425　鬼籠野410　一宇418）だった。

この暴風雨は，丁度晩稲の出穂期に当っていたために，大きな災害となり，反収は144升に留った。（当時の標準値の81％程度）

［注］県統計書による本年土木災害　死者3人，提決5,144間，道3,252，橋141ヶ，田2,739町，畑1,031，建物1,115，船2，額1,726.8千円

1924年（大正13年）夏　干ばつ

6月梅雨期に入っても雨天少く，7月も中頃だけ降雨したが少量であり，その後8月15日から25日にかけて，始めて雨天を見る程度だった。一部の農作物は干害に見舞われたが，日照りに不作なしのたとえの通り，水稲収量には余りひびいていない。

	6月11日より	7月中	8月18日まで
徳島の雨日数(1ミリ以上)	4	4	1

［注］1. 尚この年は，東北地方以南で干害を受けた。香川県5分の減収

2. 県統計書による本年土木災害702.9千円

［井内谷村史］7.15～17雨乞［山城谷村史］干

8月1日06時

1925年（大正14年）8月3日　降ひよう

［井内谷村史］被害あり

1925年（大正14年）9月17日　台風

この台風は，17日の夜九州中部に上陸し，瀬戸内海を北東進したもので，徳島では，気圧749.4ミリ，西北西の風7m/s，県内雨量も100～200ミリに過ぎなかったが，吉野川上流域で600ミリの豪雨となったため，本県で増水し，橋の流失・低地浸水・山崩れ（鉄道事故）等多少の被害を出した。

［注］県統計書による本年土木災害　467.4千円

1926年（大正15年）8月　干ばつ

7月始めの大雨のあと雨天少く，特に8月に入り干天が続いた。その後15日から25日まで連続的な微雨を見たが，量は少く月合計は30～70ミリで，徳島の如きは14ミリ，少い方からの第3位の記録となった。又8月平均気温28.3は，高い方の第3位，9月の25.0は第2位を占める等大きな干ばつになった。

［注］1. この干ばつは，九州，中部等に及んだが，一方北海道は冷害になった。

2. 今年米収は標準値より多少低い169升

3. 県統計書による本年土木災害212.8千円

1927 年（昭和 2 年）6 ～ 7 月　干ばつ

梅雨期の 6 月から 7 月にかけ降雨量甚だ少く，僅かに 7 月初めの連続俄雨で農作業を終ることが出来た状態であり炎暑に経過した。

徳島 6 月の月雨量 57.4 ミリは少い方から第 3 位　7 月最高気温の月平均 32.1 度は高い方から第 2 位。

［注］1. 本年米収は，標準値を上廻る 203 升であった。
2. ［井内谷村史］7.24 ～ 26 雨乞　［山城谷村史］6 ～ 8 月干
3. 県統計書本年土木災害 172.8 千円

1928 年（昭和 3 年）2 月 22 日　火災

［八幡村史］眉山 200 町歩焼失

［徳島市史］23 日八万町及び大麻山で山火事。

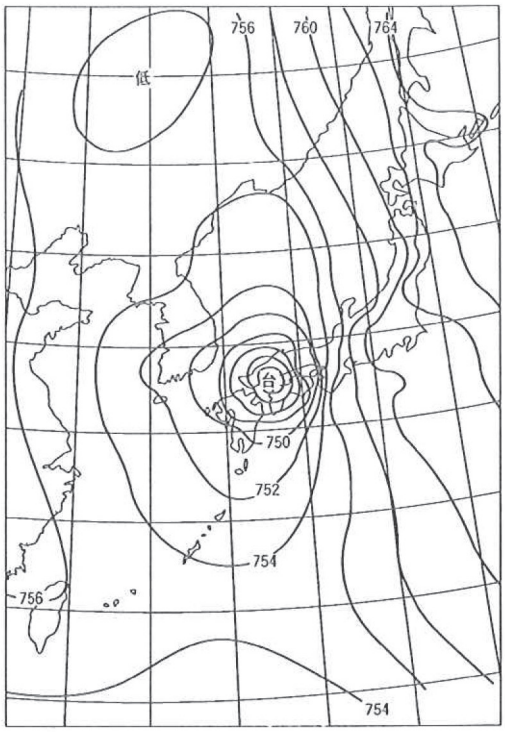
1928 年（昭和 3 年）3 月 19 日　火災

［徳島市史］徳島市庁舎，水道課を除き焼失。

1928 年（昭和 3 年）8 月 30 日　台風

8 月は二つの台風が西日本に上陸した。前者は 18 日足摺岬から上陸し，県南の多雨域で 350 ミリ。後者は 30 日朝に豊後水道を北上し，中国を抜けたもので県内大部分で 200 ～ 300 ミリを観測した。吉野川，那賀川とも上流域多量で，近年稀な出水となり家屋橋堤防及び農作物等に害が出た。徳島の最低気圧 749.6 ミリ，最大風速は南南東の風 12.6m/s。

［注］1. 県統計書本年土木災害　死者 1 人，傷者 2 人，提決 7,818m，防波堤 1,068，道 1,967，橋流 31，田 2,470 ヘクタール，畑 1,654，住 2,837，船 26，価格 1,063.9 千円
2. ［高川原村史］吉野川改修のため本村被害なし［山城谷村史］伊予川沿岸水田冠水



8 月 30 日 06 時

1929 年（昭和 4 年）1 ～ 2 月　低温　少雨

1 月の月雨量は，10 ミリ程度（県内で最少 2 ミリから最大 30 ミリ），又 2 月も 28 日の大量降雨を除けば，20 ミリ前後で 2 ヶ月少雨が続いたため，水不足になったところも出た。これは寒気の強いことに関係し，両月とも平年より 1 度低温だった。

1929 年（昭和 4 年）7 ～ 8 月　干天

7 月 10 日の梅雨明けより 8 月中旬の台風襲来まで中間に一週間位の雨天はあったが，雨量少く全般に水不足となり，尚炎暑強く平年に比べ 1 度位の高温となった。

［注］この年東北地方を除き全国的な干害となる　［山城谷村史］干

1929 年（昭和 4 年）8 月 15 日　台風

この台風は，四国南方から北上，15 日東岸沿いに神戸付近へ抜けでたもので，徳島の最低気圧 738.9 ミリ，最大風速東南東の風 14.8m/s

県内の雨量は 100 ～ 250 ミリ程度で，多少の被害を出した。

昭和 4 年 8 月 18 日　台風 18 号接近で大荒れの徳島市南沖洲
（徳島新聞社提供）

［注］県統計書　本年土木災害１回
堤決 10,550m，海岸提 2,492，道 574，橋流 9，田 186 ヘクタール，畑 33，住 2，計 170.6 千円

1929 年（昭和 4 年）9 ～ 10 月上旬　秋りん

8 月の台風後好晴が続いたが，9 月 4 日より始まった悪天候は，10 月の上旬まで続き，総雨量は過多とは云えないが，日照時を大いに減じ（9 月は平年の 80%），水稲収穫に多少影響した。

1930 年（昭和 5 年）9 月　少雨

8 月沿岸部で少雨の傾向があったが，9 月は全県的に少く，10 月の中旬にまで及んだ。県内の 9 月雨量は 50 ～ 100 ミリ程度。

徳島は 77.2 ミリで少い方から第 3 位の記録。8 月と 9 月併せて 150 ミリとなり，平年の 30%に過ぎなかった。

［注］県統計書　本年土木災害１回
堤決 1,368m，海岸提 909，道決 415，橋流 4，田 27 ヘクタール，価格 133.9 千円

1931～1940年

［昭和 6 ～ 15 年］

1931 年（昭和 6 年）2 月 10 日　大雪

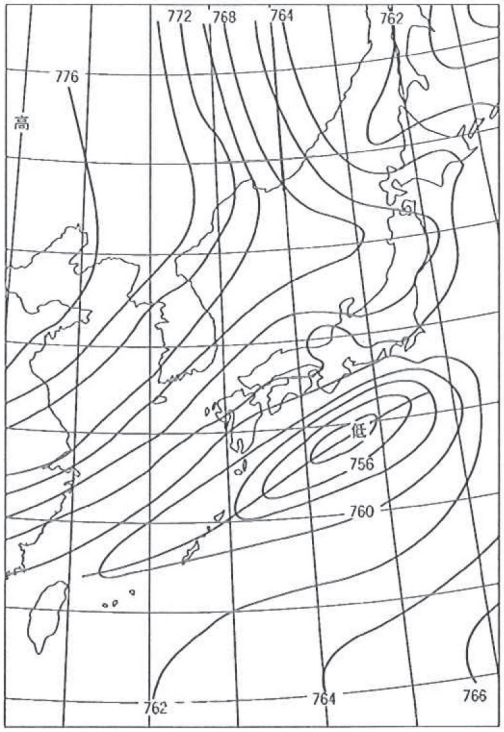
大陸高気圧の張り出しによって寒気厳しかったあと，10 日に発生した台湾低気圧が四国沖を通ったため県下一帯，特に剣山北斜面は大雪となり，30cmの積雪を見た。徳島でも 27cm積り，第 5 位の記録となった。

1931 年（昭和 6 年）5 月 15 日　低気圧（風雨）

山陰沖を通った強い低気圧のため，全国的な暴風雨を起したが，徳島では最低気圧 754.3 ミリ，最大風速南南東の風 18.6m/s を計った。県内では 7 日から連続降雨中のところへ 50 ～ 150 ミリ（多いところで朴野・神野が 250 ミリ以上）の短時間豪雨があって，河川増水し橋の流出，農作物の被害を出した。

1931 年（昭和 6 年）6 月 12 日　低気圧（大雨）

本州を挟んで南北二中心の所謂二つ玉低気圧の通過による大雨で，特に那賀川上流に多く 100 ～ 200 ミリ（多い朴野では 400 ミリ）で，橋の流出損傷や浸水家屋が出た。しかし，吉野川筋では河口付近を除き殆んど降らなかった。



2 月 10 日 06 時

1931 年（昭和 6 年）7 月　梅雨　低温（不作）

6 月下旬から曇雨天が続き，特に 7 月に入って連日のように降雨した。夏晴れを見たのは 30 日以後で，この間の無雨日は 8，23 の両日に過ぎなかった。然し各日の雨量はそれ程多くは無いので，月量としては 300 ～ 400 ミリの程度。

一方気温は甚だ低下し，月平均値は最低第 1 位記録となり，又日照時数も平年の約 1/2 で最低記録だった。

7 月　平均気温　23.6℃	最高気温平均　26.8℃	最低平均　21.2℃	日照時数　118 時間
平年より　－2.1	－3.0	－1.2	－103
低い順位　1	1	6	1

このような結果，水稲の成長十分でなく，且つ甚しい害虫の発生や下記 9，10 月の台風襲来があって，収量は 167 升。標準値の 88％程度の不作となった。

［注］この年は北海道東北関東にかけて冷凶となり，北海道の減収率は 48％だった。

（4，5 月の気温低下，奥羽･北海道 1 ～ 1.5 度，其他 1 度以内，7 月奥羽 3 度以上，関東･近畿･中国 2 ～ 3，九州 1 ～ 2 度）

1931 年（昭和 6 年）9 月 26 日　台風（洪水）

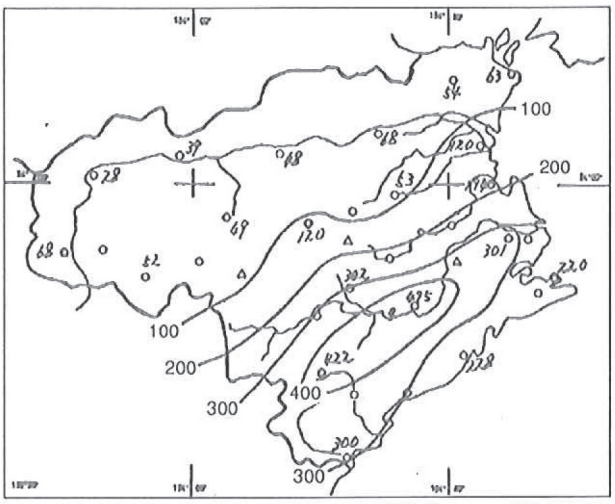
この台風は，26 日九州と山陰の西海岸を掠めて北東進した。本県では 25，6 日那賀川以南に多降し小河川の氾らんによって局地被害となった。

徳島の最低気圧 748.6 ミリ，最大風速は南東の風 12.3m/s。日雨量最大は朴野 320 神野 300 ミリ（25 日）。

被害，赤河内村では溺死者を出し，日和佐町で薬王寺前の浸水は 26 日午後 6 尺を超え，軒に達したところあり，又牟岐町も浸水被害を受けた。

死者 3 人，傷者 6 人，家浸水 2,000，流 8，倒 12，道崩 50，堤防決 15，船不明 14，県費復旧被害 50 万円

［注］［赤河内村史］日和佐川大洪水西河内月輪の堤防数十間決壊，1 戸流失，北河内では 2 戸流，2 戸半壊　　10.13 の洪水で被害を大きくする。



9.24 ～ 26 日の 3 日間合計雨量

9 月 29 日　通行止めとなった園瀬川の午後 4 時潜水橋
（徳島新聞社提供）

1931 年（昭和 6 年）10 月 13 日　台風

14 時頃室戸を掠め紀州田辺付近から上陸した中心気圧 740㎜の台風で，雨は 12 日から 13 日に降り吉野川流域の 150 ミリから南部海岸の 300 ミリ程度だった。前台風と同様に被害は県南に多く，堤防決，橋流，道崩れ等あり。又吉野川支流の飯尾・鮎喰川は短時間大雨の氾らんで田畑に被害が出た。

徳島最低気圧　744.5 ミリ，最大風速西北西の風 10.8m/s。13 日の雨量 176.6 ミリ（一日雨量の大きい順から第 3 位）

被害　傷者 6 人，床上 300，床下 900，田畑の冠水 180

［注］県統計書　本年土木災害 2 回　死者 3 人, 傷者 12 人, 提決 13,160m, 道 17,422, 橋流 87, 田 1,693 ヘクタール，畑 482，住 1,822 戸，船 4，価格 1,055.2 千円

1932 年（昭和 7 年）1 月　温暖　少雨

月平均気温は 6.4 度で平年に比べ＋ 1.4 度と甚だ高温になり，高い方からの順位では第 6 位を占めた。

尚月雨量も甚だ少く，県の西部で 30 ミリを超えた外，全般に 5 ミリ程度で，徳島の月雨量 5.5 ミリは少い方からの第 4 位記録になる。然しこの温暖少雨の傾向はこの月限りで，2 月は大体平年並みにもどっている。

1932 年（昭和 7 年）2 月 25 日　大雪

台湾低気圧の四国南方通過後，徳島で 11 時に 31.3㎝の積雪を見た。県内でもところどころ 30㎝以上積り，北西部は常に反して案外少なかった（小松島 35㎝，池田 15㎝，日和佐 18㎝）。

［注］2 月の大雪では明治 40.2.11（42㎝），明 26.2.27（33㎝）につぐ第 3 位記録である。

1932 年（昭和 7 年）4 月　低温

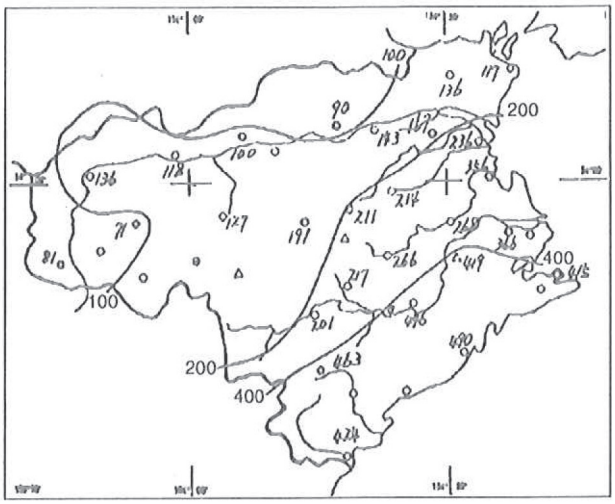
2，3 月と低温気味であったが 4 月も亦連日低く，平年以上の日は 5 日間に過ぎなかった。4 月平均は 12.0 度で平年より 2.0 度も低い。これは 4 月平均気温の低い順で第 3 位となる。尚 1 日に観測した最低気温 0.3 度も 4 月の最低気温としては第 3 位になる。

1932 年（昭和 7 年）7 月 2 日　低気圧（大雨）

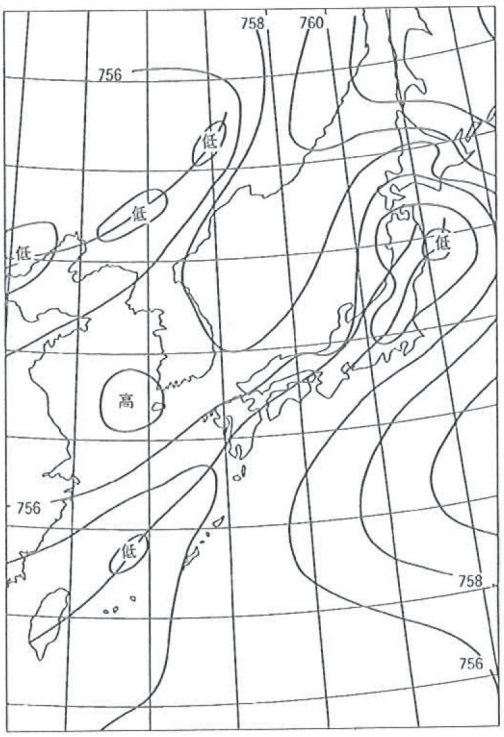
2 日未明徳島付近を通った低気圧のため県内各地大雨となり，殊に県南部に多く日和佐で 300 ミリ（1 日）を計った。徳島も 176 ミリ（2 日）だった。二日間の合計雨量は図の通りで，県南海岸が 400 ミリを超えている。風は強くなかった。

被害　県南部は浸水橋流堤防道路の決潰があり，吉野川の橋も流され徳島市内では浸水 180 戸を算えた。

［注］今月後半無雨 16 日位続く



7.1 ～ 2 日　2 日間合計雨量



7 月 2 日 18 時

1932 年（昭和 7 年）8 月 12 ～ 15 日　台風

この台風は 12 日に四国の沖合まで北上しながら 15 日まで停滞し，漸やく北東進したため連日降雨に見舞われた。特に坂州の如きは，9 日から 13 日まで各日 100 ミリ以上（110 ミリ，192，277，170，203）という珍らしい大降りになった。然し大雨範囲が割に狭まかったため大きな水害は起さなかったが，月を通じて雨天日数多く（多いところは 26 日），合計雨量も坂州，朴野で 1,000 ミリを超えた。

1932 年（昭和 7 年）9 月前半　秋りん

2 日から 16 日まで殆んど連日降雨し，毎日の雨量は非常に多いという程では無かったが，9 日未明，瀬戸内海を北東に通過した低気圧では 100 ミリ内外，15 日から 16 日にかけ四国沖を通った低気圧では 50 ～ 100 ミリ降った。

これらのため県内では 200 ～ 350 ミリの合計雨量となり，海部郡で被害を出した。又東祖谷山村では，13 日来数回の山崩れがあり，県道 10m 余り崩壊して数日間交通途絶した。尚この期間に雷雨の発生も多く，4 日には板野郡で落雷した。

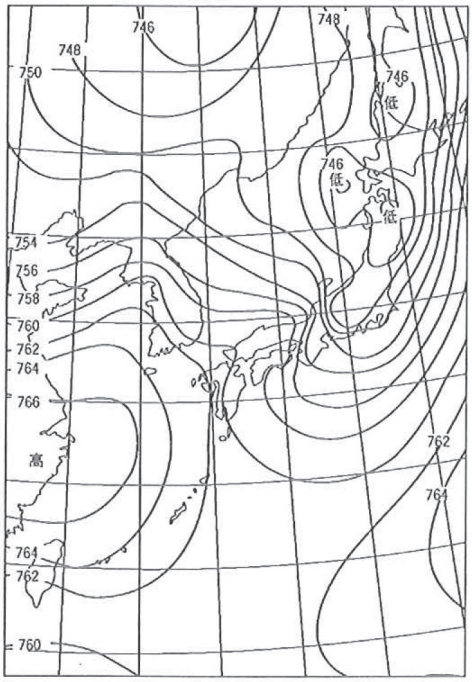
［注］県統計書　本年土木災害 576.6 千円

1933 年（昭和 8 年）5 月 3 日　低気圧（風雨）

2 日正午頃黄海にあった低気圧が 3 日日本海へ進行したが，徳島では 2 日朝から雨，夜になって暴風雨となり最強は西北西の風 17.2m/s だった。

総雨量は県南の山地で 200 ミリ程度（朴野 250 ミリ），県北は少い（徳島 30 ミリ）。

このため航路欠航，工事中の鉄橋の一部破損により，一名溺死（名東郡新居村）等があった。



5 月 3 日 06 時

1933 年（昭和 8 年）6 月 14 日　ひよう

この日は雷日和で関東以西で多数の雷雨があり，本県では午後発雷し徳島を夜 20 ～ 21 時に通った。

この雷は吉野川下流域所々に降ひょうし，最も烈しいのは市場，伊沢村南部で巾 1km東西 16kmの一帯に 10 分間前後，中には鶏卵大のもあり，温室，農作物に被害が大きかった。

1933 年（昭和 8 年）6 月 28 日　雷雨

香川県南西で発生した雷が東進して，11 時半頃板野郡の二ヶ所に落雷し死者 1 名を出した。

尚今月は梅雨期に拘らず雨天少く，殊に月末は高温となり月平均気温 22.7 度は平年より + 1.0 で，高い方から第 5 位の記録となる。

1933 年（昭和 8 年）8 月 3 日　台風

この台風は東支那海から朝鮮南部を廻って 4 日日本海へ出たもので，県南山地に多量の雨を降らせた。早いところでは 7 月 31 日から降り出し，総雨量は 500 ミリに近かった（3 日雨量　横瀬は 318，朴野 243 ミリ）。然し吉野川流域では大体 100 ミリ内だった。この台風による水害は堤防道路の小破損に止った。徳島の最低気圧は 755.4 ミリ，最大風速は南南東の風 8.3m/s。

1933 年（昭和 8 年）8 月　雷雨

月内に 10 日の雷雨があり，落雷したのは 4，23，24，27，28 日等で，23 日延野村，27 日坂野村で各一名雷死者を出した。

1933 年（昭和 8 年）9 月　少雨　多照　豊作

20 日対馬海峡で衰弱した台風の副低気圧が室戸から東進したため，県南海岸で 200 ミリの日雨量を見たところ（宍喰，神野）も出た。しかし，一般には大したことなく，特に北部で少雨多照に経過した（月内降雨 1 ミリ以上の日数 4 ～ 9 日に過ぎない）。徳島の月雨量 51.9 ミリは 9 月として少い方から第 1 位の記録であり，不照日は 1 日のみ（19 日）。日照時数 238 時間は昭和 14 年に次ぐ第 2 位の記録。平年より 70 時間の超過となった。

このため本県では稀な豊作となり，反収 227 升をあげ戦前に於ける最高記録をたてた（当時の標準値の 119％程度）。

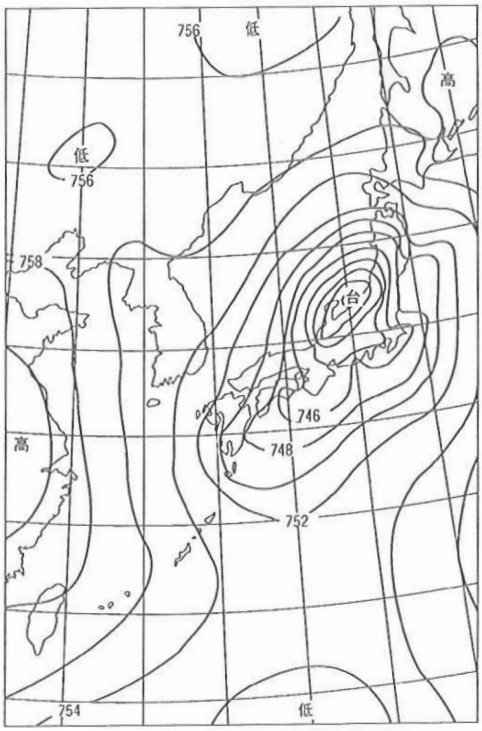
［注］主に西日本で 6 ～ 9 月干害を受けたが，全国的な豊年となった。

1933 年（昭和 8 年）10 月 20 日　屋島丸台風

石垣島付近で中心気圧 710 ミリに発達していた優勢な台風で，宮崎を通り姫路付近へ抜けた折（13 時頃）須磨沖で屋島丸（大阪商船 946 トン）が沈没し，乗員船客の約半数（不明とも 66）の遭難者を出した。通路各地の被害も甚大であった。本県の雨量は 100 ミリ前後で水害は無かったが，多少の風害を出した。徳島の最低気圧は 739.1 ミリ，最大風速は南の風 17.3m/s。

被害　海上　漁船 10，発動機船 6，小船数雙，不明者 9 人
　　陸上　製紙工場 1，小学校（建設中）1，競馬場スタンド 1 倒壊

［注］県統計書　本年土木災害　150.6 千円



10 月 20 日 18 時

1934 年（昭和 9 年）1 月 9 日　地震

剣山北麓（貞光川源）の地震。8 時 07 分発震。本県では稀に見る強さ（震度 3）で，強震範囲は本県大部分と香川，岡山に及び，有感範囲は近畿中国の大部分と大分であった。被害なし。

1934 年（昭和 9 年）1 ～ 2 月　低温少雨

1 月に入って寒気厳しく，連日平年値を下り，特に下旬に甚しく月の平均気温 2.8 は低い方から第 3 位になる（平年差 1 月 − 2.2　2 月 − 0.5）。尚少雨の傾向は 8 年 12 月から本年 3 月に及び，12 ～ 2 月の合計雨量は　平年の 48％。特に 2 月の 19.4 ミリは少い方から第 4 位記録である。

［注］尚この低温傾向は 3，4，10，11 月と続き，年平均気温 14.8 は大 6 と同じく低い方から第 2 位である。

1934 年（昭和 9 年）3 月 21 日　低気圧（風）

20 日夜から 21 日にかけて日本海で発達した低気圧は徳島でも 12 時間に 14.1 ミリの気圧下降を示した程で 22 日朝カラフト南東方海上に達した時は中心気圧 704 ミリとなり暴風猛烈を極めた。徳島では最低気圧 745.0 ミリ，最大風速は西の風 18.2m/s。

近海は大浪のため交通混乱し牟岐では漁船 2 大破，又美馬郡で小学校の倒壊があった。

［注］函館大火で死者 2,094 焼失 22,633 戸

1934 年（昭和 9 年）5 月 13 日　濃霧　降ひよう

12 日夜から近来稀な濃霧で海上交通が混乱し，貨物船喜代丸が由良沖で座礁した。この濃霧がはれた 13 日に雷雨頻発し，香川徳島岡山で大豆～豌豆大の降雹があった。徳島の雷は午前 10 時頃から発生したが，降ひようは 13 時頃から 16 時の間に諸所（徳島，加茂名町，小松島，立江，藍園，森山，佐那河内，木頭）に起り，桑，ミカン，麦等の農作物に小被害が出た。

1934 年（昭和 9 年）6 月下～7 月上　8 月　干ばつ

6 月 25 日から雨なく，特に 7 月に入り連日好天 11 日まで続いた。時期が丁度田植期であったため県の北東部で植付不能を生じ，北西部では煙草などの農作物に被害を出した。尚 8 月に入っても散発的な雨より無く，特に県北西部の雨量は 30 日までに 30 ミリ程度（31 日に 20 ～ 40 ミリ降る）で，第十の水量は平年の半にも達しない状態で相当に農作物に影響し，飲料水にもこと欠く有様といわれた。

［注］1. この時関東以西の太平洋岸で干害となったが，一方奥羽北海道では冷害となり米収は平年の 17％減で大正 2 年以来の凶作だった。

2. 7.9 ～ 11 雨乞（井内谷村史）7.28 ～ 8.29 干（山城谷村史）

1934 年（昭和 9 年）7 月 8 日　火災

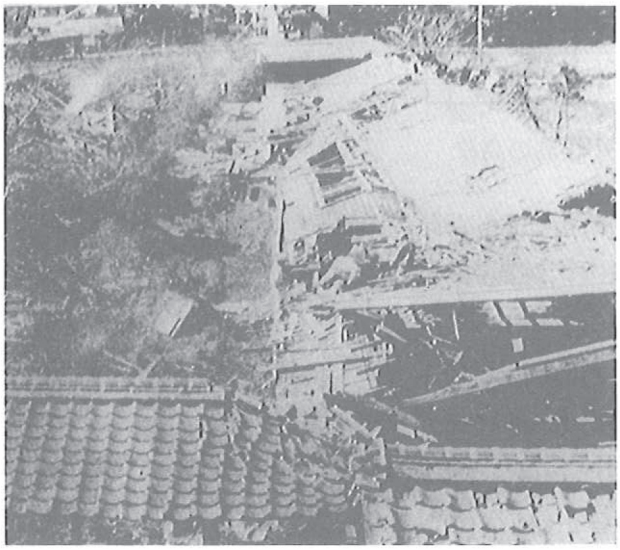
池田大火　100 戸余焼失　（損害 50 万円）

1934 年（昭和 9 年）9 月 9 日　台風

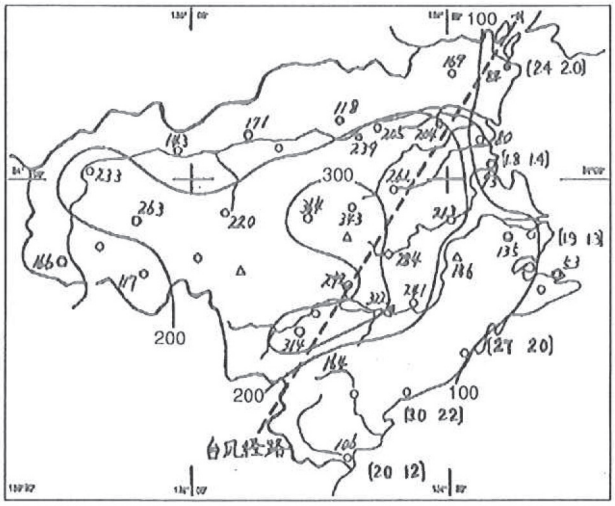
この台風は有明海から山口県に抜けた。徳島の最低気圧は 746.1 ミリ，最大風速は南南東の風 18.6m/s。

雨は那賀川町上流山地に多く 250 ミリを超えた。また 5 日の 150 ミリ程度も加わって河川増水し，道路，護岸の決潰，三好の山崩れの外農作物にも被害が出た。

1934 年（昭和 9 年）9 月 21 日　室戸台風（高潮）



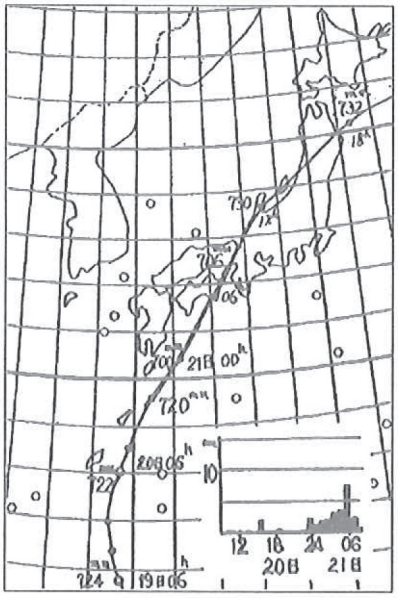
室戸台風で倒壊した由岐小学校（徳島新聞社提供）



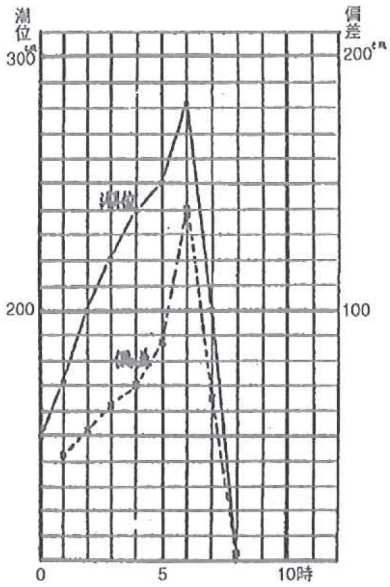
9.17 ～ 20 日　4 日間合計雨量と高汐

台風の経路と示度は図の通りで21日05時10分室戸岬を通った時最低気圧は684.0ミリを計り空前の最低記録を立てた。各地の最低気圧は徳島706.8，洲本706.3，大阪715.8，京都718.4ミリ。

この台風の被害は北海道を除く全国に及び，特に大阪では高潮被害を加えて大きく，日本の経済を大きくゆさぶった。



室戸台風と徳島の雨量



21日　小松島の高汐

全国合計　死者2,702人，傷者14,994人，不明者334人，全潰38,771，浸水401,157

県内状況　左図のように，徳島のすぐ西方内陸を副台を伴って北進し，各地で台風眼を観測し，又発光現象も気付かれている。尚一つの特徴は，中心前の暖気が異常であった。徳島で15m/s以上の暴風は（左図の太線経路のように）20日21時から21日9時までの13時間。6時に最大風速南東の風36.7m/sを計り，6時10分から5分間位風衰えて後風向順転したため眼半径は極めて小さいように見える

雨　量　20～21日にかけて，雲早山の北麓で300ミリ，南麓で260ミリ。其他は一般に少く，17日以降の合計量は図の通りである。

高　潮　小松島の高潮は（太経路は徳島で15m以上）図の通りで，6時少し前に最高に達し最大偏差（実際潮位から天文潮位を引いたもの）1.4mを観測した。尚牟岐港修築事務所の報告によると，当日の平日の最高潮位の差は2.1mであった由。其他県内の潮高は上図に［　］で記載の通りに，風当りの強い県南海岸と中心の通った鳴門が最大偏差2mとなっている。

［　］の内左は平均水面からの潮位　右は偏差　単位m

被　害　台風通路の東部に大きく，海部那賀両郡では4.3の全潰家を出し，名東2.6板野1.8%其他は1%以下であった。河川水害は大して無かったが，高潮害で23,000軒の浸水（全戸数への割合徳島74%板野郡24第3位の海部郡は4.5）。撫養塩田は荒廃し，又海岸の稲作は700町歩が収かく皆無となった。死者37人，傷者345人，不明者2人，住家全922，半1268，流66，床上浸水6,168，床下12,517，船2,303，橋24，道353，堤防69，田畑30,450町，流材28,420石，見積額1,736.5千円，船882千円

［注］1. 県の統計書による本年土木災害　死者34人，傷者416人，堤防決45,902m，防波堤162，海岸提15,814，道69,414，橋流89，田3,922町，畑1,010，住家14,595，非10,043，船1,136，価格15,215.8千円

2. 東北地方では冷害となり水稲反収青森8.7斗（5年平均の60%）岩手18.5（52）宮城11.9（66）山形12.0（59）

	人			家				
	死	傷	不明	全壊	半	流	床上浸	床下
徳島市	1	1		133	81	8	4650	9800
名東郡	4	63	1	222	103	1	319	674
名　西	1	4		72	45		55	96
板　野	4	30		356	351	25	1644	3256
阿　波	4	4		87	78		63	199
麻　植	2	2		54	19	1	23	81
美　馬	3	6		57	41	8	148	154
三　好	1	3	1	34	40	4	30	106
勝　浦	4	5		29	262	5	97	875
那　賀	9	104		699	768	14	38	448
海　部	4	77		376	231	68	134	268

1934 年（昭和 9 年）　不作

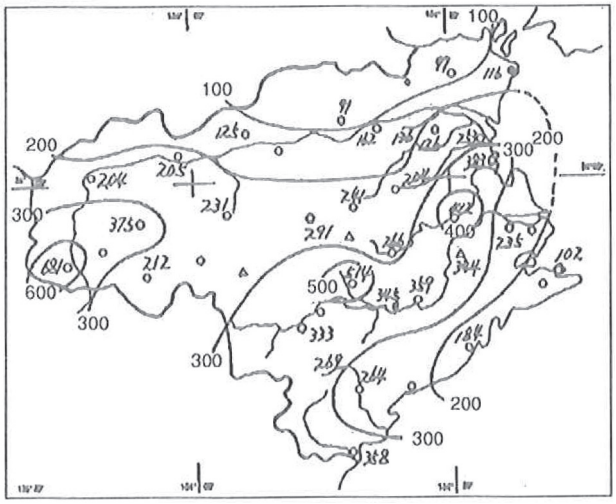
上記のように，年内に両度の台風に加え干ばつ被害もあって，本年米作は 156 升（当時の標準値の 82％程度）と大正 12 年以降の不作になった。米作期間の平均比較は次の通り。

	7 月	8	9	10
気　温（℃）	26.3（+0.8）	26.6（+0.1）	22.8（－0.2）	16.1（－1.3）
雨　量（mm）	157（79%）	30（16）	375（128）	204（106）
日　照（時間）	226（102%）	277（114）	143（85）	163（98）

1935 年（昭和 10 年）3 月 24 日　低気圧（風雨）

発達した低気圧が四国沖を通って暴風雨になった。県南多雨地で 100 ミリを超えるところも出たが，一般に少く殊に吉野川沿いで少なかった。然し風は稍強く徳島で南東の風 15.3m/s を計り，海上交通を混乱する外，徳島護岸の決潰，県南で倒壊非住家 4 棟等の被害を出した。

1935 年（昭和 10 年）6 月 27 ～ 30 日　前線（大雨）



6.27 ～ 30 日　4 日間合計雨量

27 日に始まった大雨は 29 日まで続き，多雨域で各日 200 ミリ前後を観測して遂に洪水警報を出す程であった。（27 日上名 270，横瀬 241，小松島 219，28 日上名 270，沢谷 220，29 日出原 182）

徳島では 29 日に 124.4 ミリを観測したが，6 月日雨量の大きい方から第 5 位記録である。

この四日間の合計雨量は図の通り。

被害　田畑 3,500 町（内勝浦郡 1,400，名東麻植は軽微）の水稲，西瓜，甘藷，桑等，死者 1 人，傷者 1 人，住家半 1，非全 10，道 5，西祖谷山村 300 坪決，那賀川木材流失 300 万才，善入寺島，板野郡の低地，川内村等浸水

［注］この時は北九州中四国近畿に被害あり（死者 147 人，不明者 9 人）

1935 年（昭和 10 年）8 月 28 日　台風

この優勢な台風は 28 日朝大隅半島東方から 15 時に宇和島南方に上陸し（中心示度 715 ミリ），29 日朝　神戸方面へ抜け内陸を縦断して岩手県宮古付近から海上へ出たため，殆んど全国的な災害を出した。

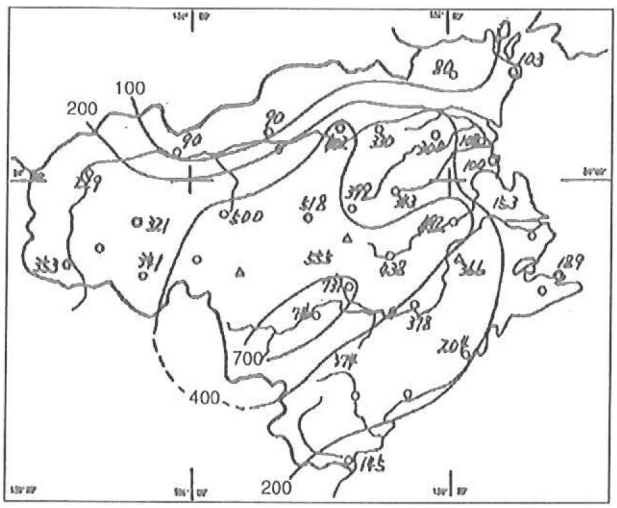
本県では 26 日からの山地の雨が始まったが，28 日に 200 ～ 400 ミリの豪雨となり水害を起した（28 日　出原 446，坂州 393，川井 298，横瀬 293，朴野 280）県内の総雨量は図の通りで，那賀川では最近での高水位（古庄 5.8m）に達した。

徳島の最低気圧 736.1 ミリ，南東の風 22.3m/s

被害　死者 2 人，傷者 1 人，

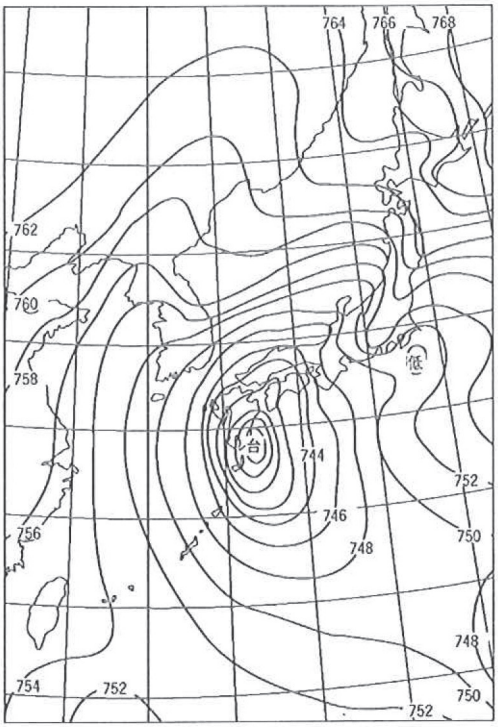
不明者 3 人，家全 16，半 29，流 5，浸水 6,081，橋流 10，破 18，堤防決 25，道 39，田畑流失浸水 9,528 町

農作物水稲皆無 131 町，5 割以上減収 958 町（最大被害の那賀郡は全体の 24％）



8.26 ～ 28 日　3 日間合計雨量

1935 年（昭和 10 年）9 月 25 日　台風



9 月 24 日 18 時

この台風は豊後水道から 25 日の 3 時頃松山をへて鳥取方面へ抜けたが，関東地方に大雨して死者　計 317，不明 60 を出した。本県で雨が始まったのは 19 日であり，其の後連日相当の雨が降った。特に四国を通過中には坂州，出原で日量 230 ミリに達した。19 日から全雨量は，沢谷 552 ミリ富岡 176 ミリ池田 294 ミリ徳島 201 ミリ。このため河川増水して浸水多数を出し道や農作物に被害が多かった。徳島の最低気圧 740.4 ミリ，最大風速は南の風 17.8m/s。

［注］1. 此の月は雨天多く，25 日までに全般的な雨は 16 日を数えることが出来る。このような悪天候のため本年の水稲反収は，174 升で稍不作だった（標準値の 91％程度）

2. この年北日本で冷害となった，水稲反収北海道 78 升（5 年平均の 58％）青森 78（49％）。

1936 年（昭和 11 年）低温（特に 1 ～ 4 月）

稀らしく長期に亘り寒候が続いた。雪日数は平年より 10 日も多く，山間地方は積雪で麦作は 2 割の減収といわれ（東祖谷山村のは 5 割 8 分），交通途絶したところもある。又南部の那賀勝浦両郡では，みかん類の被害は 8 割 3 分を占め（186 万円）其他の農作物にも大きな被害を出した。

徳島の気温を見ると 1 月 17 日の最高気温が 0 度以下になるという稀な現象があった。

	1 月	2	3	4
月 平 均（℃）	2.5	3.4	5.6	12.4
平年より	－2.5	－1.7	－2.4	－1.6
低い順位	1	4	1	6
最低極気温（℃）	－5.0	－2.2	－3.4	1.5
低い順位	3	－	2	－

［注］1. 麦類の反収は大麦 112，裸麦 168，小麦 162 で，大麦の外は被害軽微である。

2. 本年は上記の寒候に引続き 5 月も平年以下 0.9 度, 7 月－0.6, 8 月－1.0, 10 月－0.8, 11 月－0.3 等全年的に低温で年平均気温は 14.5，平年より 1 度も低く低温第 1 位となった。

1936 年（昭和 11 年）6 月　少雨

中旬は好晴連続し漸やく下旬に入って梅雨空になったが，各日共雨量少なく県内総雨量は 50 ～ 70 ミリ徳島の月雨量 48.7 ミリは少い方の第 1 位となった。

［注］今年は 7 月後半から 8，9 にかけて甚だ好晴に恵まれたので，水稲は豊作（反収 218）となり（徳島 8 月雨量 67.7 ミリ，9 月 147.7 ミリ）特に 9 月前半の残暑は印象が深かった。

1936 年（昭和 11 年）10 月 2 ～ 3 日　台風

日本の南方海上を通った台風で，徳島以東の太平洋岸は北海道まで被害があった。本県では 9.29 から降雨が始まり，10.2 の夜最も強く県南の海岸を除いて 150 ～ 200 ミリを計った。

徳島の最低気圧 742.1 ミリ　最大風速は北西の風 12.8m/s。

被害　堤防 133 件（55.6 万円），橋流 34（2.5 万円），田畑 1,758 町（7 万円），家被害 829 戸（0.28 万円）

1937 年（昭和 12 年）1 ～ 2 月　暖冬

昭和 11 年 12 月からの暖候は此年の 3 月にまで続き，特に最低気温の高いことが注目される。

	12	1	2	3	高温順位
平均気温(平年より)(℃)	8.8(+1.3)	5.9(+0.9)	6.7(+1.6)	8.6(+0.6)	(12月6,1月10,2月8位)
平均最低気温(平年より)(℃)	5.1(+1.5)	3.2(+2.0)	3.5(+2.1)	4.4(+0.7)	(12月6,1月2, 2月3位)

尚，2月は平年の倍量程度の多雨であった。

［注］然しその後の天候恢復によって麦作には余りひびいてはいない。

1937年（昭和12年）8月　干天

県内山地では100～200ミリの降雨に恵まれたが，海岸及び吉野川流域で甚だ少く殆んど50ミリ以下。

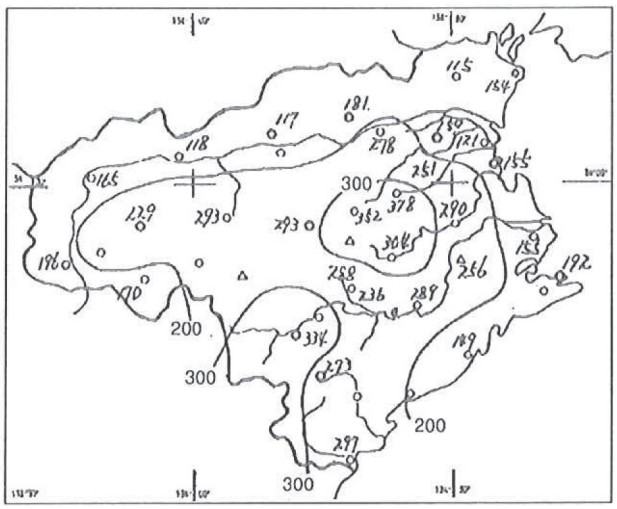
徳島の24.0ミリは少い方から第5位記録であり，日照時数の多いこと(301.9時間)も第5位になる。

尚，8月の前半は割に涼冷であったが，後半から9月上旬にかけ近年稀な暑夏となった。

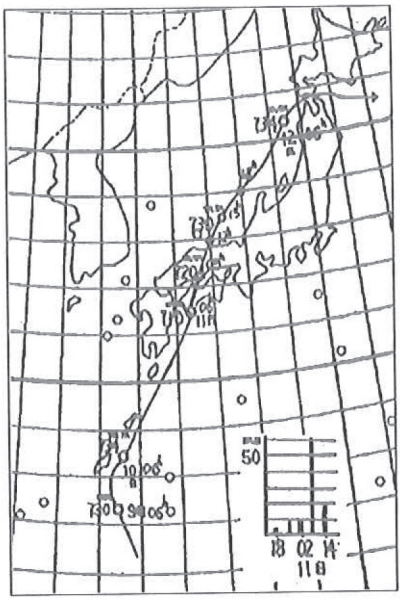
［注］1. この年の干害は関東に大きく，東北北海道の一部京都等にも発生した。

2. ［大俣村誌］殆んど米収なし

1937年（昭和12年）9月11日　台風



9.8～10日　3日間合計雨量



台風経路と徳島の雨量

このAクラス台風の経路は図の通りで，被害範囲は九州関西，北陸に及んだ（死者73人，不明11人）。

本県で雨が始まったのは8日だが，大部分の雨は11日の未明に降った。

この大雨で県下河川の増水甚しく，吉野川の最高水位は池田で7.27m，第十で6.5那賀川の羽浦町では4.5mだった。

風は一時的に甚だ強く，徳島で最大風速南南東の風32.2m/s（11日08時）を計ったが長続きせず，15m/s以上は6時間に過ぎなかった（経路図中の太線）。徳島気圧732.8ミリ。

被害　丁度二百二十日の襲来であったため水稲に影響し，反収169升（当時の標準値の89%）。再に桑，果樹農作物の被害額は277万円である。

人死者5人，傷者25人，家全370，半207，流4，床上107，床下697，橋16，堤防186，道429ヶ所，船56，損害額623.9万円

1938年（昭和13年）1月2日　地震

0時12分田辺沖に起った浅い地震であったが，有感範囲は中部以西の日本の半ばに及び，最大震度は5（本県の大部分を含む）。壁に割目が入る等の家屋の小破損が出ている。尚この地震の余震は2時33分と24日22時02分に感じた。

1938 年（昭和 13 年）4 月 1 日　三野地震

22 時 40 分三野付近を中心として四国の外, 中国の大部分, 和歌山に有感の地震で震度は 4（芝生, 川井, 下分上山, 池田, 和食), 2 徳島, 高知, 岡山。

1938 年（昭和 13 年）5 ～ 6 月　陰雲（麦凶作）

本年 3 月の月雨量は平年並だったが, 曇天多く 18 日を算えた。尚温暖（月平均気温 9.8 度は高い方から第 6 位）であった。4 月は晴天多く（月合計の日照時数 242.7 時間は多い方から第 5 位）順調に経過したが, 5 月に入って又陰曇少照となり 6 月も少雨に拘らず陰曇だった。尚雨天は 7 月の初旬に引続いたので麦作に相当悪影響した。

曇天日数　5 月　20　6 月　19　　日照時数　180（平年の 85%）　175（100%）

［注］麦反収　大麦 125, 裸麦 136, 小麦 129 升（裸麦, 小麦は近年に於ける最低）

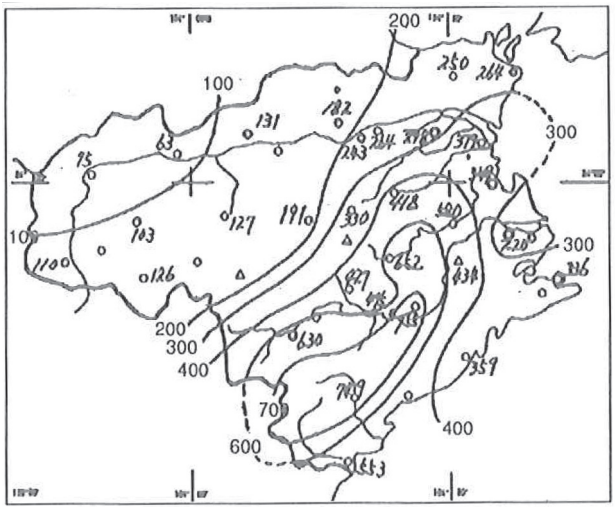
1938 年（昭和 13 年）7 月 3 ～ 5 日　前線（大雨）〔神戸六甲山崩壊〕

これは梅雨末期の豪雨として, 奥羽から近畿まで太平洋岸殊に神戸の六甲山崩壊によって空前の大災害を起した（死者 708 不明者 217)。本県では 6 月の連続雨天のあと 3 日から 5 日に大降りし, 山地では 2 日間に 250 ～ 300 ミリに達した（出原 460 朴野 408 ミリ)。一方風もかなり強く（徳島で 4 日最大風速南南東の風 16.1m/s)。各所で風水害を出した。

1938 年（昭和 13 年）7 月 28 日～ 8 月 2 日　低気圧（大雨）

揚子江南方流域から四国の上を通った低気圧による大雨で, 通路の四国, 近畿東海にかけて災害が出た。県内の雨は 28 日に始まり, 那賀川上流では　連日 100 ミリ以上降り, 8 月 1 日が最も多く朴野横瀬で 290 ミリを計り 4 日まで続いた。

県南各所で水害を起した。



7.28 ～ 8.2 日　この間の 5 日雨量

1938 年（昭和 13 年）7 月～ 8 月　多雨

7 月始めに上記のような梅雨末期の大雨があり, 14 日で一応梅雨明けとなった。然し月末再び大雨が始まり, 8 月に入って月初め又大雨し, 再に 7, 8, 15 ～ 22, 26 ～ 29 日と熱帯低気圧性の大雨が続いた。8 月中無雨日は 9 日程度に過ぎず, 又一方日雨量 100 ミリ以上を計った日は 7 月 3, 4, 28 ～ 31 の 6 日, 8 月は 1, 17, 18, 19, 26, 27, 28 日の 7 日を数える。

月雨量が 1,000 ミリを超えたところは, 7 月出原（1,027 ミリ）8 月桜谷（1,389）神野（1,320）朴野（1,287）等である。

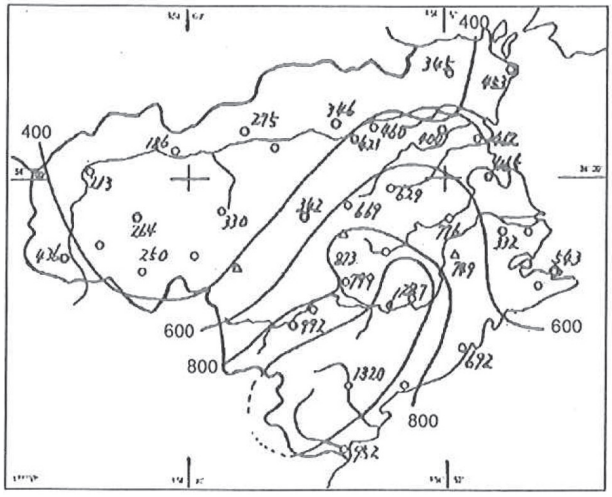
8 月の雨量分布は図の通りで, これは 7 月末から 8 月始めの大雨の分布と非常に似ている。

徳島の記録は

7 月雨量　328.3 ミリ（多い順から 9 位）

8 月 〃　584.9（2 位）

［注］徳島 8 月の第 1 位多雨は明治 24 年の 652.4 ミリ。尚本年 7, 8 月の悪天に引続き, 下記の 9 月始めの台風来があって水稲にも多少悪影響した。



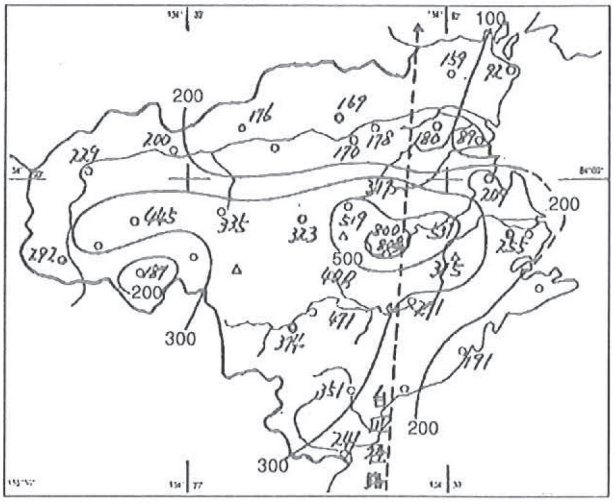
昭和 13 年 8 月雨量

1938 年（昭和 13 年）9 月 5 日　台風

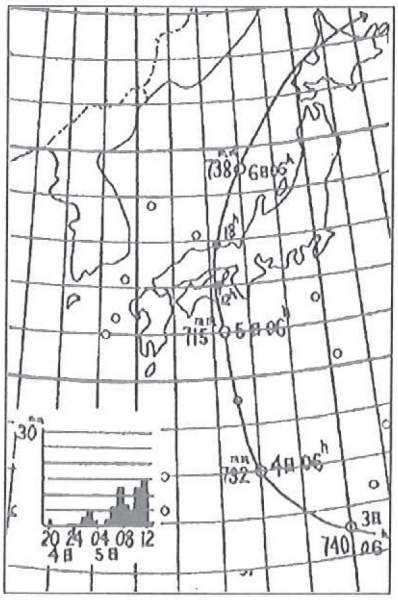
この台風は中心気圧 715 ミリで 11 時 7 分頃牟岐から上陸，徳島の真西を通って 13 時に北灘に抜けた。四国近畿の被害大きく死者合計 81 名を出した。

徳島の最低気圧 723.6 ミリ，最大風速東北東の風 29.3m/s　15m/s 以上は 10－14 時。

降雨状況　比較的短時間の降雨で終ったが，最多の福原では 4，5 の両日間に 780 ミリを計った。



9.3 ～ 5　3 日合計雨量



台風経路と徳島の雨量

其他の日雨量は横瀬 394 ミリ，小祖谷 322 ミリ，下分上山 313 ミリ等がある。これらは殆んど 5 日昼頃の 2 時間で大降りしたもので，下記福原の記録は我国でも最大級のものであろう。

福　原	10－11時	11－12	12－13	13－14	合計
5　日	74.0	130.5	138.5	74.2	417.2 ミリ

このような降雨で勝浦川鮎喰川は未曽有の大氾濫となった。

被害　今回の雨は短時間の強雨であったことと台風が県内を北上したために阿讃山脈にも大量降雨となった。結果，鮎喰川・勝浦川・穴吹川・貞光川・宮川内谷川・佐馬路川等の小河川で山崩れと河川氾濫があり，避難のいとまなく一部落跡かたなく全滅したところもある程で，60 人の死者，不明者を出している。県費関係被害額 1,950 万円。

人死 44，傷者 30，不明者 15，（麻植・美馬・名西・那賀で大），家全 166，半 277，流 293，床上 1,145，床下 4,336，道 379 所，橋流 101，堤防 43，船 26，田畑流 200 町

［注］1. 大雨が局地に限定され平野部の被害は軽微だった。

2. 県の統計書による本年土木災害は死者 39 人，傷者 35 人，堤防決 96,118m，海岸提 6,645，道 71,863，橋流 306 ヶ，田 5736，畑 10,004 ヘクタール，住家 3,620，非 1,869，船 64，価格 17,943.3 千円

3. ［大俣村誌］大水害食糧不足で村長払下げ米に奔走　［神領村誌］1 時頃増水甚しく木材，民家の流れあとを絶えず

1939 年（昭和 14 年）夏　干ばつ（多照）

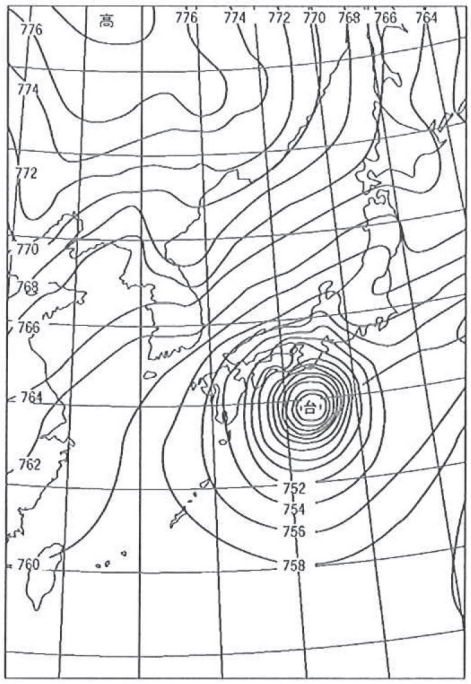
	5月	6	7	8	9		5月	6	7	8	9
雨　　量	45.3ミリ	100.3	72.6	39.9	150.5	日照時間	247	204	266	280	245
平　年　よ　り	－94.9ミリ	－93.9	－126.0	－150.3	－149.5	平年比	117%	117	120	114	145
少い方の順位	4	9	－	9	－						

西日本近年の大干ばつで，6月から8月に至る間各月共平年量より100～200ミリ少なく，特に平野部に干害を出し（山地では雷雨によって害をまぬがれた）全国収量は五年平均の10.5％減になった。

徳島県では5月から雨量少なく，10月にやっと回復している。

尚この間大体低温気味，甚だ多照（9月総日照時数は多い方の第1位）であった幸い本県は吉野川其他の水量豊富な河川があるので，他県に比べ水稲は佳作を示した（反収217升標準値の114％程度）。陸作物の甘藷では多少の低下を来している。

［注］本年の徳島年総雨量1,088ミリは少い方からの順で第2位



10月17日06時

1939年（昭和14年）10月15～17日　台風

台風は16日に九州南端を掠めて東進し，九州，四国の南部で被害が出た。徳島では15日から雨が始まり，16～17日の夜最も強く，那賀川下流域を除いて200ミリ内外を計った。従って総雨量は大部分で200～300ミリになっている。

日雨量最大は出原400ミリ，横瀬299，福原263等

被害　全潰1戸，床上23，床下303，橋流18，破2，堤防決1，損1，道10

［注］［木頭村誌］助　大久保池辷り

1940年（昭和15年）　低温少雨

少雨は昨年の12月に引続いて全年に及び，平年より多いのは僅かに6月のみで，それも15ミリ程の超過に過ぎなかった。気温も7，10～12月を除いて平年以下で，特に8月の低温は甚しかった。

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気　　温(℃)	4.0	3.9	7.0	12.3	16.9	21.0	26.1	25.0	22.8	18.1	13.0	8.1	14.9
平年より	−1.0	−1.2	−1.0	−1.7	−0.9	−0.7	+0.4	−2.2	−0.4	+0.6	+0.7	+0.6	−0.6
低い順位	10	7	10	5	5	6	−	1	−	−	−	−	3
雨　　量(mm)	3.4	56.7	85.4	79.8	21.6	209.3	60.5	178.2	82.6	112.1	76.6	21.6	987.8
平 年 の	8%	91	87	66	15	108	31	94	28	58	83	39	58
少い順位	1	−	−	−	1	−	7	−	4	−	−	−	1

［注］1．徳島の昭14年12月雨量1.3ミリは少い方から第1位である

2．［木頭村誌］雨乞い数回［井内谷村誌］5.10　山火事　3町歩

1940年（昭和15年）4月3日　低気圧（風）

2日朝揚子江南方域から現われた低気圧は，3日朝四国を通って急に発達したため本邦全体に春一番の大風となった。当地方では2日に最大風速南南東の風15m/s，3日に最大風速西の風20m/sを観測した。

1940年（昭和15年）9月11日　台風

この台風は四国南方洋上から11日早朝，九州に上陸し，中国を横断して伊豆沖に出る異常経路をとり九州に被害が大きかった。当地方では10日早朝から雨が始まり，11日までが強く，木頭では日量224ミリを計った。10～12日の三日合計量では，剣山南東斜面で300ミリ内外，吉野川上流（高知県内）で500ミリを超えた。風も強かったので農作に影響があった。

徳島の最低気圧749.3ミリ　最大風速は南の風24.2m/s

1941～1950年

［昭和 16 ～ 25 年］

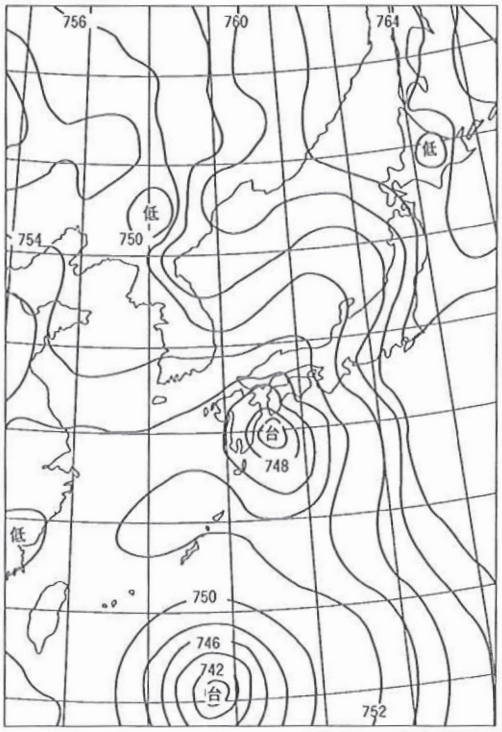
1941 年（昭和 16 年）4 月 8 日　霜害

珍しく優勢な移動性高気圧 772 ミリ（1029mb）のものが日本の上空を通ったため，気温急降し，北海道以南で凍霜害を見た。主なものは桑害，徳島の最低気温は，7 日朝 1.8℃，8 日は 1.7℃

1941 年（昭和 16 年）4 月 9 日　低気圧（風）

前記の強い高気圧とその後の低気圧との間で強い風を吹かせた（この低気圧は発達しなかったので東日本に異常なし）。徳島では，南東の風 21.8m/s に達し，この種の風としては珍しい強さである。

1941 年（昭和 16 年）6 ～ 7 月　梅雨



7 月 25 日 18 時

6 月 10 日から始まった雨期は 7 月末まで続き，顕著な梅雨になった。この間に雨が全県的に降らなかった日は，6 月 24，30，7 月 1 ～ 3，17 日の 6 日間に過ぎない。殊に 7 月は，熱帯性低気圧の影響を受けることが多くなり，25 日には 200 ミリ以上を計ったところもある（桜谷，川井）。しかし，一般に小雨が連続したので，大きな被害にはならなかった。

尚，この雨天連続のため，7 月の気温低下と日照不足が目立つがこの傾向は 9 月まで続く。

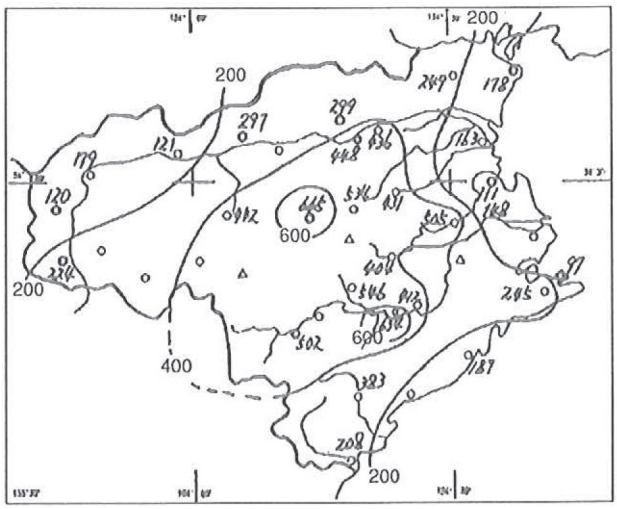
	6 月	7	8	9		6	7
平均気温	21.6	24.4	25.3	21.5	雨　量	307.2	212.1
平年より	－0.1	－1.3	－1.9	－1.7	平年の	158%	107
低い方から順位		7	3	3	多い方から	8 位	－
日照時数	137.2	159.5	215.6	126.0			
平年の	79%	72	88	75			
少い順位	9	8	－	7			

［注］1. このため，8 月 15 日現在の水稲減収率は 0.04 と云われたが，以後悪天候に患され下記別項のように甚しい凶作になった

2. 尚西日本はこの梅雨水害に見まわれ死者 100 人を出した

1941 年（昭和 16 年）8 月 15 日　台風

15 日 6 時室戸の西に上陸（室戸の気圧 724.0 ミリ）。9 時頃，多度津付近から中国へ抜けた（多度津の気圧は，724.4 ミリ，この間殆んど衰えていない）沿道で相当な暴風雨害を出した徳島では，最大風速南東の風 37.8m/s を計ったが，これは 70 年内に観測された第 1 位の強風である。暴風時間は割に短かかった。（15m 以上は左図の太い径路の区間で 5 ～ 10 時の 6 時間位）最低気圧 729.9 ミリ



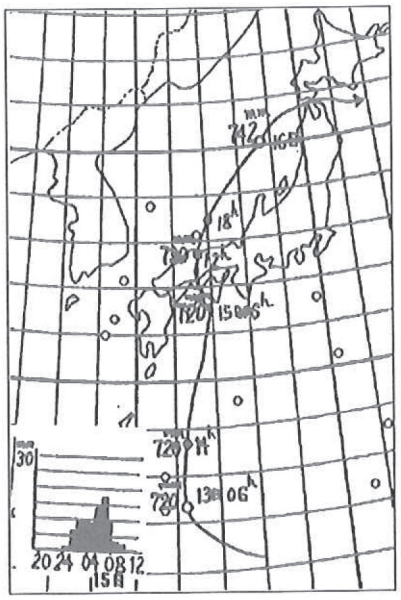
8.12 ～ 14　3 日合計雨量

降雨状況　台風前ぶれの雨は 12 日から始まり，剣山の南北斜面で 200 ミリ以上降ったが，一般には 100 ミリ以下。13 日は全体に 100 ミリ内外，14 日から台風通過の 15 日朝までに大降りして，山地で 400 ミリを超すところも出た（桜谷 423 下分上山 398 横瀬 367 坂州 341）12 ～ 14

日の合計雨量は上図の通り。

被害　豪雨は短時間であったので，支流や局地河川が氾乱した程度である。

人死者 3, 傷者 9, 家全 114, 半 50, 流 10, 床上浸 319, 床下 4,721, 橋流破損 16，堤防 25，道 52，船 25



台風経路と徳島毎時雨量

1941 年（昭和 16 年）8 ～ 9 月凶作（曇雨天）

8 月は中旬の台風に引続き，下旬の始め又台風の雨があり，其の後時々降雨し 9 月に入って上旬は雨は少なかったが，其後台風二個の活動によって度々大雨を見た。24 日，28 日～ 30, 10 月 1 日等に，県内で日雨量 100 ミリ以上を観測した。

この期間中，気圧配置は大体北高型であったため，北日本は勿論当地方まで低温に経過した（本年の梅雨の項参照）このため，本年の米収は 159 升となり，昭 9 年以来の不作だった。（当時の標準値の 84％程度）

［注］この低温は北日本で－2.0 以上に及び，近年稀な冷凶で 16.4％の減収となった。

1941 年（昭和 16 年）10 月 1 日　台風

この台風は，大分を通って米子付近から日本海へ抜けた中心気圧 720 ミリの大型で，沿道の九州・四国・中国で死者 108 を出した。本県は稍離れていたので大きな被害はなく，徳島の最低気圧 741 ミリ最大風速は南南東 33.7m/s（第 3 位の強風）。雨は 28 日から始まり各日 100 ミリ以上を計って 10 月 1 日までの四日合計量は雲早, 大竜寺山を中心に 500 ミリ以上, 少い地域でも 250 ミリ程度だった。

吉野川上流（高知県内）は割に雨量は少く，那賀川奥地も同様だったのが被害の少なかった原因であろう。

［注］［井内谷村史］大水

1942 年（昭和 17 年）3 月　高温

1 月 2 月と稍低温が続いたあと，3 月に入り急に昇温し，月平均温度は 10.8 度となった。これは 70 年間の第 1 位高記録である。

この温暖現象は全国的な規模で起っている。

［注］徳島 1 月の雨量 5.1 ミリは少い方から第 3 位

1942 年（昭和 17 年）7 月　干天

梅雨は 7 月 3 日で終り，あと俄雨のほかまとまって降雨がなく 8 月 4 日に及んだ（徳島の無降雨日数は 7 月 5 日より 8 月 4 日まで 31 日続く）。県内の雨量は 80 ミリ以下である。このように晴天が続いたため著しく昇温し, 徳島の月平均気温 27.5 度は平年より 1.8 の高目で第 3 位の高温となる。尚月雨量 46.5 ミリは少い方から第 3 位，日照時数 321 時間は多い方の第 1 位である。

［注］この干ばつは全国的な現象で所々で被害を出した。

1942 年（昭和 17 年）8 月 27 日　台風

九州西方近海から長崎県北西部を掠めて日本海へ入った 700 ミリの優勢な台風のため，26 ～ 28 日に大雨があった。尚引続き小台風が 31 日高知付近から高松へ抜けているため，31 日まで雨天が続いた。

前の台風では，剣山の東方斜面に多く降り 400 ミリを超え，海岸と北西部で 200 ミリ以下であった。日雨量最大は，28 日川井横瀬で 300 ミリ。徳島の最低気圧 747.1 ミリ，最大風速は南南東の風 28.2m/s。

被害　久しく旱天が続いたため大被害にはならなかった。

家全潰 12，半潰 23，浸水 13，橋流 2，破 3，堤防決 3，破 2，道 18，果物 1 ～ 3 割減収

［注］1．この台風は九州で暴風高潮の大被害を出し，特に山口県では満潮時と重なって 708 名の死者を出した。全国被害　死者 891 人，傷者 1,438 人，不明者 267 人

2．後の台風の　県内雨量は 100 ミリ内外である。

1942 年（昭和 17 年）9 月 21 日　台風

21 日高知県須崎付近から上陸し，多度津から兵庫に出た。中心気圧 710 ミリ位の強い台風で，沿道にかなりの被害を出した。

本県では 17 日から雨が始まり，21 日には剣山東斜面の多雨域で 400 ミリ，総雨量は中央部山岳地帯が 500 ミリ，南北が少く最少の県南海岸が 250 ミリ程度。徳島の最低気圧 741.8 ミリ，最大風速は南南東の風 16.7m/s。

被害　雨天が多かったあとの台風雨で　人不明者 1，家全潰 1，床上 64，床下 1,184，橋流 2，耕地浸水 380 町

1942 ～ 3 年（昭和 17 ～ 18 年）10 ～ 4 月　寒冬

低温傾向は 17 年の 10 月から始まり 18 年では 1，2，4 月等が甚しかった。

	17 年 10	11	12	1	2	3	4
平均気温（℃）	16.4	11.1	6.4	3.2	3.9	7.4	11.7
平年より	－1.1	－1.2	－1.1	－1.8	－1.8	－0.6	－2.3
低い方から順位	4	7	8	6	7	－	2

これは少雨多照と結びついている。特に著しいものは雨量で，11 月 29.4 ミリは少い方から 8 位，3 月 46.6 ミリは 7 位［日照は別記昭和 18 年多照の項参照］

1943 年（昭和 18 年）3 月 13 ～ 16 日　山火事

移動性高気圧の内に入って，東海以西で諸所山火事を発生した。本県も阿波郡伊沢谷で山林 60 町歩を焼いた。平均湿度は 12 日 47%，13 日 50%，16 日 55%　最少湿度は 13 日 31%　16 日 21%

1943 年（昭和 18 年）5 月 11 日　火災

県立工業試験場焼失

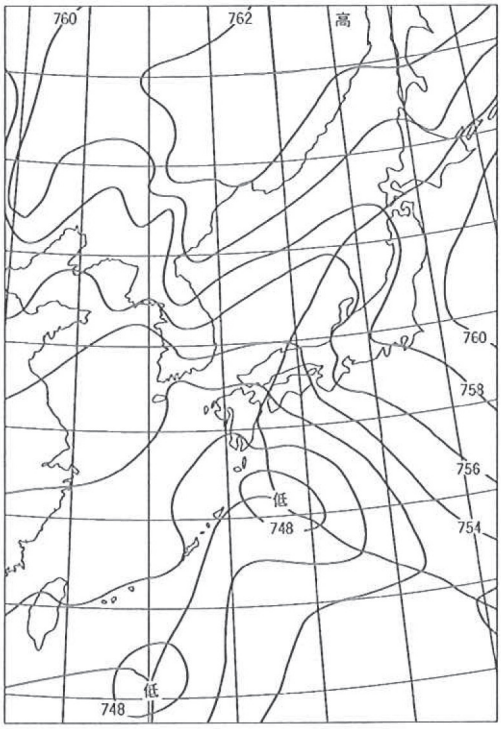
1943 年（昭和 18 年）7 月 24 日　台風

台風の衰えたものが愛媛県を北上したため，同県下で死者 114 名を出しその他の沿道も洪水による大被害があった。

死者 211　不明 29　本県では雨の割に被害は少なかった　徳島の最低気圧 750.7 ミリ，最大風速は南南東の風 16.7m/s。

本県の雨は台風が南方にある 18 日から始まり，多雨地では 20 日から 100 ミリ以上の日雨量を計った。特に 24 ～ 25 日にかけては 400 ミリ以上の所あり（24 日　坂州 355 ミリ，日和佐 350，福原 328，25 日　小松島 486，椿泊 332，福井 315）。総雨量として最多域の那賀川中流から下流にかけて 800 ミリ，最少域の吉野川流域は 300 ～ 400 ミリだった。

被害　家全潰 1，床上 46，道 6，堤防 6，橋流 4，田畑浸水 4,589 町，木材流失 1,500 石



7 月 24 日 06 時

1943 年（昭和 18 年）7 月　多雨

上記の台風前後に熱帯性低気圧 2 個による雨もあって，7 月下旬は連日降雨した。月雨量の多いところは 1,000 ミリを超え（桜谷 1,287，坂州 1,273，福原 1,109，日野谷 1,010 ミリ），少いところは 320 ミリで凡その分布は上記の台風雨と同様だった。

［注］徳島の月雨量 389.2 ミリは多い方から第 4 位である。

1943 年（昭和 18 年）9 月 20 日　台風

この台風は 20 日 12 時頃，宿毛付近に上陸した中心気圧 700 ミリ位の優勢なもので，九州・中四国の被害は大きく死者 768　不明 202 を出し島根と大分がその大部分を占める。

徳島の最低気圧 742.1 ミリ，最大風速は東南東の風 22.5m/s。

本県では 17 日の夜から雨が始まり，20 日の夕方で終った。各日とも雨量大きく特に 19 日には 300 ミリを超えたところ（川井，木頭）もあり，総雨量は剣山の東斜面で 500 ミリを超しその周囲の少い各方面は 100 ミリ以下だった。

被害　不明者 1，家全潰 7，床上 22，道 5，堤防 1，橋流 2，田畑浸水 2,400 町

1943 年（昭和 18 年）　多照

年内で平均以下の日照を見た月は僅かに 2 ヶ月という珍らしい年で，結局年合計として第一位多照年になった。

	1 月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
時 間 数	199	201	214	229	228	173	193	272	209	173	196	196	2482
平年より	+36 時	+47	+33	+34	+17	−1	−28	+27	+40	+7	+33	+35	+279
多照順位	6	2	5	−	−	−	−	−	7	−	6	2	1

1944 年（昭和 19 年）1 ～ 4 月　低温

昭和 18 年初の寒冬に引続いて本年も寒冬から始まった。

	1 月	2	3	4
月平均気温(℃)	4.8	4.1	6.4	12.4
低　い　順	−	9	4	6

1944 年（昭和 19 年）5 月 24 日　火災

徳島刑務所焼ける

1944 年（昭和 19 年）9 月 17 日　台風

この台風は 17 日朝九州南部に上陸し，松山付近を経て神戸に抜けた 720 ミリの優勢なものだったため，沿道に被害が多かった。徳島の気圧 736.9 ミリ南南東の風 34.3m/s。

雨は 15 日から始まり，16 日最も多く多雨域で 200 ミリを超えた。3 日間の総雨量は 300 ミリに達した。被害量は不明

1944 年（昭和 19 年）12 月 7 日　東南海地震

13 時 35 分に三重県南東沖（33°34.4′N　136°10.5′E）で発生した大地震で，マグニチュード 7.9，最大震度 6。有感範囲は北海道から九州地方に及び、熊野灘沿岸を中心に津波を伴った（尾鷲 6m）。

徳島では震度 4。日和佐での津波は上げ潮で始まり 2m だった。県下被害はなかった。

1945 年（昭和 20 年）　寒冬（少雨）

昭和 18 年から引続いて 3 年に亘る寒冬は本年に入って顕著になった。

	12 月	1	3		1 月	2
平均気温(℃)	6.1	2.6	2.4	最低気温の月平均(℃)	−0.8（低い順1）	−1.0(1)
低 い 順	5	2	1	最高気温の月平均(℃)	6.7　(2)	6.7(1)

特に2月9日の最低気温－6.0は70年来の第1位低極レコードになる。

尚12，1月共少雨（月雨量16.5及び8.3ミリ）だった。

1945年（昭和20年）6～7月　徳島市戦災

大戦末期のたい勢の内昭和19年11月30日に始めて東京空襲があってから次第に全国各都市に及び，徳島市は6.1から下記の様な連続戦災を被った。

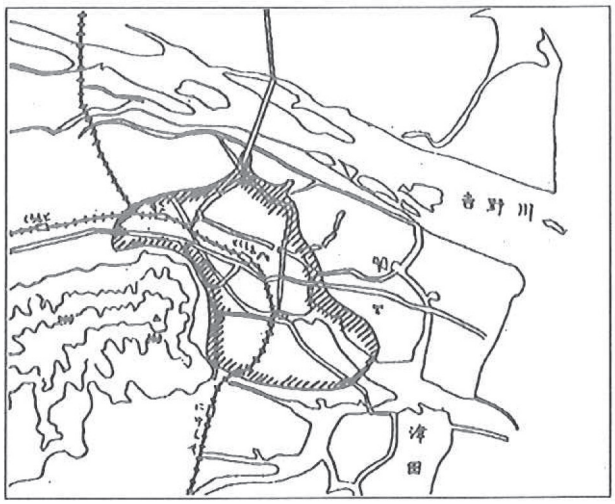
6.1　午前9時10分B29沖洲町末広町空襲　油脂焼夷弾

6.5　午前7時B29津田町　焼夷弾

6.15　吉野本町助任本町鷹匠町伊月町及び富田橋の一部空襲　焼夷弾　全半焼61戸死者4人負傷者40人

6.20　秋田町鷹匠町50キロ爆弾空襲

6.26　住吉島　助任本町　前川町　1トン爆弾空襲　全半壊500戸　死者200人　負傷者199人



7月3日　徳島市戦災地域図

7.3　22時過ぎB29　7～8機　徳島市中心部全域焼失　周辺の勝占上八万川内なども一部ら災中旬より毎日沖洲及び板野郡川内　北島　応神　松茂一帯　艦上機の機銃掃射

7.24　佐古三合，蔵本

7.25　末広町　津田新浜

7.3の被害　全焼戸数16,288戸　被災者70,295人　被災面積462万㎡（全市の62%）

死者1,001（男431　女553　男女不明17）重傷420　軽傷780　不明450

主な焼失建物　［官公署］県庁（2/3）外廊を残す　市庁（本館以外）徳島警察署（本館以外）消防署　徳島駅　税務署　郵便局　貯金局　裁判所　刑務所　専売局及び工場　43聯隊　憲兵隊　聯隊区司令部　蚕糸試験場　工業試験場

［公共施設］県立図書館　武徳殿　徳島公園千秋閣　市民病院　NHK（一部）

［小学校］新町　福島　師範付属　八幡南　助任　千松　内町（内部）

［幼稚園］内町　助任　福島　富田　千松

［学校］徳島中学校　高等女学校　市立高女　高工　師範学校

［神社］春日　忌部　護国　金比羅　八幡（下助任）天神社　通町蛭子　沖洲蛭子

［寺院］寺町は本覚寺の外全部，渭東1　渭北興源寺

［其他］新聞社（毎日，日々）川南造船　徳島工業　福島紡績

鉄道車両約100　市バス66台（残ったものは佐古浄水場に疎開してあった木炭車2）　徳バス61台中6残る

7月3日の空襲状況　午後10時すぎ宍喰監視所から警察部内の警備隊本部へ“阪神の攻撃を終った敵機は南方洋上へ脱出した”との連絡あり。このため警備隊本部では県下に発令していた空襲警報を警戒警報に切り替えた。そのとたんにどこにひそんでいたのか7～8機のB29が空襲警報の解除でうす明るくなった徳島めがけて猛然とエレクトロン，油脂焼夷弾数千発を投下したまっ先に常三島－城山を結ぶ一帯を襲い，ゆうゆうと低空飛行して眉山，佐古山等周辺から廻旋しつつ中心部に爆弾をたたきつけた。

県警察部では死体処理班を作って吉野川南岸の堤防外の河原に死体を集めて野火で焼いた。

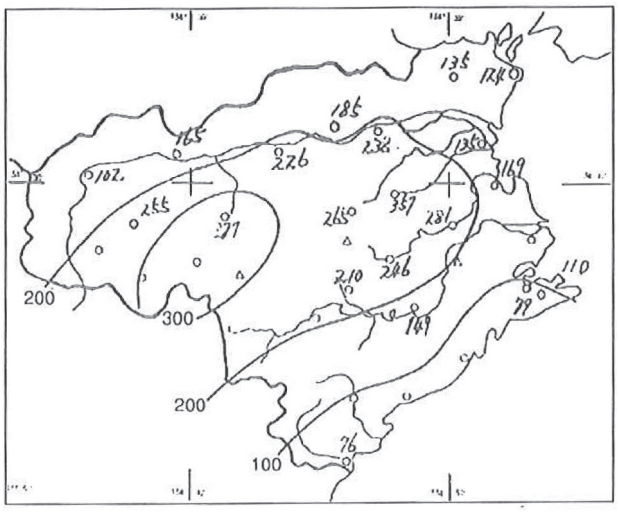
1945年（昭和20年）8月25日　台風

この台風は引続いて九州に上陸した親台風の前駆をした中心気圧980ミリバール程度のもので，

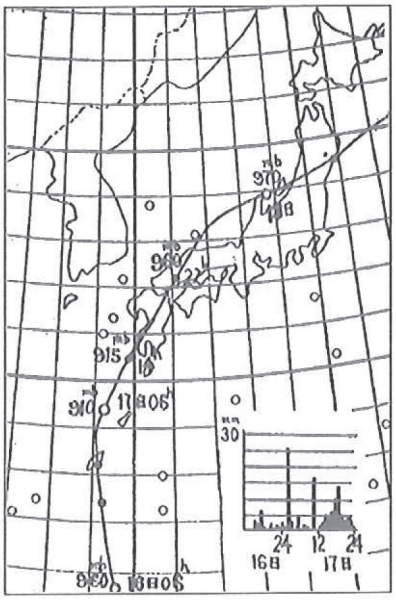
18 時に室戸岬から上陸し，本県西部を通り高松に抜けた。県内の雨量は 100 ～ 200 ミリ程度だったが短時間の強雨であり，雨の後南東の強風が数時間続いた。

徳島最低気圧 749.3 ミリ　最大風速は南南東の風 22.8m/s

1945 年（昭和 20 年）9 月 17 日　枕崎台風



9.16 ～ 17　2 日合計雨量



台風経路と徳島毎時雨量

17 日 14 時 40 分に鹿児島県枕崎で観測した最低気圧 687.5 ミリは従来の最深台風（室戸台風）の 684 ミリに比べても大差のない超大型台風であり，関東中部以西に大被害を出した（死者 2,473　不明者 1,283）。

風雨状況

本県では 16 日のおそくから雨が始まり，大体 17 日で終った。

雨量はそれ程でなかったが風は強く，且つ長時間に亘ったので被害を増加したものと見られる。徳島では 17 日の昼過から南東の暴風が始まり，台風が瀬戸内海へ出た 21 時過が最も強く南南東の風 29.3m/s を計ったが，日本海へ出た 18 日 1 時に北寄風となり以後次第に衰えた（15m/s 以上は 13 ～ 1 時の 13 時間と 6，7 時）。最低気圧 733.3 ミリ。この暴風雨で戦災後の徳島の仮小屋は殆んど倒壊した。尚吉野川は上流高知県の雨量が大きかったので記録的な最大洪水となり，池田 9.3（警戒水位 6.0）岩津 7.6（5.5）新町 5.1m（3.5）の水位を記録した。

被害　全国的な戦災直後のこととて，被害を増大した傾向はあらそえない。本県では人死者 44 人，傷者 18 人，不明者 3 人計 65 人，家全 1,166，半 1,417，流 30，床上 1,536，床下 1,324，計 5,982，橋流 7，道 32，堤防 4，田畑流 12，浸水 3,275 町［山城谷村史］地辷り

1945 年（昭和 20 年）10 月 10 日　阿久根台風

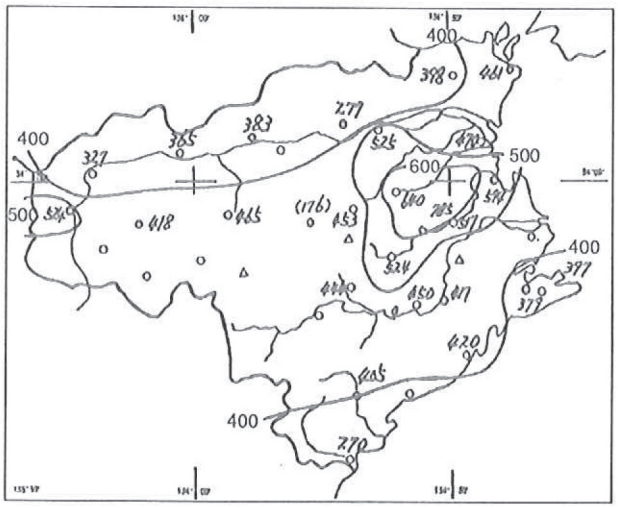
前台風に続いて鹿児島県阿久根町に上陸した大台風で，北海道以南に大きな災害を出した。前台風の風害に対し今度のは洪水害が大きかった。これは台風接近前の前線雨が加ったためである（全国の死者 377 人　不明者 147 人）。台風は 10 日 14 時 22 分阿久根に上陸し，同地で 963.7mb を計り津軽海峡で消滅した。徳島の気圧 764.6 ミリ，最大風速は南の風 16.7m/s。

降雨状況　県下の雨は 7 日から始まったが，8 日の夜に最も激しく 10 日夜まで続いた。8 日から 9 日にかけての日雨量は 250 ミリ内外。尚 10 日も 100 ミリを超えたので県内大部分は 400 ミリ以上となり，勝浦川流域に最多雨域が出た。

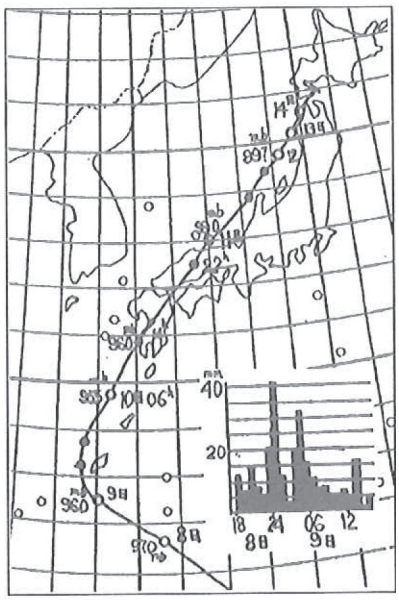
尚今回は吉野川上流域（高知県内）も 700 ミリを超える雨量となり，本県で床上 3m に及んだところもあり，其他県内の河川は殆んど氾らんした。

被害　死者 5 人，不明者 3 人，家全 43，半 22，流 6，床上 1,114，床下 4,521，橋流 8，堤防 9，

道 161，田畑流 160，浸水 11,664 町歩



10.7 ～ 10　4 日合計雨量



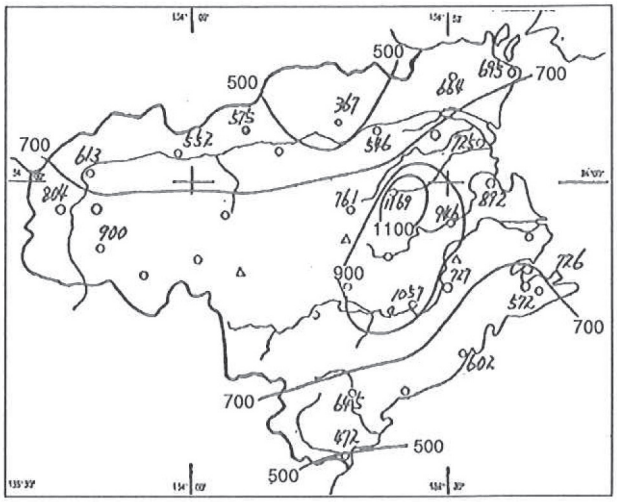
台風経路と徳島毎時雨量

1945 年（昭和 20 年）10 月　大雨

月初め南方海域から北上した台風が，5 日朝室戸岬沖で北東に転進し，本県では 2 ～ 5 日に雲早山付近の最多雨域で 200 ～ 300 ミリを計った。これに引続いて，阿久根台風が豪雨を降らせ，尚 17 ～ 23 日にも合計 100 ミリ内外の連続雨ある等で，今月の雨量は図の通りに鬼籠野・桜谷では 1,000 ミリを超える有様となった。

徳島では 725 ミリだったが，これは 10 月雨量としては第 1 位多雨量で，平年値 192 ミリの 3.8 倍に当たる。

［注］徳島で本年内に平年以上の降雨を見たのは，2 月，6 ～ 10 月等で結局年総雨量 2,423 ミリは多い方から第 4 位になる。



昭和 20 年 10 月雨量

1945 年（昭和 20 年）　凶作

年初からの低温が 6 月を除いて 8 月まで続き，その後猛烈な台風の影響を受けること二回，且つ 6 ～ 10 月の多雨であった。不幸は戦争終結前後の人心の動揺人手不足作業不備に加って，戦前戦後を通じて空前の一大不作を出現し，国民を飢餓線上に追いやることになった。

本県の水稲反収は 86 升で平年値の 1/2 にも及ばない（標準値の 47％程度）

［注］この冷害は北海道，東北（山形を除く）関東・北陸・長野・岐阜に甚しく，北海道の反収 6.9 斗（5 年平均の 44％）青森 8.1（47％）。

1945 年（昭和 20 年）　低温　多雨　多照

年初の寒冬から春夏に低温が続き，又秋には大型台風の連続と多雨のために，上記のような大凶作になった。結局年平均気温は 14.5 度で平年より 1 度も低く，昭和 11 年と同じ低極第 1 位となった。日照は反対に多い方だった。

次表で 1，2 月の平均気温は低い順で 2，1 位，又 1 月雨量は少い順で 5 位，10 月は第 1 位多雨尚，日照は多い順で 1 月 5 位，4，11 月，年計は夫々第 3 位である。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温(℃)	2.6	2.4	7.7	13.1	15.9	21.7	24.4	26.8	23.3	17.8	12.3	6.4	14.5
平年より	−2.4	−2.7	−0.2	−0.1	−1.6	+0.2	−1.1	+0.3	+0.3	+0.4	0	−1.1	−0.8
雨量	8	79	53	69	145	298	256	214	449	725	83	45	2,423
平年の	19%	125	54	54	104	150	130	116	154	376	89	83	144
日照(時間)	199	175	200	250	226	192	239	268	166	155	201	186	2,418
平年の	12.2%	113	110	128	107	110	108	106	99	93	123	115	112

1946 年（昭和 21 年）　麦不作

梅雨は 6 月 15 日から殆んど連日で 7 月 9 日に及んだ。雨量としてはそれ程大きなもので無かったが，日照は甚だ不足し，特に 6 月の 125 時間は少い方から第 7 位の記録である。これより以前の月々は，それ程異常天候と云えるものはなかったから，麦大不作の原因には終戦第一年の混乱の悪影響が大きいと考えられる。徳島の反収は，大麦 67 升，裸麦 88，小麦 80（平年値の 50%程度）

［注］梅雨あけから下記の台風来まで好晴が続いた

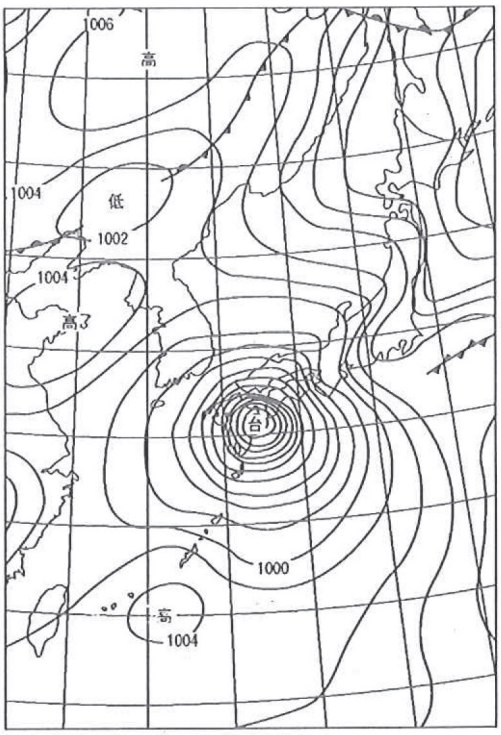
1946 年（昭和 21 年）7 月 29 日　台風

29 日の夕方，豊後水道を北上し米子に抜けた。中心気圧 960mb 程度のものだったが，短時間の強雨と強風とで災害を起した。

徳島最低気圧 742.2 ミリ，最大風速は南東の風 25.4m/s 総雨量 163 ミリ。県内の大部分が 300 ミリ以上を計り，東海岸と北西隅で少なかった。

日雨量最大は横瀬 405 ミリ，小祖谷 387 ミリ，木頭 360 ミリ。

被害　人死者 1，不明者 1，家全 32，半 25，流 3，床上 345，床下 862，道決 17，橋流 5，浸水田 2,756，畑 155



7 月 29 日 15 時

1946 年（昭和 21 年）12 月 21 日　昭和南海地震（津波）

4 時 19 分に和歌山県南方沖（32° 56.1′ N、135° 50.9′）の深さ 24㎞で発生した大地震（最大震度Ⅵ）で，マグニチュードは 8.0。津波によって中部より九州までに被害を出し，死者 1,362 全潰家 11,506 戸，余震も驚くほどの多数に上った。尚，震後地盤変動が発見され，四国では室戸岬等の最南端部が隆起した外は全般的に沈降した［別項昭和 25 年地盤沈下の項参照］

津波で堤防を乗りこえて民家へ突っ込んだ船（徳島新聞社提供）

南海道地震津波に襲われた浅川地区（徳島新聞社提供）

南海道地震津波の後の浅川地区（徳島新聞社提供）

南海道地震津波の後の浅川地区（海陽町提供）

南海道地震津波の後の浅川地区（海陽町提供）

本県では，海岸の震度Ⅴ（著しい水平動で外に出ても立って居られない程，又地割れや建物の被害が出た），内陸はⅣ，又余震は月内に有感55，無感230回程が観測された。

（以下は現地の話）

橘町　津波が来るまで30分位の間があった。大風のようなゴーゴーとい音がして潮が押し寄せた前面が泡立ち，1～2尺の高さのものが後から後からと続いた。1回目のは石垣を越すか越さぬ程度，20分程して第2波が又大風のような音を立てて，真黒な泥波で一番高く学校も浸水した。あとは30分位の間隔で5回繰返した。津波の高さ3.4m位。

日和佐町　地震後20～30分で津波が来た。30分間隔で，4回目のが最も大きかった（三回目とした話もある）。波高3m。

牟岐町　潮が上げるのに20分，引くのに20分程掛り，9時頃には終った。役場付近の家は大破し，大きな船が4隻堤の上に乗上げた。潮が街中に氾らんしたのは一回きり，波高4.5mだった。

浅川村　伊勢田川橋（コンクリート製）は中央から東部が25cm川上にずれ，水面上3.9mの欄干を越えた津波は4.7mの高さであった。部落は殆んど浸水した。震後10分程して津波がダブダブと押し寄せた。3回目が最も大きく，沖合の出漁船は4㎞位の距離の進退を繰返したそうである。

宍喰町　震後10分位に津波の第1波が来た。10分位おきに夜明までに9回来て大きいのは5回，最大は3回目だった。波高4.5m。

上記の波高を図にしたものは第1図にある。

第1図　津波の高さ（m）

千光寺に避難した浅川地区住民達（海陽町提供）

被　害

		人		住		家			堤防	道	橋	船	田	畑	木材流
		死(不明)	傷	流失	全壊	半壊	床上	床下	決	決	流	流	流	浸水	石
徳島市		2	5		23	22			1			3		60	500
名東郡		1			6	8									
小松島市		1	3	2	6	10	96	248	3	1	2	11		431	430
那賀郡		6	27	25	47	118	1844	174	3	12	6	83		954	1680
海部郡	三岐田	8	16	71	52	198	488	144	11		2	36		12	
	日和佐	1	1		5	7	28	58	3		1	4		30	
	牟岐	53	40	121	154	199	755	235		1		78	16	67	2930
	浅川	85	80	185	161	169	85	15	4			80	62	23	
	宍喰	9	58	9	10	107	97	155	7	3		35		96	120000
	鞆奥						42	38	1						1000
名西郡		4	1		8	6			4						
板野郡		15	6		77	31			2					48	
阿波郡		1	2		6	3									
麻植郡		3	3		7	10									
美馬郡		11	15		33	20									
三好郡					3	3									
※合計		202	258	413	602	914	3440	1057	40	21	11	330	78	1734 町	−

［注］※合計には海部郡の上記以外の地点を含む

発光現象其他，この地震では和歌山等でも地震の折に発光現象を見た。本県でも所々に記録がある（徳島，三岐田，日和佐）。又西牟岐では 1 週間位前から井戸水の低下した家もあった。

日和佐町恵比寿浜では地震後井戸が多少濁り減水した由。

浅川の津波記念碑（昭和 31 年 12 月浅川天神前道路傍に建てられたもの）

昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時 19 分の満潮時東経 135 度 6 分，北緯 33 度潮岬南々西約 50 キロの海底を震源とする大地震あり大地鳴動数分に及べり震後 10 分余りにして津波襲来第 1 波の極点 4 時 40 分波高 9 尺，第 2 波 5 時 12 尺，第 3 波 5 時 20 分 11 尺を記録す死者 85 人，傷者 80 人，住家流失 185 戸，全壊 161 戸，半壊 169 戸，特に東町新屋敷太田方面は殆んど流失，全滅の状態となる。其他船舶漁具家財及農作物の流失被害は計り知れず，当時復旧を思う者なし　時終戦後の物資不足の折多面に援助を受く　茲に銘を記し記念とす。

1947 年（昭和 22 年）　低温　少雨　多照

本年は極めて特徴のある年で，徳島で下表のように多くの記録を作った。

	1 月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温(℃)	5.6	3.0	6.7	12.3	16.3	20.5	25.9	27.0	23.7	16.3	10.6	6.1	14.5
平年差	+0.6	−2.1	−1.3	−1.7	−1.5	−1.2	+0.2	−0.2	+0.5	−1.2	−1.7	−1.4	−1.0
低い順	−	2	7	5	2	2	−	−	−	3	3	5	1
雨量(ミリ)	113	39	51	47	153	90	295	10	91	179	19	51	1,138
平年比	263	63	52	39	109	46	148	5	30	93	20	93	67
少い順	×	−	10	2	×	6	×	2	6	−	3	−	3
日照(時間)	126	199	185	265	219	181	259	312	173	181	202	153	2,456
平年比	77	129	102	136	104	104	117	127	102	109	124	95	112
多い順	×	4	−	1	−	−	−	2	−	−	2	×	4

［注］1.（4 月 22，3 の霜害）徳島は 23 日の最低気温が 2.1 度で，県内で桑，馬鈴薯等に多少の被害が出たものと思われる。

2.（夏期干ばつ)7 月下旬から 9 月上旬に至に少雨。特に海岸で干ばつとなり，8 月合計雨量(10 ミリ以内のところ）は，日和佐 0.1，宍喰 4.6，椿泊 8.3，鳴門 3.3，板西 6.1，鴨島 7.3 等で徳島も 10.4 ミリだった。尚 9 月雨量もかなり少なかったが、水稲は全体として干害を出す程ではなかった（反収 200 升並良）

尚関東以西の処々でも干害となり宮崎では特に厳しかった。

1947 年（昭和 22 年）3 月 25 日　火災　鴨島町

16 ～ 21 時に 150 戸を焼き，損害 3,000 万円と云われた。これは近年の大火である。

1948 ～ 49 年（昭和 23 ～ 24 年）12 ～ 2 月　暖冬

この暖冬は下記のように 12 月が最も顕著で，70 年中の 1 位を占める。月内に最高気温が 20 度を超す日は 21，26 日の 2 日あった。この暖冬の結果，麦類の徒長，漁業不振等を招いた。

	12 月	1	2
平均気温	9.8	5.9	6.9
平年より	+2.3	+0.9	+1.8
高い順位	1	10	6

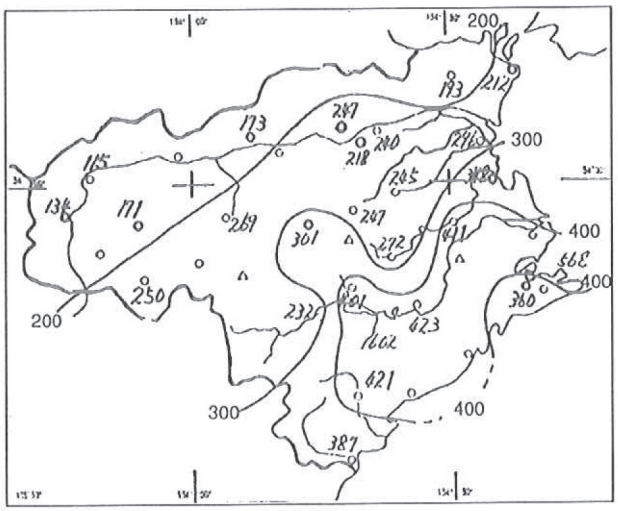
［注］この暖冬は，これから後 10 年を超す暖侯の皮切りとなったもので，全国的な規模で起っている。東京でも明治 8 年以来の高記録を出した。原因は，日本へ冬をもたらす北極寒気が，シベリアに停滞する暖気団に妨げられてまっすぐ日本に向かえず，大部分は北米へ南下したためで同地は非常な寒さに見舞われた由。

1949 年（昭和 24 年）3 ～ 4 月　寒春

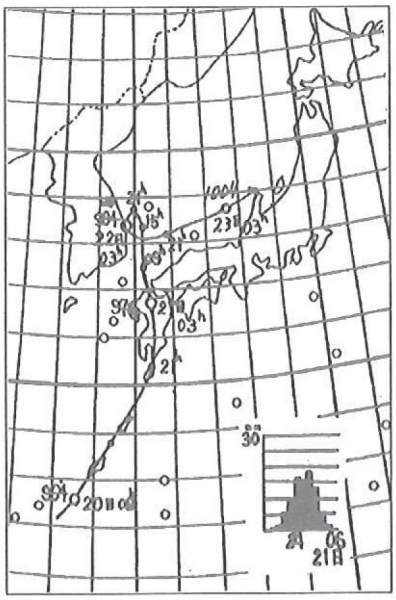
上記の暖冬に引続く寒春は，4 月に特に顕著に現れた。従って麦作には可成り悪い成績となった。反収大麦 101。

	3	4
平均気温（℃）	6.9	11.4
平年より	－1.1（低い順位 9 位）	－2.6（1）

1949 年（昭和 24 年）6 月 21 日　台風デラ（2 号）



6.18 ～ 20　3 日合計雨量



徳島毎時雨量

時期的にも早いものであり且つ青葉丸の沈没事故［注 1］を引起したことで有名な台風。沖縄付近で中心気圧 960mb の最深示度に発達してから図のように北上した。この台風の接近前，本邦の南方洋上にあった梅雨前線が 15 日から北上して太平洋岸に雨を降らせた。これに引続いて台風襲来となったため，北陸から東北の日本海側，北海道を除いた各地で大きな被害となり，死者 202 人，不明者 216 人を出した。

徳島の最低気圧　745.9㎜最大風速は南の風 22.6m/s。

風雨状況　15 日から 16 日にかけて，梅雨前線の活動による雨は 60 ～ 100 ミリ。次いで 18 日から 19 日は台風の前ぶれで各日 100 ミリを超えたところが多く，20 日から 21 日朝までの台風直接の雨は 100 ミリ内外だった（18 日宍喰 260，19 日椿泊 300，20 日鬼籠野 217 ミリ）。

風は台風が大分の西にくるまで弱く，その後山口県沖合に出るまでが強い（上図太経路区間が徳島 15m/s 以上）。

被害　人死者 4，不明者 6，家全 35，半 21，流 4，床上 710，床下 2,358，田流埋 884，畑 2718，田冠水 9,584，畑 6,774，道 324，橋 44，堤防 166，山くずれ 31

［注］1．20 日 21 時高浜港を出発した川崎汽船門司高浜航路の定期旅客船青葉丸（599 屯）は船員 48 名客 93 名を乗せ 21 日 03 時頃大分県姫島東方 10 マイルの海上で沈没し助かったものは僅かに 3 名に過ぎなかった。

2．今月徳島の雨量は 464 ミリは多い方から第 1 位である。

1949 年（昭和 24 年）7 月 30 日　大雨（台風ヘスター）

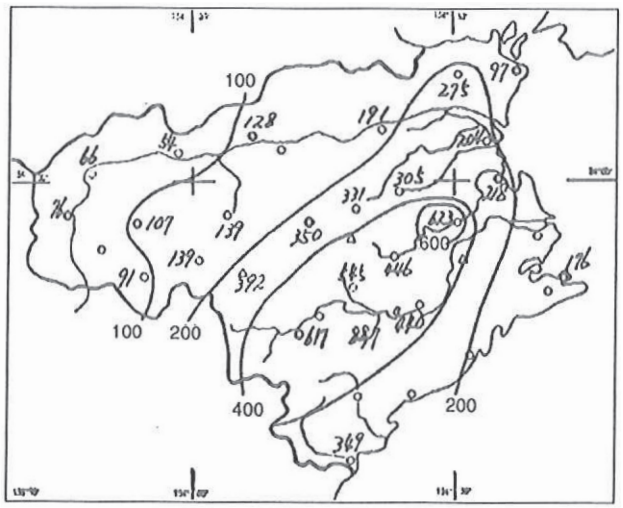
三重県に上陸した最低示度 980mb の弱い台風で，30 日若狭湾に入って消滅したが，その名残りでこの夜大雨となった。県内大部では，100 ミリ以下の雨で終ったが，岩倉で 236 ミリを計り，半田町付近に集中大雨して下記のような被害を出した。人死者 10，傷者 12，

明者 2，家全 11，半 23，流 15，全焼 1，床上 216，床下 767，田流埋 219，冠水 531，道 55，橋 36，堤防 65，山崩 27，鉄道 13，通信 10，船流 7

1949 年（昭和 24 年）8 月 16 ～ 18 日　台風ジュディス（9 号）

デラ台風と似た経路をとって，15 日九州南部に上陸し長崎を抜けた。中心気圧 960mb の台風で，当地では風は余り吹かなかったが（南東の風 14m/s），16 日以降の雨は強く，日雨量最大は，15 日木頭 150，16 日桜谷 475，17 日横瀬 411，18 日日野谷 270 ミリ等で那賀川上流では図のように 600 ミリを超えた。

被害　不明 1，家全 1，半 5，床上 1,212，床下 1,674，田流埋 253，冠水 3,105，道 55，橋流 24，堤防 20



8.15 ～ 18 のうち 3 日合計雨量

1949 年（昭和 24 年）11 月 23 日　風雨

台風アレン（22 号）はかなり南方海上を通ったので，県内の雨は 50 ミリ内外。風も大したもので無かったが，次のような被害が報告されている。不明者 3 人，床下浸水 20，橋流 5，船流 3

1949 ～ 50 年（昭和 24 ～ 25 年）12 ～ 5 月　温暖

暖冬の第 2 年目は次の通り

	12 月	1	2	3	4	5
平均気温(平年差)(℃)	8.1（+0.8）	6.7（+1.8）	5.8（+0.8）	8.1（+0.3）	14.4（+1.0）	18.8（+1.1）

2，3 月は左程ではなかったが，1，4 月は高い方から夫々第 5 位，5 月は第 4 位であった。特に 1 月中旬から 2 月の上旬にかけての平均は 7.2 度で，平年より 2.6 度の高目となった。1 月 28 日に観測した最高気温 21.5℃は，1 月として第 1 位の高極気温である。温暖は同時に多雨と結びつき，特に 1 月雨量 133 ミリは第 1 位多雨の記録となる。

［注］上記の暖かさに加え，5，6 月陰曇多雨であったため，麦作は近年第一の不良となっている

1950 年（昭和 25 年）1 月 30 日　低気圧（風雨）

30 日の朝黄海南部に出て来た低気圧は，日本沿岸沿いに北海道に進み，31 日の内に 24mb も発達する珍らしい荒れ方で，徳島で最大風速南の風 17.4m/s に達し，日雨量 86 ミリの第 1 位記録を立てた。

この時の被害は　人不明者 2，家全 2，田畑流埋 1，冠水 103，道 3，橋 4，山崩 3

1950 年（昭和 25 年）3 月 13 日　火災

徳島市憲法記念館焼ける

1950 年（昭和 25 年）4 月 16 日　山火事

数日来乾燥続きの折柄，16 日県内各所で火災が発生した。牟岐町の山火事は 17 日 11 時頃漸く鎮火したもので，民有林 500 町歩を焼いた。(1,500 万円)

1950 年（昭和 25 年）5 月 2 ～ 3 日　低気圧（大雨）

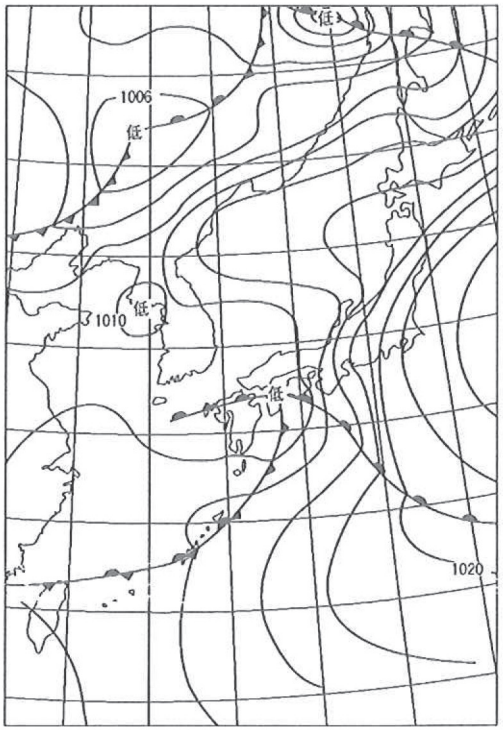
弱低気圧が九州に接近し，関東沖の高気圧から吹出しの東南東の風は，2 日の夜から 3 日午前に 15 ～ 16m/s に達した。又雨も那賀川中流で局地的に 400 ミリを超える等で，多少の被害を出した。

水死 1，床下 5，道 11，橋 2，麦田浸水倒伏 4,200 町，減収 1 万石

1950 年（昭和 25 年）5 月 13 日　うねり

台風ドリスが 28N139E 付近を北東に進行中（13 日 15 時），海部郡阿部港に押寄せた 3 ～ 4m の高波で，小型漁船 7 隻沈，大破 9，其他 40 の被害がある。

［注］台風ドリスは 12 日 9 時に転向し午後沖ノ鳥島付近から北東進 14 日 0 時に鳥島の東を通過した。



5 月 3 日 21 時

1950 年（昭和 25 年）5 月 27 日　低気圧（大雨）

太平洋沿いに進んだ低気圧による豪雨は，椿泊－川上の線で 250 ミリ程度になり水害を出した。家全 13，半 3（以上橘町），床上 26，床下 126，田流埋 11，冠水 540，道 17，橋 5，堤防 7，山崩 5，鉄道 1（牟岐線）

1950 年（昭和 25 年）6 月 4 日　ひよう

日和佐牟岐方面に珍らしい降ひようがあり，野菜甘藷等に被害が出た。煙草は，日和佐，赤河内各 2 町歩，牟岐 1 町歩全滅した。(150 万円)

1950 年（昭和 25 年）7 月 21 日　台風グレイス（8 号）

この台風は 20 ～ 21 日に九州西方を北上し，那賀川上流域で 17 ～ 21 日の 5 日間に 600 ミリ以上の大雨を降らせ被害を出したが，一般には少雨（100 ミリ程度）であった。徳島の最低気圧 753 ミリ，最大風速は南東の風 19.3m/s，木頭雨量 18 日 105，19 日 94，20 日 225，21 日 218 ミリ，被害　道路，山崩，橋流等 81 万円

1950 年（昭和 25 年）7 月 27 日　台風ヘリーン（9 号）

この台風は九州南西海上に接近してぐずつき，其後西に移動した変り種で，雲早連山の多雨地帯で 150 ミリ以上の日雨量を見た。山間部で道路山崩等，多少の被害があった。徳島の最低気圧 989mb，最大風速は東南東の風 21.1m/s，川井 27 日 177 ミリ

被害　田畑冠水 15 町（阿波郡八幡町），煙草 3 反倒伏（美馬郡三島村），道 3 ヶ所

1950 年（昭和 25 年）8 月 6 日　熱低

7 月から 8 月にかけて，例年よりはるかに高緯度で多数の熱帯低気圧が群発した。特に 8 月中に 18 ヶの発生が見られる。この内の一つが 6 日室戸岬の西から四国に上陸し，日本海へ抜けた折，本県に大雨を降らせた。7 日 10 時に計った日雨量は，最多雨地川井で 434 ミリ，其他川上 307 ミリ，鬼籠野 296 ミリ，市場 273 ミリと県の中央部の南北に多く，東西に減少し 100 ミリ以下となる。このため阿波麻植の被害が大きく，那賀川も増水したが吉野川本流は大して影響なかった。

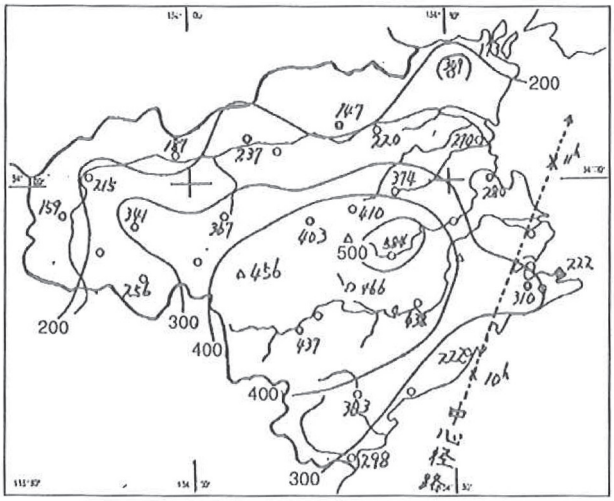
被害　人不明者 1，傷者 3，家全 8，半 7，床上 250，床下 1,567，田畑流埋 71，冠水 827，道 56，橋流 8，堤防 10，山崩 10

1950 年（昭和 25 年）8 月 20 日　熱低

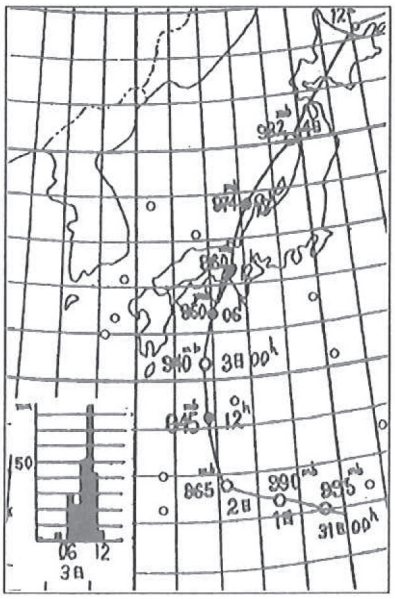
19 日から 20 日に四国中部を北上した熱低は，県内中央部の多雨地で 100 ミリ程度の雨を降らせ少被害を出した。

死者 1 人，堤防 1，船沈 1

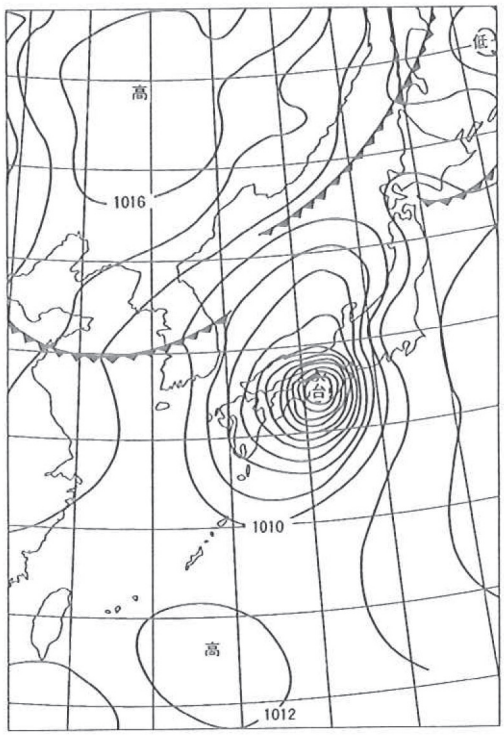
1950 年（昭和 25 年）9 月 3 日　台風ジェーン（28 号）



9.1 ～ 3　3 日合計雨量



徳島毎時雨量



9 月 3 日 09 時

B クラスの台風であったが，大阪湾に高潮を起こす最悪コースをとって阪神地区に大被害を出した。

（死者 398 人，不明者 141 人）

風雨状況　31 日から前線による雨が降っていたが，殆んどは台風通過の 3 日に集中した。徳島では 10 ～ 11 時に 86.9 ミリの記録的な強雨があり，同時に最大風速北北西の風 29.2m/s を観測した。尚 15m/s 以上の暴風はこの前後 5 時間に過ぎなかった。

徳島の最低気圧 969.6mb（10 時 47 分），1 ～ 3 日の合計雨量は図の通りで，雲早山周辺に最大雨域が出ている。この雨は徳島と同様に台風中心通過時の 3 日 09 ～ 12 時に集中し，数十年に見ない強雨であった由。日雨量は 2 日福原 382，川井 321，鬼籠野 297，下分上山 293，一宇及小祖谷 280，3 日桜谷 291，日野谷 282 ミリ

河川状況　吉野川は上流で雨量が少なかったが，最高水位は池田 5 m，脇町 8.2m，新町 3.95m。鮎喰川は大氾らん。

那賀川　上流の大雨で稀な高水位となった。宮浜 18.5 古庄 6.2　富岡 4.1　豊益 4.95m。桑野川も同様に氾らんした。

被害　土木 24.543（億単位）農地農業施設 20.618　農産物 13.3687（水稲減 19 万石）

水産　漁船は北灘と浅川が遭難多く 3,635 トン　資材 413,349 貫

林産　林道 264km　山林 1039 町　木材 10.75 万石　其他計 10.457 億

外に民間事業場 83 件其他で合計 85 億となり，官有施設を加えて 100 億円の台になる由。

人死者 28，傷者 282，不明者 10，家全 451，半 2,138，流 85，床上 7,626，床下 35,123，非住家

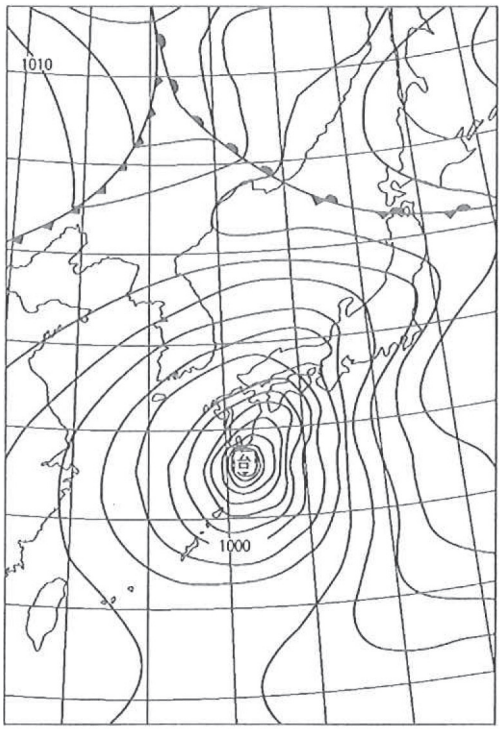
885，田畑流埋 931，冠水 13,638，道 536，橋 127，堤 225，山崩 45，通信線 42，電柱 326，船流 61，破 303，その他 42

内訳	死	不明	軽傷	全潰	半潰	流失	床上	床下
徳　島	7	6	11	11 戸	30	3	2,414	18,958
鳴　門	2		10	19	78	1	467	3,169
名　東			51	19	44		357	1,090
勝　浦	5	1	68	76	596	40	1,840	3,555
名　西			8	17	65	3	63	191
那　賀	2	3	68	101	537	28	1,564	3,825
海　部	1		8	22	153		212	598
板　野	2		38	120	343	5	568	1,313
阿　波	3		15	32	130		41	1,099
麻　植				19	87		33	664
美　馬	4		4	10	46	5	29	361
三　好	2		1	5	29		38	300
計	28	10	282	451	2,138	85	7,626	35,123

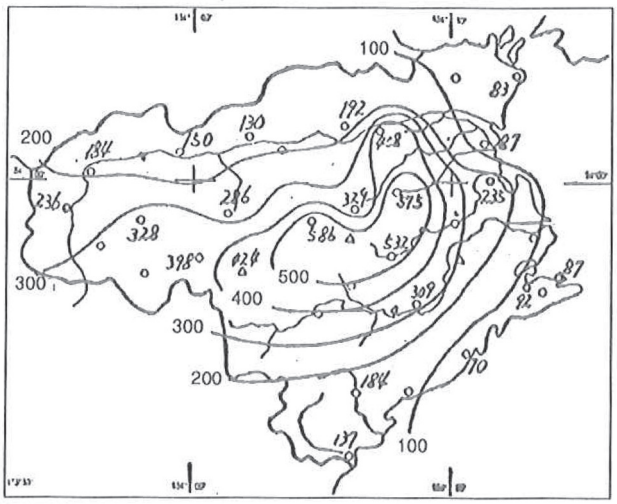
水稲被害　16,950 町は全体の 60.3%　甘藷 3,032 町，雑穀 2,909，蔬菜 1,070，果樹 1,341

高潮　湾奥の大阪市では 2.6m だが，徳島県下では大体 1.5m（豊益検潮所では 1.25m）。このため本県の海岸で護岸の決潰，水田の潮入り等多数に上った。範囲は日和佐より北の海岸（この範囲は第二室戸台風と非常に似る）

1950 年（昭和 25 年）9 月 13 日　台風キジア（29 号）



9 月 13 日 21 時



9.12 ～ 14　3 日合計雨量

ジェーン台風の稍南方に発生し，13 日九州内陸を縦断して日本海に抜けた。最低気圧 945 ミリ，九州通過中は 960 ミリだった。徳島最低気圧 1,000mb，最大風速は南東の風 24.7m/s

風雨状況　300㎞以上西方を通ったにもかかわらず，強い南東風を長時間吹かせた。

15m/s 以上は 13 日 08 時～ 14 日 07 時の 24 時間。又この南東風は，本県の山岳地帯に大雨を伴ない，24 時間最大雨量は 14 日鬼籠野 378 ミリ，川井 342，13 日福原 339 ミリ等，尚 12 ～ 14 日の総計は

上図の通りである。

被害　吉野川上流の雨量も多く，県内各河川凡て警戒水位を突破し水害が発生した。一方時期的にも最も海水面の高い折から，二日間に5回の高潮の侵入した所があった。

人死者4，傷者24，不明者1，（羅災者総数40,579）家全40，流2，半168，浸水8,434，流埋田66，畑245，冠水田3,633，畑1,831，道148，橋44，堤防19，木材流4,700石，船5,535隻

［注］1．本月は上，中旬両度の台風によって，県内の日雨量100ミリ以上となった日は2，3，12，13, 15等であり, 最多雨地の月量は1,000ミリを超えた（桜谷1,412, 福原1,415, 鬼籠野1,165, 川井1,100，日野谷1,027）。一方海岸及吉野川流域は400～500ミリだった。

2．上記のように多数の台風に見舞われたので本年の水稲収穫量はかなり悪くなり，反収172升（標準値の93%程度）。

1950年（昭和25年）　地盤沈下

地盤変動量分布図

昭和21年々末の南海道大地震によって発生した四国の地盤沈下（南端の室戸岬のみは反対に隆起）は, 地震後徐々に進行し, 25年の前に終った模様である。本県については，昭和23年に大部分が，24年に残りが完了したらしく，小松島検潮記録はその後大きな変動は見られない。四国四県の被害額は840億位で，高知が最も大きく60%愛媛之につぎ24%香川，徳島は同率8%で最少である。国土地理院が県内の一・二等水準点の測量成果から出した県東部の沈下量は, 30cm±3cm位である。［尚特に海岸で顕著な沈下（多くは40～90cm）を伝えるところは，地盤の軟弱なために構築物の重さによる沈下部分が多いのではないかと見る専門家もある。］地盤沈下のために引起された被害は，人家農地塩田護岸港湾と非常に広い範囲に亘る。大規模にかさ上げした田地は次の通り。

	松茂　徳永　牛屋島	徳島住吉　小松島金磯新田	坂野　今津　橘南新田　浅川
客土	40cm	30～35	30